仙台市文化財調查報告書第171集

富沢·泉崎浦·山口遺跡(5)

——富沢遺跡第78次·80~85次発掘調査報告書——

1993年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第171集

富沢·泉崎浦·山口遺跡(5)

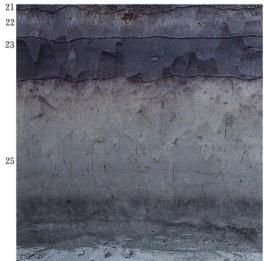
——富沢遺跡第78次·80~85次発掘調査報告書——

1993年3月

仙台市教育委員会







富沢遺跡第78次調査(Ⅲ区)基本層序

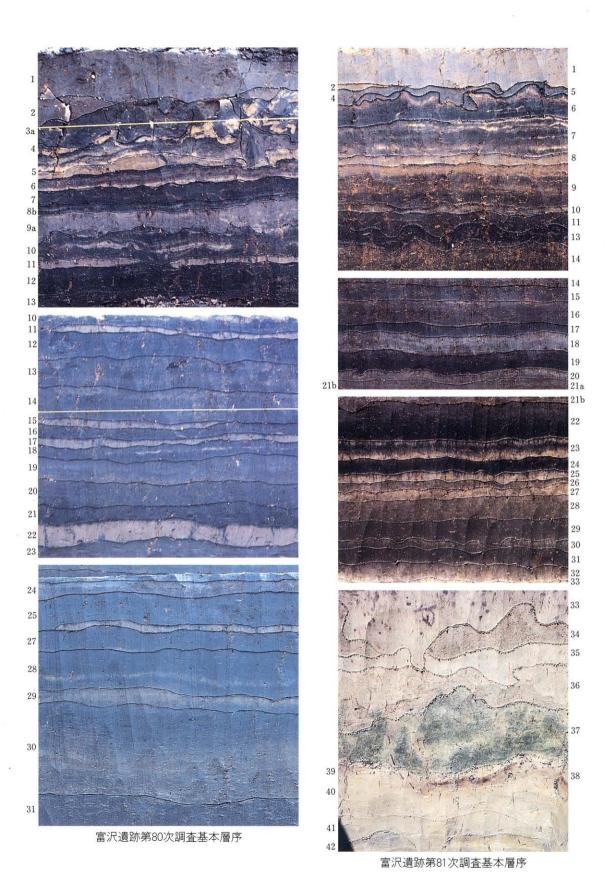


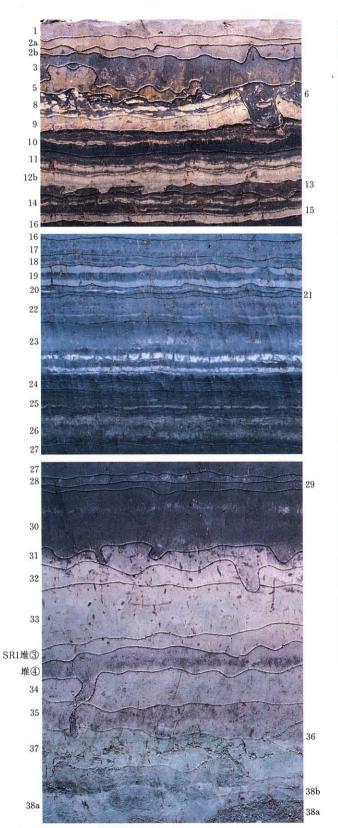
富沢遺跡第78次調査(I区)基本層序



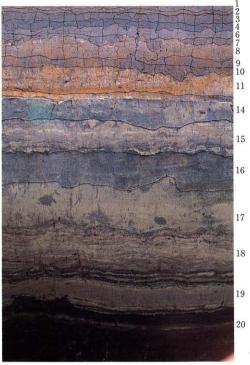


富沢遺跡第82次調査基本層序

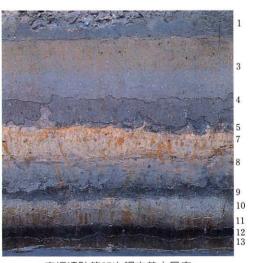




富沢遺跡第83次調査基本層序



富沢遺跡第84次調査基本層序



富沢遺跡第85次調査基本層序

序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しましては、多大なるご理解とご協力をいただきまして、誠に感謝にたえません。

本市の南東部に位置します富沢地区は、かつては豊かな田園地帯でありました。ところが、昭和50年代の土地区画整理事業を契機といたしまして開発が急速に進んできました。特に昭和63年の地下鉄の開業以来、ますます都市化が進展してきております。

富沢遺跡は、このような開発に伴う事前調査で水田跡が発見されて以来、年毎に調査を行ってきました。昨年度までに行われた調査は、79箇所を数え、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡や、2万年以上前の氷河時代の森や人々の生活の跡の発見など貴重な成果をあげてきております。

このようなもとで、平成4年度は富沢地区で6箇所の調査を行い、本報告書はその調査成果をまとめたものです。今年度も弥生時代中ごろの水田跡が3箇所で確認され、富沢地区における初期水田の様子が判ってきました。

ご存知のように仙台市には、私たちの祖先が創造し、伝えてきた貴重な文化遺産が数多くあります。これら先人の残した文化遺産を保護し、活用しつつ後世に残していくことは、私たちに課せられた責務と考えております。教育委員会といたしましては、市民のみなさまや関係機関と共に手を携え、守り育てて生きたいと考えておりますので、今後ともみなさまのご協力をお願いいたします。

最後になりましたが、本書が社会教育や学術研究の場で多くの方々に活用され、お 役に立つことを切望し、また、発掘調査や報告書の刊行に際しては、多くの方々のご 協力、ご助言を頂ましたことを心から感謝申し上げ序といたします。

平成5年3月

仙台市教育委員会 教 育 長 東海林 恒 英

例 言

- 1. 本書は、富沢地区発掘調査受託事業である平成3年度富沢遺跡第78次調査(1次調査)、平成4年度富沢遺跡第78次調査(2次調査)、富沢遺跡第80次~85次調査の報告書である。
- 2. 報告書刊行のための整理作業は、文化財課調査第二係 佐藤甲二・五十嵐康洋、調査第一係 佐藤淳が担当し、編集は五十嵐康洋・佐藤淳が担当した。
- 3. 各種分析については、花粉分析を守田益宗氏、プラント・オパール分析・C14による年代測定を 古環境研究所に依頼した。
- 4. 本文の執筆分担は下記のとおりである。

守田益宗:第3章第1節

古環境研究所:第3章第2・3節

佐藤甲二:第2章第3 • 5節

五十嵐康洋:第1章、第2章第1·2·4·6·7節、第4章

5. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々に御指導、御助言をいただいた。(順不同、敬称略)

山田昌久、守田益宗、石本弘、酒井清治、藤原学

凡例

- 1. 周辺の遺跡図は、国土地理院作成の1:25,000「仙台西南部・東南部」を使用した。
- 2. 土層註記などに記している土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原:1976)を使用した。
- 3. 調査区でのグリット軸は任意方向のものであるが、同時に平面直角座標第X系による国土座標も 記している。また図中の方位は全て真北をさしている。
- 4. 遺構名については以下のような遺構略号を使用した。

SD-溝跡 SK-土坑 SR-河川跡

- 5. 層位の表記は基本層位を算用数字、遺構内堆積土を○数字で表した。
- 6. 遺構内の傾斜面は「 IT 」で表現しているが、 畦畔、自然流路については記していない。
- 7. 本文中での「灰白色火山灰」(庄子・山田: 1980)の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている(白鳥: 1980)。
- 8. 本文中の「擬似畦畔B」とは、水田畦畔の直下層(自然堆積層)上面に認められる畦畔状の高まりをさす。(斎野:1987)
- 9. 富沢地区の水田跡の認定基準に関しては、「水田跡の基本的理解-仙台市における水田跡の検出と認定-」(仙台農耕文化勉強会:1990)の認定基準に基づく。
- 10. 「泉崎浦遺跡」は、平成3年度以降は「富沢遺跡」に包括して調査・報告し、富沢遺跡の調査次数を与えている。なお、「泉崎浦遺跡」としての登録は従来通りである。

目 次

第1章 富沢・山口遺跡のあらまし	• • • • • • • • • • • • •		1
第2章 調査結果			7
第1節 富沢遺跡第78次調査			7
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土	遺物 4.	遺構の所属年代とまとめ	
第2節 富沢遺跡第80次調査			30
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土	遺物 4.	遺構の所属年代とまとめ	
第3節 富沢遺跡第81次調査			40
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土	遺物 4.	遺構の所属年代とまとめ	
第4節 富沢遺跡第82次調査			53
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土	遺物 4.	遺構の所属年代とまとめ	
第5節 富沢遺跡第83次調査			57
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土	遺物 4.	遺構の所属年代とまとめ	
第6節 富沢遺跡第84次調査			77
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土	遺物 4.	遺構の所属年代とまとめ	
第7節 富沢遺跡第85次調査			79
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土	遺物 4.	遺構の所属年代とまとめ	
第3章 分 析			
第1節 富沢遺跡第78次調査花粉分析			82
第2節 富沢遺跡第78次調査放射性炭素年代測定			84
第3節 富沢遺跡第78次、80次~85次調査プラント・	オパールタ	分析	85
第4章 まとめ			94
挿 図	目次		
第1図 周辺の遺跡3	第9図	Ⅰ•Ⅱ区3層上面平面図•断面図	·14
第2図 富沢・山口遺跡全体図5・6	第10図	I • Ⅱ区 5 層上面平面図 • 断面図	·15
	第11図	Ⅲ区 5 層上面平面図 • 断面図	·16
(富沢遺跡第78次調査)	第12図	S D 4 出土遺物	.17
第3図 調査区位置図・設定図7	第13図	S D18出土遺物	·17
第 4 図 基本層序 8	第14図	S R 2 出土遺物	·18
第5図 I・Ⅱ・Ⅲ区土層柱状図······10	第15図	I 区10層上面平面図 • 断面図	·19
第6図 I•I区3層上面平面図•断面図······11	第16図	S D28出土遺物	.20
第7図 SD3出土遺物······12	第17図	Ⅲ区14•15層上面平面図•断面図	·20
第8図 Ⅰ・Ⅱ区SK1・2・3・4・5断面図…13	第18図	Ⅰ•Ⅱ区18層上面平面図•断面図	·21

第19図	SD8出土遺物22	(富沢	遺跡第83次調査)
第20図	I • Ⅱ区19層上面平面図 • 断面図23	第49図	調査区位置図・設定図57
第21図	Ⅰ • Ⅱ区20層上面平面図 • 断面図24	第50図	基本層序58
第22図	I 区 S R 1 断面図25	第51図	調査区東壁断面図60
第23図	出土遺物(1)26	第52図	調査区西壁断面図61
第24図	出土遺物(2)27	第53図	調査区南壁・北壁断面図62
第25図	出土遺物(3)29	第54図	3 層水田跡平面図64
		第55図	3層水田跡水口詳細図65
(富沢)	遺跡第80次調査)	第56図	3層水田跡水口出土遺物66
第26図	調査区位置図 • 設定図30	第57図	5層水田跡分布域及び
第27図	基本層序33		上面自然流路跡平面図67
第28図	調査区断面図(北・西・東・南壁)…31・32	第58図	5 層水田跡出土遺物68
第29図	2 層上面平面図 • 断面図34	第59図	6 層水田跡水田域68
第30図	3 層上面平面図・断面図35	第60図	6 層水田跡出土遺物69
第31図	9 層水田跡平面図36	第61図	12 a 層水田跡平面図70
第32図	出土遺物38	第62図	13層水田跡平面図72
		第63図	13層水田跡出土遺物73
(富沢)	貴跡第81次調査)	第64図	下層調查区西•南•東壁断面図74
第33図	調査区位置図 • 設定図40	第65図	出土遺物75
第34図	基本層序41		
第35図	西壁断面図43	(富沢)	貴跡第84次調査)
第36図	東壁断面図44	第66図	調査区位置図・設定図77
第37図	北壁•南壁断面図45	第67図	基本層序78
第38図	S K 1 平面図 • 断面図46		
第39図	4 層水田跡出土遺物46	(富沢道	遺跡第85次調査)
第40図	4 層水田跡擬似畦畔 B • S K 1 平面図47	第68図	調査区位置図・設定図79
第41図	S D 1 平面図48	第69図	基本層序80
第42図	11層水田跡平面図49	第70図	SK1 • 2平面図 • 断面図 · · · · · · · 81
第43図	14層上面樹木片集中地点平面図51		
第44図	出土遺物51	第71図	イネのプラント・オパールの検出状況(1)…92
		第72図	イネのプラント・オパールの検出状況(2)…93
(富沢道	遺跡82次調査)		
第45図	調査区位置図 • 設定図53		
第46図	基本層序54		
第47図	S D 1 平面図 • 断面図 · · · · · · · 55		
第48図	出十遺物56		

表 目 次

第1表	遺跡地名表	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	
第2表	平成 4 年度富沢遺跡調査要項		<u>/</u>
第3表	富沢遺跡第78次調査 3 層上面土坑計測表 …	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	1
第4表	富沢遺跡第80次調査 9層水田跡計測表	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	3
第5表	富沢遺跡第78次調査 花粉·胞子出現表	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	8
第6表	ブラント・オパール分析結果(1)	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	8
第7表	プラント・オパール分析結果(2)		91
第8表	各層におけるイネのプラント・オパール密度と	: 稲作の可	能性9:
第9表	富沢遺跡第78・80~85次調査出土遺物集計表	••••••	
	写真図	版目為	ζ
遺構		(富沢)	遺跡第81次調査)
(富沢道	遺跡第78次調査)	写真19	4 層水田跡擬似畦畔B検出状況 ······· 109
写真 1	I 区北壁断面 ······ 103	写真20	SK1完掘状況109
三真 2	Ⅲ区東壁断面103	写真21	S D 1 完掘状況 109
¥真 3	Ⅲ区南壁断面103	写真22	11層水田跡検出状況 110
昇真 4	I 区 S D 8 土師器出土状況 ······ 104	写真23	11層水田跡完掘状況 110
真 5	Ⅱ区SD11・13完掘状況104	写真24	14層上面樹木集中状況 110
写真 6	II 区 S D 3 木製品出土状況 104	写真25	擬似畦畔B断面(北壁) · · · · · · · · 111
真 7	Ⅱ区SD4・18完掘状況105	写真26	11層水田跡畦畔断面(北壁) 111
季真 8	I 区 S R 1 樹木出土状況 105	写真27	11層水田跡畦畔断面(西壁) 111
真9	I区SR1断面105	写真28	11層水田跡畦畔断面(西壁) 111
至真10	Ⅲ区SD26検出状況 106	写真29	下層調査区断面(東壁) 112
[真]	Ⅲ区SD26、SK12完掘状況 106	写真30	下層調査区断面(北壁) 112
写真12	Ⅲ区SD28検出状況 ·······106	写真31	下層調査区断面(西壁) 112
(富沢遣	量跡第80次調査)	(富沢道	遺跡第82次調査)
7真13	西壁断面107	写真32	東壁断面113
7真14	東壁断面(2段目) 107	写真33	SD1完掘状況113
7真15	SD2 • 4 完掘状況 ······ 107	写真34	15層遺物出土状況 113
7真16	9 層水田跡検出状況 108		
7真17	9 層水田跡検出状況 108	(富沢遺	最 跡第83次調査)
写真18	9 層水田跡擬似畦畔 B 検出状況 108	写真35	3 層水田跡完掘状況
		写真36	3 層水田跡水口状況 114

写真37	5層分布域及び上面自然流路 114	(富沢道	遺跡第84次調査)	
写真38	6 層分布域 (8 層上面) 115	写真58	北壁断面	121
写真39	6 層分布域(9 層上面) 115	写真59	西壁断面	121
写真40	12 a 層水田跡検出状況 115	写真60	南壁断面	121
写真41	12 a 層水田跡完掘状況 116			
写真42	13層水田跡大畦畔 116	(富沢道	遺跡第85次調査)	
写真43	13層水田跡小畦畔 116	写真61	北壁断面	122
写真44	13層水田跡完掘状況 117	写真62	東壁断面	122
写真45	13層水田跡完掘状況 117	写真63	SD1完掘状況	122
写真46	13層水田跡完掘状況 117			
写真47	3 層水田跡段差断面(東壁) 118	遺物		
写真48	3層水田跡畦畔断面(東壁) 118	写真64	富沢遺跡第78次調査	出土遺物(1) 123
写真49	3層水田跡畦畔断面(西壁) 118	写真65	富沢遺跡第78次調査	出土遺物(2) 124
写真50	5 • 6層分布域断面(東壁) 118	写真66	富沢遺跡第78次調査	出土遺物(3) 125
写真51	12 a • 13層水田跡大畦畔断面(南壁) ··· 119	写真67	富沢遺跡第80次調査	出土遺物 125
写真52	12 a • 13層水田跡大畦畔断面(西壁) ··· 119	写真68	富沢遺跡第81次調査	出土遺物 126
写真53	13層水田跡小畦畔断面(北西コーナー) … 119	写真69	富沢遺跡第82次調査	出土遺物 126
写真54	13層水田跡小畦畔断面(東壁) 119	写真70	富沢遺跡第83次調査	出土遺物(1) 127
写真55	下層調査区断面(東壁)120	写真71	富沢遺跡第83次調査	出土遺物(2) 128
写真56	下層調査区断面(南壁)120	写真72	富沢遺跡第84次調査	出土遺物 128
写真57	下層調査区断面(西壁)120			
		分 析		
		写真73	プラント・オパール	頁微鏡写真(1) 129
		写真74	プラント・オパール	頁微鏡写真(2) 130

第1章 富沢遺跡・山口遺跡のあらまし

富沢遺跡は、仙台市南部の仙台市太白区鹿野・長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地(郡山低地)西部に位置し、北西部を丘陵、他を自然堤防で囲まれた後背湿地に広がっている。遺跡の総面積は、約90kaに及んでいるが現在は土地区画整理事業による盛土のため旧地形は見ることができない。盛土以前の標高は9~16mである。

昭和51年、本遺跡の南側の六反田遺跡で「アゼ状遺構」が検出され、その後、昭和57年には隣接する山口遺跡において仙台市では初めて水田跡が検出された。また、同時に富沢地区においても高速鉄道に関わる試掘調査、および本調査の結果から水田跡の存在が確認された。このため調査成果とともに地形的特徴を考慮して、昭和58年新たに「富沢水田遺跡」として登録された。その後、居住域等の検出によって昭和62年には「富沢遺跡」と改称され、平成2年には遺跡範囲の北東部が拡大されている。また、平成3年にはそれまで富沢遺跡の中央部微高地部分は「泉崎浦遺跡」として登録されていたが、共通する部分が多いところからその範囲を富沢遺跡に包括している。調査は昨年度まで79次の調査が実施され、その結果、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されている。さらに弥生時代の水田跡の2~3m下層では、旧石器時代、縄文時代の遺物も確認されている。今年度は第78次、80次~85次調査が行われ、そのうち第78次調査は昨年度からの継続調査である。

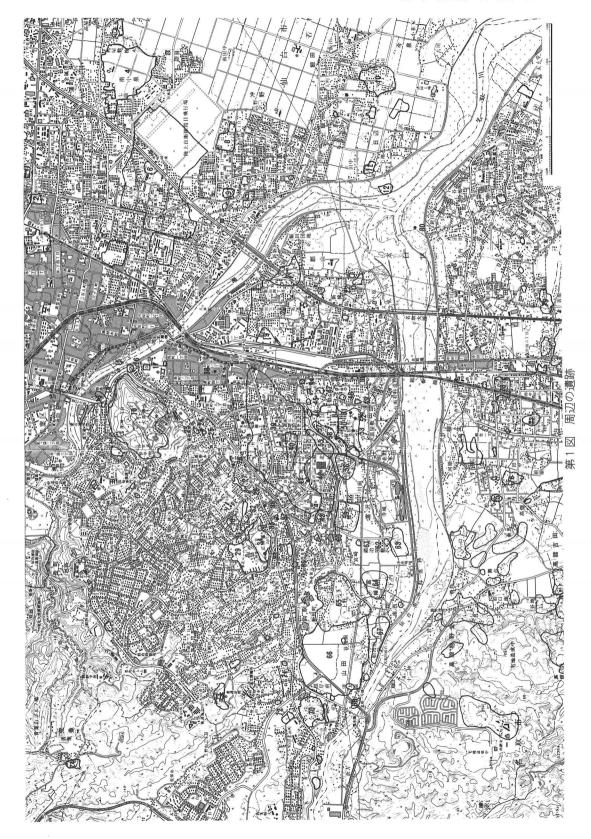
山口遺跡は富沢遺跡の南に隣接し、名取川旧支流笊川北岸の自然堤防上に位置している。遺跡の北側では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含んでいる。遺跡の総面積は約16haである。自然堤防上部分では縄文時代・奈良時代・平安時代の集落跡が、また、後背湿地部分では弥生時代・古墳時代・平安時代・中世・近世の水田跡が検出されている。

なお、富沢遺跡・山口遺跡の歴史的環境及び地形と地質に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書(斎野・豊嶋:1987) ・第30次調査報告書(太田:1991) ・山口2次調査報告書(田中:1984) に詳しい記載があるので、これを参照されたい。

1

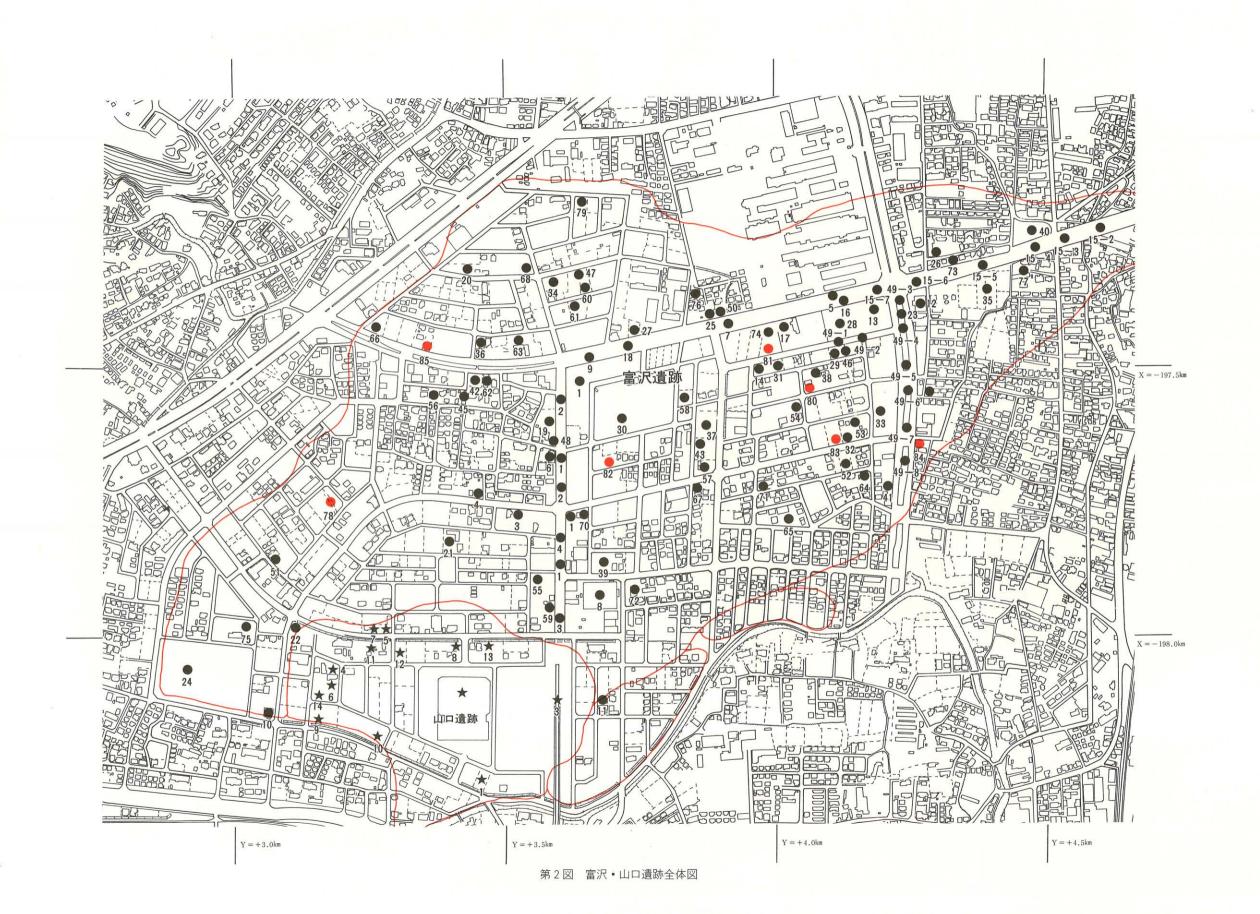
No.	遺跡名	立 地	年 代	No.	遺跡名	立 地	年 代
1	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良•平安•近世	41	教塚古墳	後背湿地	古墳(後)
2	陸奥国分尼寺跡	自然堤防	奈良•平安•中世	42	山口遺跡	自然堤防•後背湿地	縄文~中世
3	法領塚古墳	自然堤防	古墳(後)	43	富沢清水遺跡	自然堤防	奈良•平安
4	仙台東郊条里跡	沖積平野	奈良•平安	44	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良•平安
5	南小泉遺跡	自然堤防•後背湿地	縄文~近世	45	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	奈良•平安
6	遠見塚古墳	自然堤防	古墳 (前)	46	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安
7	若林城跡	自然堤防	古墳・中世・江戸	47	新田遺跡	自然堤防	奈良•平安
8	沖野城跡	自然堤防	中世	48	北屋敷遺跡	自然堤防	奈良•平安
9	神柵遺跡	自然堤防	縄文~平安	49	長町清水遺跡	自然堤防	奈良・平安
10	今泉遺跡	自然堤防	縄文(後)~近世	50	大野田古墳群	自然堤防	古墳(中・後)
11	日辺館跡	自然堤防	室町	51	王ノ壇古墳	自然堤防	古墳
12	日辺遺跡	河川敷	古墳 (中)	52	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳(後)
13	愛宕山横穴群	丘陵	古墳(末)・奈良	53	春日社古墳	自然堤防	古墳(後)
14	大年寺山横穴群	丘陵·	古墳 (末)	54	伊古田遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
15	宗禅寺横穴群	河岸段丘	古墳(末)	55	下ノ内浦遺跡	自然堤防•後背湿地	奈良•平安
16	根岸遺跡	河岸段丘	縄文	56	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安
17	兜塚古墳	自然堤防	古墳 (中)	57	六反田遺跡	自然堤防	縄文~江戸
18	茂ヶ崎城跡	丘陵	南北朝~室町	58	五反田古墳	自然堤防	古墳
19	西台畑遺跡	自然堤防	縄文・弥生(中)・古墳	59	富沢館跡	自然堤防	戦国
20	郡山遺跡	自然堤防	古墳(末)・奈良・中世	60	堀ノ内遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
21	北目城跡	自然堤防	室町・江戸	61	鍛治屋敷A遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
22	欠ノ上I遺跡	自然堤防•後背湿地	古墳・奈良・平安	62	鍛治屋敷B遺跡	自然堤防•後背湿地	縄文・奈良・平安
23	鹿野屋敷遺跡	丘陵	古墳•奈良•平安	63	六本松遺跡	自然堤防・後背湿地	奈良•平安
24	一塚古墳	後背湿地	古墳(後)	64	南ノ東遺跡	自然堤防•後背湿地	弥生•奈良•平安
25	鹿野一丁目遺跡	河岸段丘	縄文・弥生・奈良・平安	65	上野遺跡	河岸段丘	縄文(中)・奈良・平安
26	二塚古墳	後背湿地	古墳	66	山田条里遺構	河岸段丘	縄文・奈良・平安・江戸
27	砂押屋敷遺跡	河岸段丘	奈良・平安	67	船渡前遺跡	河岸段丘	縄文・弥生・奈良・平安
28	砂押古墳	河岸段丘	古墳	68	清太原西遺跡	河岸段丘	縄文•平安
29	声ノロ遺跡	丘陵	縄文(早・前)・弥生・平安	69	西台窯跡	丘陵	古墳•奈良•平安
30	土手内遺跡	丘陵	縄文~平安	70	山田上ノ台遺跡	河岸段丘	旧石器・縄文(早・前・中・後)・平安・江戸
31	土手内横穴群	丘陵	古墳•奈良	71	杉土手	丘陵	江戸
32	土手内窯跡	丘陵	古墳・奈良	72	北前遺跡	河岸段丘	旧石器・縄文(早・前・中)・平安・江戸
33	富沢窯跡	丘陵	古墳・奈良・平安	73	御堂平遺跡	丘陵	縄文・平安・中世
34	三神峯遺跡	丘陵	縄文(前・中)・平安	74	青葉山遺跡	丘陵	旧石器
35	金山窯跡	丘陵	古墳 (中)	75	松木遺跡	自然堤防	平安・中世・近世
36	金洗沢古墳	河岸段丘	古墳	76	関場遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
37	裏町古墳	河岸段丘	古墳 (中)	77	栗遺跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
38	金岡八幡古墳	後背湿地	古墳(後)	78	安久東遺跡	自然堤防	弥生~近世
39	富沢遺跡	後背湿地	旧石器~近世	79	後河原遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・奈良・平安・中世
40	泉崎浦遺跡	自然堤防•後背湿地	縄文・古墳・平安・近世	80	大塚山古墳	河川敷	古墳

表 1 遺跡地名表



調査次数	所 在 地	調査期間	調査面積	以	位置	杭A座標	現況	現標高	日標高	協力者	用	類画
富沢第78次(平3)	년 1 1 1 1	平成3年9月18日~12月18日	約 395㎡	5. 电子电子	Fig. 1	X = -197, 764.03	E	t -	t		出	亮
富沢第78次(平4)	张呵~」日10	平成4年4月15日~6月10日	¥5 292 ш²	夏 司冯泰 <i>込</i>	后 型 変	Y = 3,184.15	H ⊭	14. / m	14. / m	(以) 推工来	五十嵐	兼
富沢第80次	長町南3丁目	平成4年6月17日~7月30日	約 168㎡	後背湿地	東第	X = -197,536.30 $Y = 4,077.58$	州	10.3m	8.65m	極	五十嵐	戦
富沢第81次	長町南3丁目	平成4年7月7日~8月25日	約 178㎡	後背湿地	展	X = -197, 459.68 Y = 3,983.08	光	10.55m	9.82m	五十嵐 忠 順	佐藤	11
富沢第82次	長町南4丁目	平成4年8月3日~8月19日	約 43㎡	後背湿地	中央部	X = -197, 677.05 Y = 3, 703.59	光	11.5m	9.55m	(朝道路施設協会	五十嵐	业
富沢第83次	長町南3丁目	平成4年9月22日~11月17日	¥5 231 ш²	後背湿地	題	X = -197, 633. 60 Y = 4, 113. 63	知	. 10.5m	8.54m	(㈱三井不動産	佐藤	1] III-
富沢第84次	長町南1丁目210	平成4年9月18日~10月6日	約 30 ㎡	後背湿地	題	X = -197,652.38 Y = 4,285.36	光	10.64m	9.06m	大 石 駒 川	五十嵐	世
富沢第85次	鹿野3丁目19	平成4年10月13日~10月27日	約 21㎡	微高地緣辺	北西部	X = -197, 455.95 $Y = 3,368.88$	州	15.84m	14.38m	(株)佐藤商事	五十嵐	康祥

表2 平成4年度富沢遺跡調査要項



第2章 調査結果

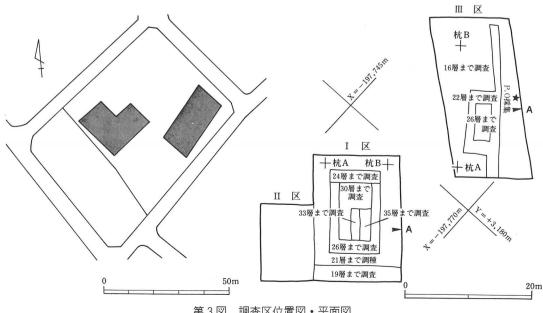
第1節 富沢遺跡第78次調査

1. 調查方法

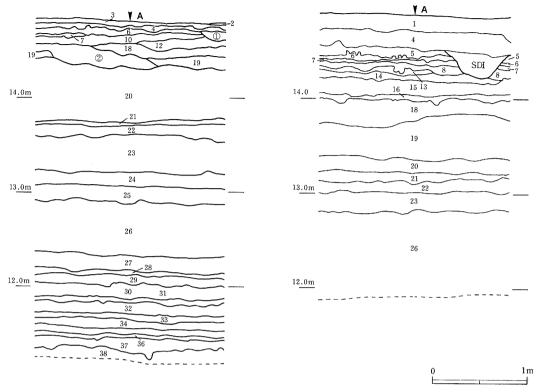
調査は2年間に渡って行われ、Ⅰ・Ⅱ区を平成3年度に、Ⅲ区を平成4年度に実施している。 それぞれの調査区の設定面積は合計約687㎡である(Ⅰ・Ⅱ区は約395㎡、Ⅲ区は約292㎡)。調 査は盛土及び1層中(旧水田耕作土)までを重機で排除し、以下は人力で行った。調査区内に は土層観察及び排水用の側溝を設けた。Ⅰ・Ⅱ区では19層まで調査区全面の調査を実施し20層 以下は14×20mの試掘区を設けて掘り下げた。(24層以下は、安全確保のため調査区を縮小し て35層まで調査を実施している。最下層面では約2×5mである。)。Ⅲ区では、16層まで調査 区全面の調査を実施し、17層以下は14×20mの試掘区を設けて掘り下げた(23層から26層まで は3×6mで実施している。)。遺構の測量は杭A・Bを基準にして実施している。なお、Ⅲ区 の基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している(Ⅲ 区杭A: X = -197,764.03m Y = +3,184.15m、杭B: X = -197,751.63m Y = +3,198.55m)_o

2. 基本層序

調査方法にもあるように2年間の調査であり、担当者も違うことから現場での層位の確定は



第3図 調査区位置図・平面図



第4図 基本層序

できなかったので、その後の整理作業によって共通した層序を作成している(基本層序表で特に記載のないものは、全面に認められる層位である。)。確認された層位は、全部で38層である。各層の土質は、20層より上では基本的にシルトである。21層から23層までは砂質であるがそれ以下は、粘土が主体となり植物遺体を含む層である。6~8層で灰白色火山灰が認められた。7層のものは8層上面のものが水田耕作によって巻き上げられたものと考えられる。現代のものを除く明確な水田土壌は確認できなかったが、3・5・6・7・9・15・16層は水田土壌の可能性が考えられる(その後の分析によって、14層も水田土壌の可能性が指摘されている。)。各層の傾きであるが、西から東への下り傾斜が認められる。特に I・II 区では西側に層が多くみられる特徴があり、西側から土砂の供給が多い地点であったと推察される。

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 3層上面(第6・8・9図)

3号溝跡-SD3-

〈遺構状況〉Ⅰ・Ⅱ区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-66°-Eである。幅は1.1

層序	色	調	土 質	層厚	酸化鉄	水田土壌	混 入 物	備考
1		褐(I・I区)	粘土質シルト	15	糸根状多量	0	マンガン粒・砂粒・炭化物微量	
	2.5Y3/3	暗オリーブ褐(皿区)						
2	10 Y R 4/2 10 Y R 6/8	灰黄褐 (I・Ⅱ区) 明黄褐 (Ⅲ区)	シルト	12	斑状多量	0	マンガン粒・砂粒・炭化物微量	
3	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト	12	斑状多量	?	マンガン粒・砂粒・炭化物微量	Ⅰ・Ⅱ区に分布
4	10 Y R	灰黄褐	細砂	20				Ⅲ区に分布
5	10 Y R 3/1	黒褐	粘土	6	斑状少量	?	マンガン粒・白色粒・砂粒	
6	10 Y R 4/1	褐灰	粘土質シルト	7	粒状少量	?	凝灰炭粒.マンガン粒.部分的に灰白色火山灰	
7	10 Y R 4/2	灰黄褐	砂質シルト	6	量管状少量	?	マンガン粒、灰白色火山灰ブロック状	Ⅲ区では不連続な分布
8	10 Y R 2/2	黒褐	シルト質粘土	12			マンガン粒多量	Ⅲ区に分布
9	10 Y R 3/3	暗褐	粘土質シルト	10	粒状少量	?	砂粒、擬灰岩粒多量	Ⅰ・Ⅱ区に分布
10	10 Y R 6/4	にぶい黄橙	粗砂	12	粒状多量		凝灰岩粒多量	Ⅰ・Ⅱ区に分布
11	10 Y R 4/4	褐	砂	10	粒状多量		凝灰岩粒多量	Ⅰ・Ⅲ区に分布
12	10 Y R 3/3	暗褐	シルト	17	斑状少量		凝灰岩粒多量	
13	10 Y R 3/4	暗褐	砂質シルト	6	7277			皿区で部分的分布
14	10Y R 2/3	黒褐	粘土	7	量管状	?	層上部にマンガン粒	皿区で部分的分布
15	10 Y R 4/3	にぶい黄褐	粘土	20	量管状少量	?	層上部にマンガン粒	皿区で部分的分布
16	10 Y R 3/2	黒褐	粘土	8	量管状	?	マンガン粒、植物遺体	Ⅲ区で部分的分布
17	10 Y R 3/2	黒褐	砂質シルト	20	#L 15 4V		1 2 7 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	Ⅲ区で部分的分布
			no page 1	20			10.2~1 cmの擬灰岩粒多量・I 区東部からⅢ区	血区 こ即カロフカイド
18	2.5Y5/3	黄褐	シルト	35	量管・管状やや多		にかけて砂礫・植物遺体	
19	10 Y R 3/4	暗褐	粘土質シルト	20			砂粒.凝灰岩粒多量	Ⅰ・Ⅱ区に分布
20	2.5Y6/3	にぶい黄	細砂	40			凝灰岩粒ブロック、砂礫、植物遺体	
	2.5Y3/1 5Y4/1 2.5GY5/1 10YR6/3 10YR5/3	にぶい黄橙	粘土質シルト、細砂	8			植物遺体	
22	10 Y R 2/1	黒	砂質シルト	15	管状多量		∮1 cu程の凝灰岩粒多量.植物遺体	
23	7.5Y5/1 7.5Y4/1	灰(I・II区) 灰(II区)	砂質シルト	30			凝灰岩粒. 植物遺体	
24	5 Y 4/1 5 Y 3/1	灰 オリーブ黒	粘土	15			植物遺体	
25	5 Y 2/1	黒	粘土	15			砂粒ブロック. 植物遺体	
26	10 Y 5/1 5 G Y 5/1	灰 (I・I区) 灰 (II区)	シルト質粘土	50			植物遺体	
27	5 Y 5/1	灰	粗砂. シルト	8				Ⅰ・Ⅱ区で部分的分布
	5 Y4/1	灰						
28	5 Y 5/1	灰	粘土・シルト・粗砂	3				Ⅰ・Ⅱ区で部分的分布
	7.5Y5/1	灰		-				2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2
29	5 Y2/1	黒	粘土	10			植物遺体	Ⅰ・Ⅲ区で部分的分布
30	5 Y4/1 5 Y3/1	灰 オリーブ黒	砂質シルト. 粘土	14			<u></u>	Ⅰ・Ⅱ区に分布
31	5 Y 2/2	オリーブ黒	粘土	6			植物遺体	Ⅰ・Ⅱ区に分布
32	5 Y4/1	灰	粘土	13			植物遺体	Ⅰ・Ⅱ区に分布
33	5 Y 3/1	オリーブ黒	粘土	8			植物遺体	Ⅰ・Ⅱ区に分布
34	5 Y 4/1	灰	シルト質粘土	10			植物遺体	Ⅰ・Ⅱ区に分布
35	5 Y 3/1	オリーブ黒	粘土	6			植物遺体	Ⅰ・Ⅱ区に分布
			粘土質シルト	6			植物遺体	I・Ⅱ区に分布
_	2.5Y3/1	黒褐	粘土	15				
-	2.5G Y5/1		和主 粘土質シルト	15			植物遺体	Ⅰ・Ⅲ区に分布
38	2.5G Y 5/1	オリーフ灰	和主質ジルト				植物遺体	Ⅰ・Ⅱ区に分布

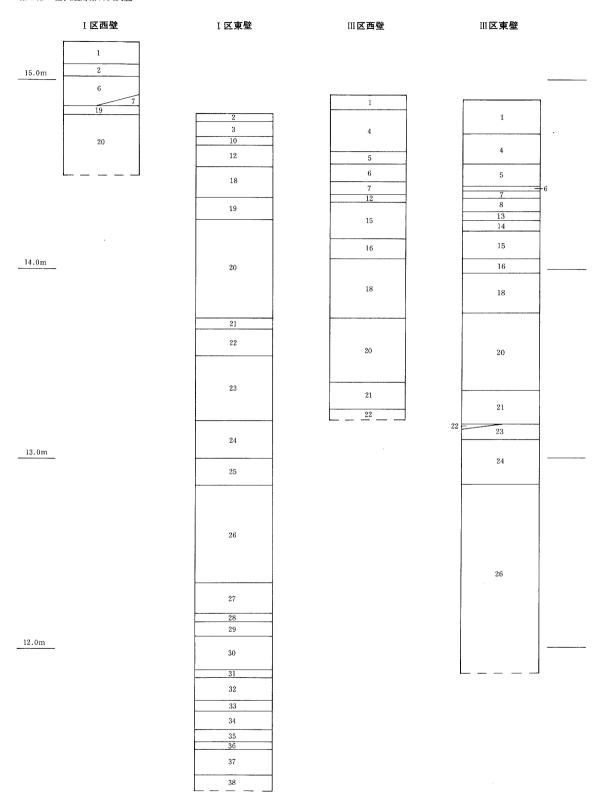
 \sim 2.4m、深さは約30cmである。堆積土は2層であるが、断面形状や堆積土の違いなどから新旧2時期の作り替えがなされたものと考えられる。また、SD3は、 $SK9 \cdot 10$ と重複関係にあり、これら全てより新しい。杭を2本検出しているが、この溝に伴うものであるかどうかは不明である。

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から陶器、木製品が出土している。(第7図)

陶器

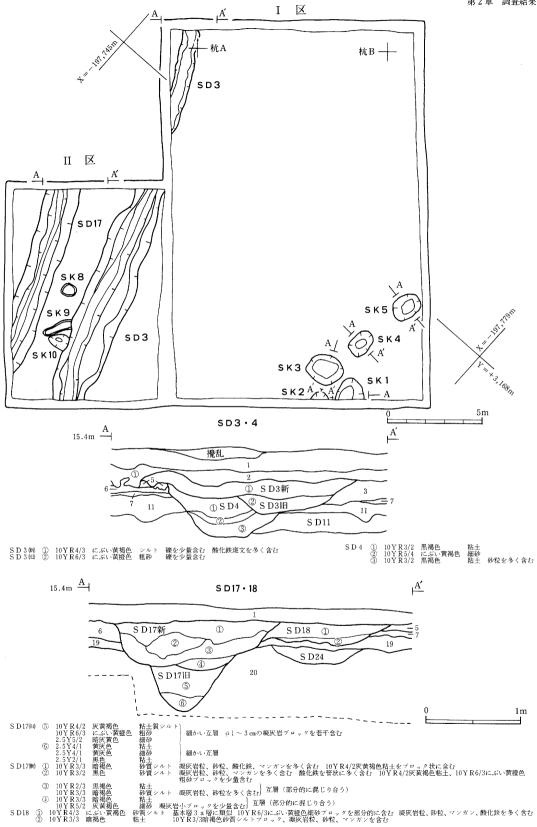
1は、相馬焼の灰釉皿である。見込みに印刻文、回線が認められる。時期は江戸時代後半以降と考えられる。

2は、堤焼のわら灰釉香炉である。時期は、江戸時代後半から末頃と考えられる。

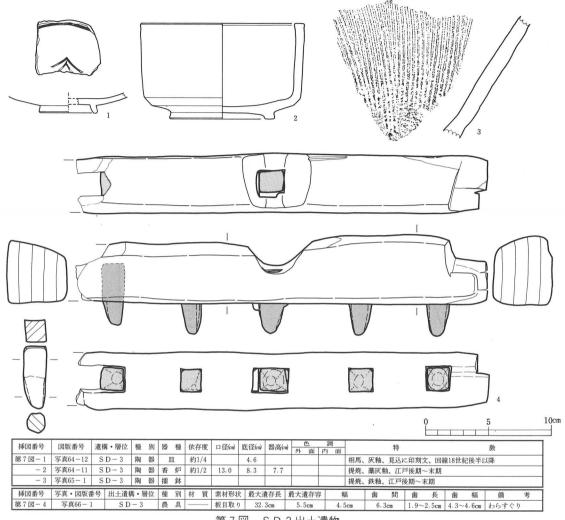


第5図 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区土層柱状図





第6図 I • II 区 3 層上面平面図 • S D 3 • 4 • 17 • 18断面図



第7図 SD3出土遺物

3は、堤焼の鉄釉擂鉢である。時期は、江戸時代後半から末頃と考えられる。

木製品

4は、木製農具で、底面から出土している。端部を一部欠損しているがほぼ完形と思われる。 遺存する最大長は32.2cm、高さは5.5cm、幅は4.5cmである。上部に柄を取り付けるくぼみが認 められる。下から歯を差し込む部分を約4.5cmの間隔でくりぬいてある。中心のくりぬきは、 歯を止めるためにくさび状の木片を差し込んである。歯の先端は、腐食しておりこのままの形 状で使われたかは不明である。形状や民俗例などから判断して藁を摺る農具(藁すぐり)と考 えられる。

17号溝跡-SD17-

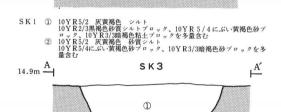
II区に位置し、直線的に延びる溝で、方向は $N-66^{\circ}-E$ である。幅は $1.6\sim2.0$ m、深さ約

1 mである。堆積土は 6 層確認されるが、堆積土の違いや断面が 2 段に下がることなどから S D 3 同様に 2 時期の作り替えがなされたと考えられる。遺物は出土しなかった。

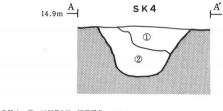
土坑は全部で8基検出されているが、平面形や深さなどに規格性は認められず、また、一度 に埋め戻されたような堆積状況を呈している。遺物は8基とも出土していない。これらの土坑 の性格については3層が水田跡の可能性も考えられるので、水田耕作に関係するものとも考え られるが、遺物も出土してないことなどから断定は控えたい。(第3表)

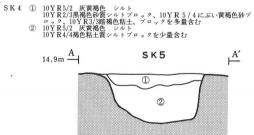
土坑名	地区	上端長軸(m)	上端短軸(m)	深 さ (m)	平面形	断面形	備考
S K 1	I			0.58	楕円形?	逆台形	遺物なし・調整区外
S K 2	I						遺物なし・調整区外
S K 3	I	2.0	1.5	0.5	不整楕円形	逆台形	遺物なし
S K 4	I	1.5	1.1	0.55	隈丸長方形	逆台形	遺物なし
S K 5	I	1.6	1.2	0.50	隈丸長方形	逆台形	遺物なし
S K 8	II	0.82	0.64	0.90	不整楕円形	皿状	遺物なし
S K 9	II	1.6以上	0.60	0.10	長楕円形	皿状	遺物なし
S K 10	II	1.1以上	0.85	0.30	楕円形	逆三角形	遺物なし

第 3 表 3 層土坑計測表 14.9m A SK1 A SK4



SK3 ① 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 10YR2/3黒褐色砂質シルトブロック、10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック、10YR3/3暗褐色粘土ブロック多量含む





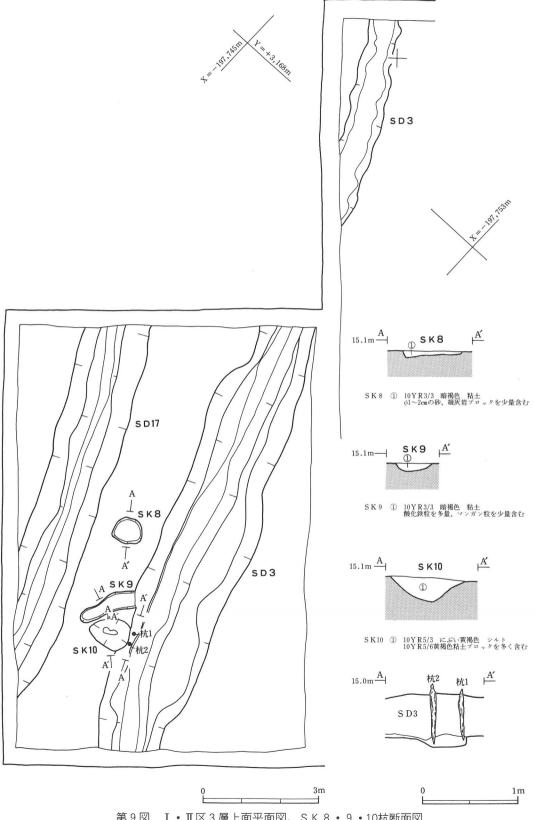


第8図 I • II 区 S K 1 • 3 • 4 • 5 断面図

(2) 5層上面 (第10・11図)

1号溝跡-SD1-

I区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-3°-Wである。検出長6.2m、幅22cm、深さは約9cmであるが、II区に近づくにつれ明瞭ではなくなり、II区では検出されていない。



第9図 Ⅰ・Ⅱ区3層上面平面図, SK8・9・10杭断面図

堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

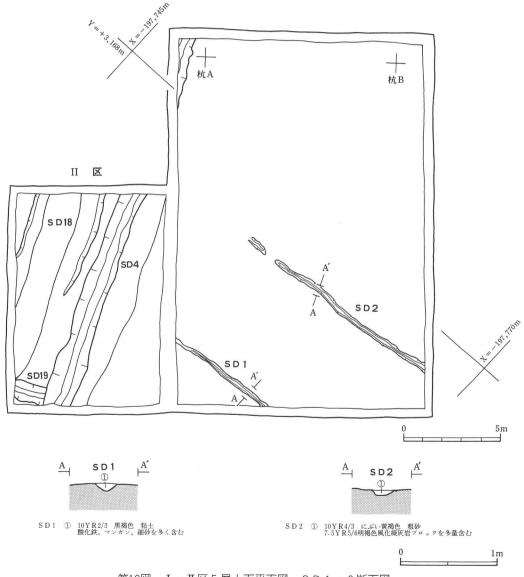
2 号溝跡 - S D 2 -

I区に位置し、直線的に延びる溝であるが、途中で途切れている。方向はN-3°-Wである。検出長約10m、幅は約22cm、深さは約6cm、断面形は皿状である。堆積土は1層で、遺物は出土しなかった。

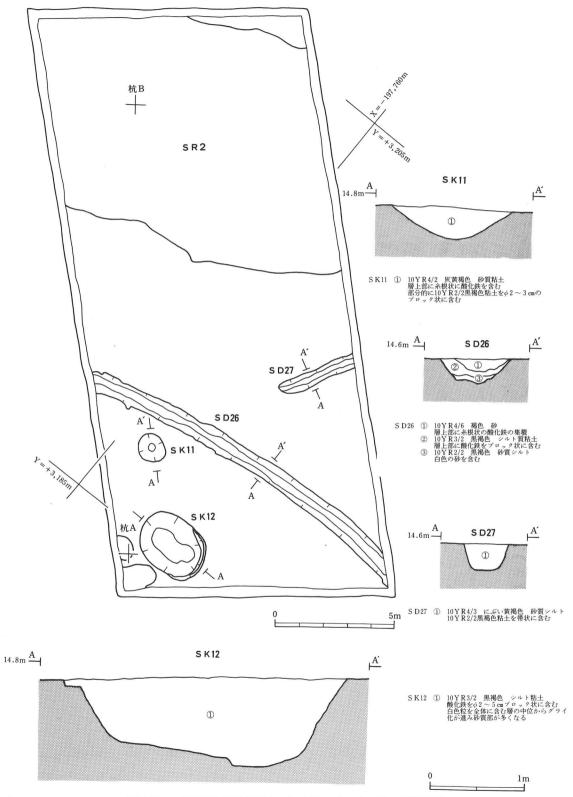
4号溝跡-SD4-

〈遺構状況〉Ⅰ・Ⅱ区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-70°-Eである。

検出長約12m、検出された最大幅は1.7mであるが、SD3に切られているので全容は不明である。深さは約40cmである。堆積土は3層で、自然堆積状況を呈している。



第10図 I • Ⅱ区5層上面平面図, SD1 • 2断面図

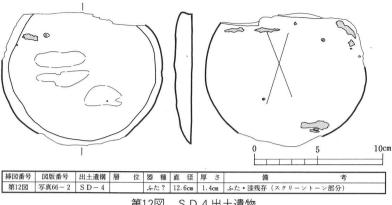


第11図 Ⅲ区5層上面平面図, SK11 • 12, SD26 • 27断面図

〈出土遺物〉遺物は堆積 土中から木製品が出土し ている。(第12図)

木製品

約1/4を欠損している。 残存する直径は約13cm、 最大厚は1.3cmで、断面 形は凸レンズ状である。 両面に漆の皮膜が残存し



第12図 SD4出十遺物

ているので、元々は全面漆塗りであった可能性が高い。平らな面に×状の刻みがみられる。こ の遺物の機能としては形状から蓋である可能性が考えられるが、これ1点のみの出土であるの

で類例の増加を待って判断した 1,0

18号溝跡-SD18-

〈遺構状況〉Ⅱ区に位置している。 SD17と重複しており、そのほと んどが削平されているので全容は 不明である。確認される上端幅は 約3.5mである。

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から

図版番号 遺構・層位 長さmm 幅 mm 厚さmm 重さg 石 質 第13図 写真65-9 S P 18 62.5 47

第13図 S D18出土遺物

石製品が1点出土している。(第13図)

石製品

砥石と考えられ、3面に擦痕が認められるが、方向はまちまちである。

19号溝跡-SD19-

Ⅱ区に位置している。SD4・SD18と重複関係にありSD4に切られているが、SD18と の関係に付いては調査区外に延びており確認できない。検出長1.6m、幅は1.2mである。遺物 は出土しなかった。

26号溝跡-SD26-

Ⅲ区に位置し、やや湾曲した溝で、直線部分での方向はN-7°-Wである。検出長5m、 幅78cm、深さ約28cm、断面形は皿状である。堆積土は3層で自然堆積状況を呈している。遺物 は出土しなかった。

27号溝跡-SD27-

第1節 富沢遺跡第78次調査

Ⅲ区に位置し、直線的に延びる溝であるが部分的な検出である。検出長3.3m、幅47cm、深さ約30cm、断面形は逆台形である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

11号土坑 - S K 11 -

Ⅲ区に位置している。上端平面形はほぼ円形で、直径約1.2m、深さ約30cm、断面形は擂鉢 状を呈している。堆積土は1層である。遺物は、土師器片が1点出土している。

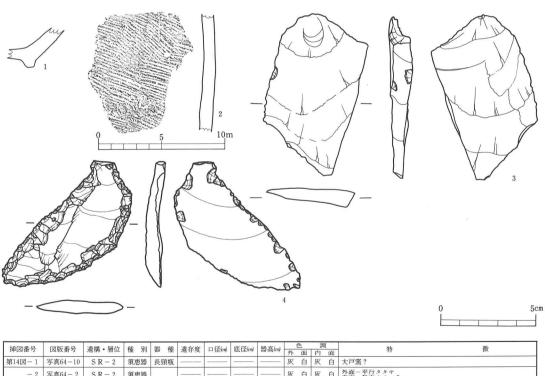
12号土坑-SK12-

Ⅲ区に位置している。上端平面形は隅丸長方形で、上端長軸3 m、短軸2.2m、深さ約90cm、断面形は逆台形である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

2号河川跡-SR2-

〈遺構状況〉Ⅲ区に位置している。検出面での上端幅は約12mである。確認面から約3m掘り下げたところで湧水が著しくなり、また、壁面の崩落がみられたので危険防止のために底面の検出は断念した。遺構の状況から人工的なものではなく自然流路と考えられる。

〈出土遺物〉堆積土中から土師器 7 点、須恵器10点、石製品 2 点、陶器 7 点が出土している。 (第14図)



第14図 SR2出土遺物

須恵器

1は、長頸瓶の底部である。福島県大戸窯に類例が求められ、時期は9世紀頃と考えられる。 2は、体部破片である。外面に平行タタキ痕、内面に無文オサエ痕が認められる。

石器

4 はスクレーパーである。各測定値の最大値は長6.45cm、幅2.9cm、厚0.5cm、重10.8 g である。石材は珪質頁岩である。

(3) 10層上面 (第15図)

5 号溝跡 - S D 5 -

I区に位置しているが、途中で 検出できなくなり途切れる溝であ る。SD6を切っている。検出長 約4.5m、幅70cm、深さ10cm、断 面形は皿状である。堆積土は1層 である。遺物は出土しなかった。

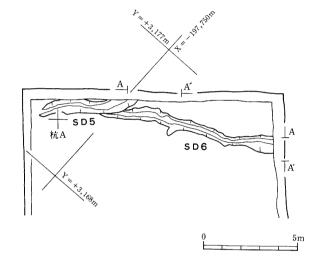
6 号溝跡 - S D 6 -

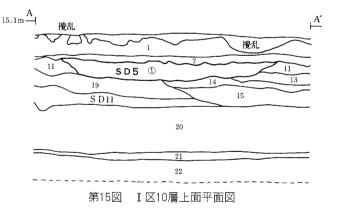
I区に位置し、やや直線的な溝であり、方向は $N-40^\circ-W$ である。SD5に切られている。断面形は皿状で、深さは約15cmである。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

(4) 14 • 15層上面 (第17図)

28号溝跡-SD28-

〈遺構状況〉Ⅲ区に位置し、湾曲 した溝である。検出長約12m、幅





 $1.1 \mathrm{m}$ 、深さ $10 \mathrm{cm}$ 、断面形は皿状である。堆積土は1層である。

〈出土遺物〉堆積土中から須恵器が1点出土している。

須恵器 (第16図)

器台の脚部と考えられる。調整は内外面ともロクロナデである。また、外面には隆帯が2条あり、これは周囲をくぼませることにより隆帯としていることが断面より観察できる。窯の特定はできなかったが在地のものである可能性が高い。時期は5世紀の後半頃に位置するものと考えられよう。

図版番号

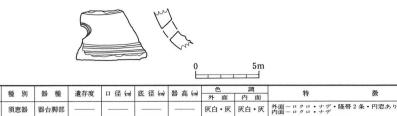
写真64-3

遺構・層位

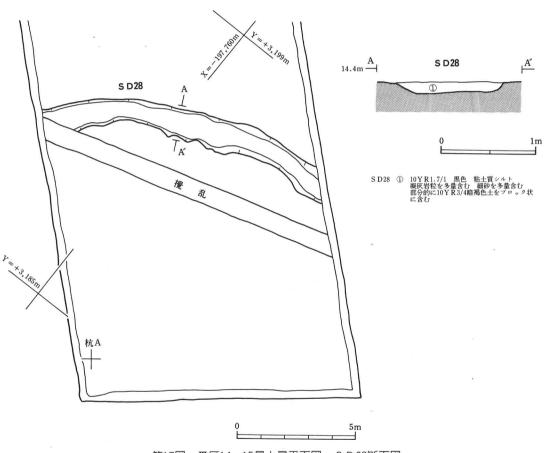
S D -28

挿図番号

第16図



第16図 S D 28出土遺物

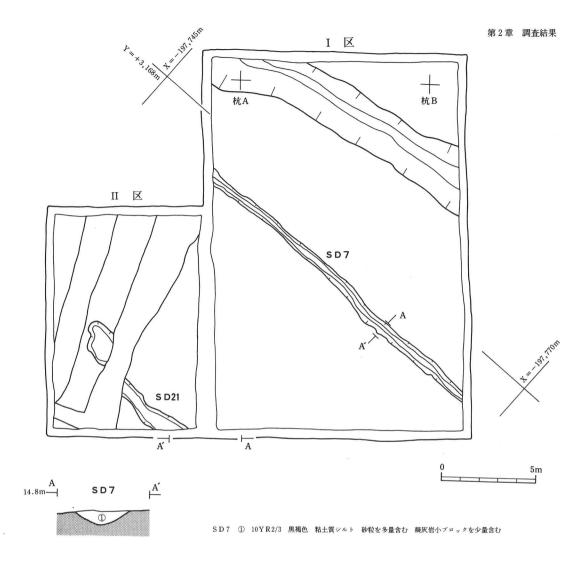


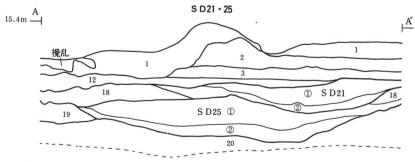
第17図 Ⅲ区14·15層上層平面図, SD28断面図

(5) 18層上面 (第18図)

7号溝跡-SD7-

I区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はほぼ真北である。検出長約18m、幅約60cm、深さ約15cm、断面形は皿状である。堆積土は1層である。遺物は、土師器片が2点出土している





S D 21 ① 10 Y R 5/4 にぶい黄褐色 粗砂 61~5 cm大の小礫、凝灰岩ブロックを多量含む 粗砂

S D 25 ① 7.5Y R 5/6 明褐色 粗砂 61~2 cm大の小礫、凝灰岩ブロックを多量含む 1~7.5Y R 5/6 明褐色 粗砂 61~2 cm大の小礫、凝灰岩ブロックを多量含む 部分的に10Y R 5/3にぶい黄褐色砂質シルトと互層になる



第18図 I • Ⅱ区18層上面平面図, S D 7 • 21 • 25断面図

が、細片であり図示できなかった。

10号溝跡-SD10-

I区に位置し、ほぼ直線的に延びる溝であり、方向は $N-12^{\circ}-W$ である。検出長は約12m、幅は約3.5mである。遺物は、土師器片が 3 点出土しているが、細片であり図示できなかった。SD10の下層にSD11が位置しており、SD11が埋没した跡の窪みを利用して作られたものと考えられる。

(6) 19層上面 (第20図)

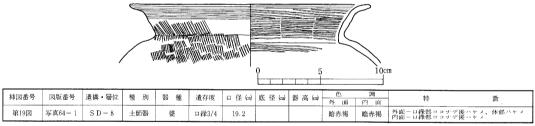
8号溝跡-SD8-

〈遺構状況〉I区に位置し、やや湾曲した溝である。検出長約13.5m、幅約1.2m、深さ10cm、断面形は逆台形であるが、底面は起伏が大きい。堆積土は1層である。

〈出土遺物〉遺物は堆積土中から須恵器片8点、土師器片55点、判別不明の土器片が多数出土している。土師器片は55点と多く出土しているが、細片が多くまた摩滅も著しいので復元・図化できたのは1点だけである。

土師器(第19図)

土師器は甕で、口縁部から体部にかけて約3/4遺存している。口縁部から頸部にかけて「く」 字状にきつく外反し、口唇部は丸くおさまる。外面調整は口縁部はヨコナデ後ハケメで、体部 はハケメである。内面調整はヨコナデ後ハケメである。時期は塩釜式期頃と考えられる。



第19図 SD8出土遺物

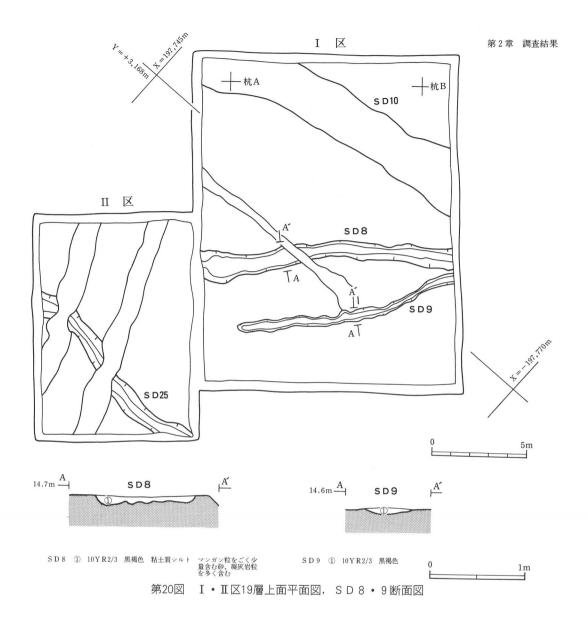
9 号溝跡 - S D 9 -

I区に位置し、やや湾曲し途中で途切れる溝である。方向は $N-48^{\circ}-W$ で、検出長約11.5m、幅約50cm、深さ約7cm、断面形は皿状である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

(7) 20層上面 (第21図)

11号溝跡 - S D11-

I区に位置し、直線的に延びる溝で、方向はN-12°-Wである。SD12を切っている。検



出長約12.4m、幅3m、深さ35cm、断面形は皿状である。堆積土は9層で自然堆積状況を呈し

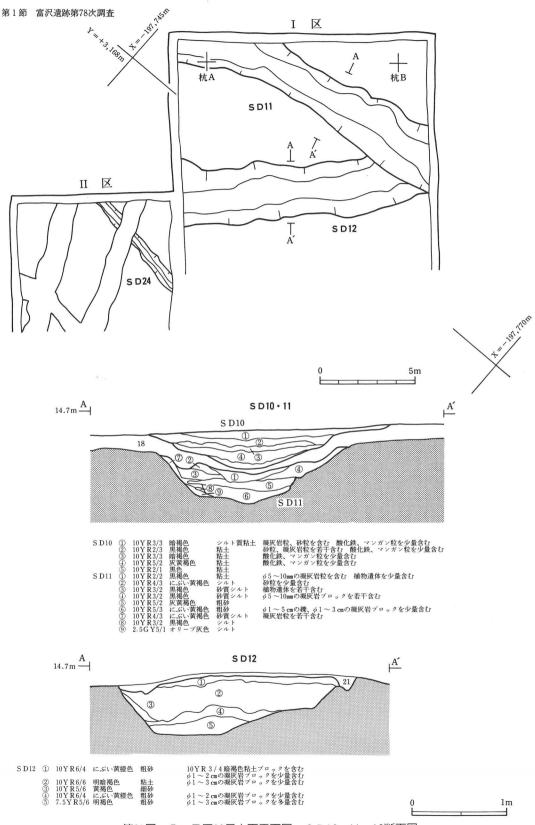
12号溝跡-SD12-

ている。遺物は、土師器片が3点出土している。

I区に位置し、やや湾曲した溝で、方向は $N-45^{\circ}-W$ である。SD11に切られている。検出長約12m、幅約2.7m、深さ70cm、断面形は逆台形である。堆積土は5層で、自然堆積状況を呈している。遺物は出土しなかった。

24号溝跡-SD24-

II区に位置し、ほぼ直線的に延びる溝で、方向はN-7°-Eであるが、II区では検出されていない。検出長約5m、幅約70cmである。遺物は出土しなかった。

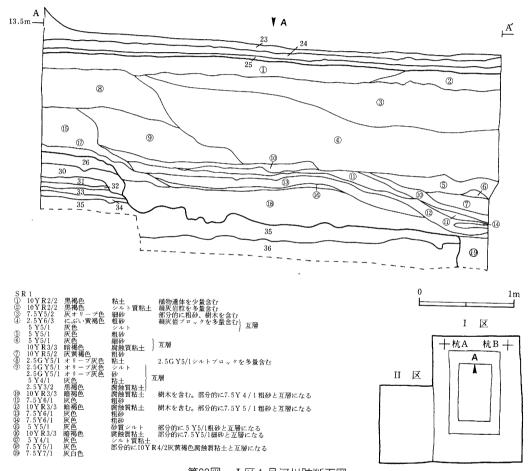


第21図 I • Ⅱ区20層上面平面図, S D 10 • 11 • 12断面図

(8) 25層上面 (第22図)

1号河川跡-SR1-

I区に位置している。堆積土は19層確認されている。土質は基本的にはシルトから細砂であり、所々に腐食した植物遺体を含む層がみられる。また、10層・12層からは、樹木が検出されており放射性炭素による年代測定を行っている。その結果、 $B.P.4540\pm100$ という値を得ていることから縄文時代後期頃の河川跡と考えられる(第3章第2節参照)。



第22図 I区1号河川跡断面図

(9) その他の出土遺物

基本層 $2\sim24$ 層から土師器片、須恵器片、陶・磁器片、木製品、石製品等が200点余り出土しており、特に I・II区は後世の攪乱が著しく、接合、復元できた遺物の層位はまちまちである。そのうち図化できたものは以下のものである。(第 $23\sim25$ 図)

木製品 (第23図)

杭である。上部を腐食し、縦方向に約半分が欠損している。Ⅲ区9層上面から打ち込まれた

第1節 富沢遺跡第78次調査

ものと考えられるが、上部に腐食がみられるので 打ち込み層位は断定できない。 9 層は水田跡の可 能性が考えられるので、水田耕作に関するものと も考えられるが、これのみの出土であるので詳細 は不明である。

石器·石製品(第24図1·2)

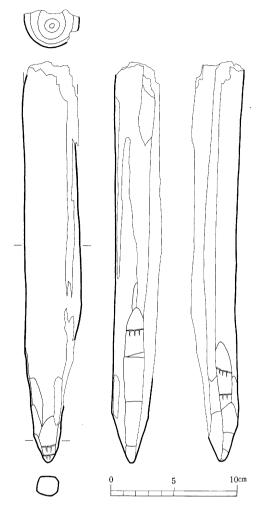
1は石匙である。両縁辺に微細剥離痕がみられる。石質は珪質頁岩である。2は、4面に擦痕が認められるので砥石と考えられる。

土師器(第24図3)

甕の口縁部である。調整は外面ロクロ、内面回転?へラミガキ・黒色処理である。時期は表杉ノ入式期頃と考えられる。

須恵器 (第25図1~5)

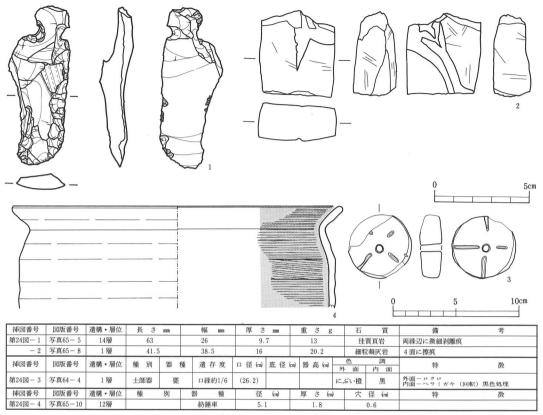
2は、甕の体部から口縁部である。体部から頸部にかけて「く」字状に外反し、口縁部にかけてさらに強く外反する。口縁部端部は丸く処理され、その下に張り付け隆帯を1条施す。頸部には波状沈線が2条施され、また頸部中央には凸線が見られ、これは上下をくぼませることによって作り出されている。体部には平行タタキが施され、その



No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	素材形状	長さ	直 径	先端加工	表面加工	備	考
3	第23図	写真65-11	9層	杭		丸太材	31.9cm	4.3cm	15方向		自然面にごく一部樹皮残存・約	半分こわれる

第23図 出土遺物①

後すり消されている。内面には全面にすり消した痕がみられるが、所々に無文あるいは同心円状のあて具を当てた痕跡が認められるところもある。3は、甕の体部から頸部である。口縁部が欠損しているが2と同じような形態を示すものと思われる。頸部に波状沈線が施され、体部は平行タタキ後すり消されている。4は、甕の体部から口縁部で、体部から頸部にかけて「く」字状に外反し、口縁部ではさらに強く外反している。口縁部端に張り付け隆帯が一条施されている。体部外面に平行タタキ痕が認められる。胎土中に石英粒が多くみられる。



第24図 出土遺物②

4. 遺構の所属年代とまとめ

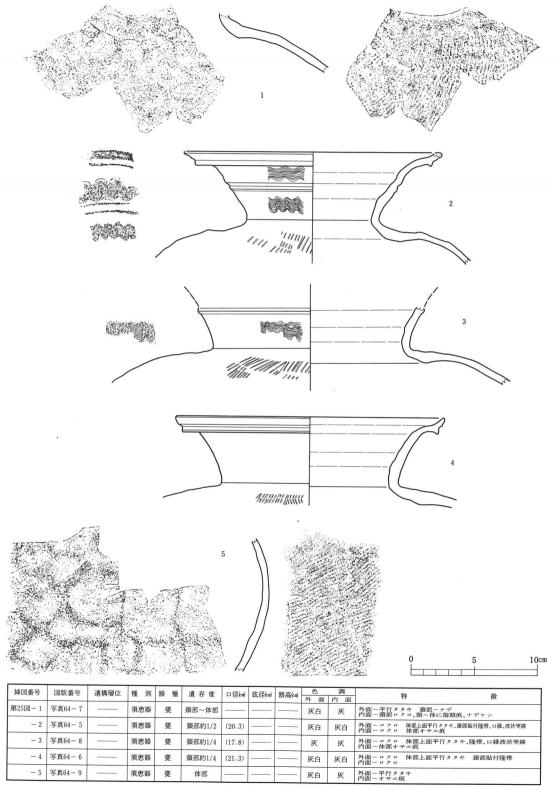
- 1. 検出された遺構は3層上面で、溝跡2条・土坑7基、5層上面で、溝跡7条・土坑2基・河川跡1条、10層上面で、溝跡2条、14・15層上面で溝跡1条、18層上面で溝跡2条、19層上面で溝跡2条、20層上面で、溝跡3条、25層上面で河川跡1条である。今回の調査では、現代のものを除く明確な水田跡は検出されなかったが、土層観察により3・5・6・7・9・15・16層が水田耕作土である可能性が高く、また、その後のプラント・オパール分析により14層でも水田耕作が行われた可能性が指摘されている(第3章第3節参照)。各遺構の所属年代であるが、前述したように後世の攪乱が大きく、遺構に伴う遺物も少ないことや、当調査地点周辺での調査例が少ないことなどから不確定な要素が大きく決定が困難である。しかし、これらの内、遺構に伴って遺物が出土し年代が確定できるものや、灰白色火山灰が検出できる層などから大まかに想定すると以下のようになる。
 - 3層-江戸時代後半以降
 - 5層-中世から近世

第1節 富沢遺跡第78次調査

- 7層-平安時代頃から中世
- 19層-古墳時代前期(塩釜式期)頃

25層-縄文時代後期

- 2. 3層上面で検出した、SD3・SD17は、ほぼ平行し、また、どちらも作り直していることから水田に伴う水路、あるいは何らかの区画をしていた水路の可能性が考えられる。
- 3.5層上面で検出された溝跡は、平行するものが多く水田に伴う水路の可能性や、土地を区画するための溝などの可能性も考えられるが、途中で確認できなくなるものや途切れるものがあり、また、底面も凹凸が多く傾斜が確認できないなど不確定の部分が多いのでこれらの溝跡の性格については可能性を指摘するにとどめたい。
- 4. 18層上面で検出された S D 10 と 19 層上面で検出された S D 11 は、 S D 11 が埋没した跡の窪 みを利用して S D 10 が作られており、継続して利用されたものと考えられる。その、性格としては水路の可能性が考えられる。
- 5. 今回の調査で検出された溝跡のうち、SD3・SD17やSD10・SD11のように同じところでの作り替えが行われており、土地利用の上で何らかの企画性があったと考えることができるが、周辺での調査例が少ないことから断定はできない。今後、調査例が増えることにより、全体的な土地利用の仕方が解明されてこよう。
- 6. 今回の調査では須恵器が比較的多く出土しているが、遺構に明確に伴ったものではない。しかし、復元できた甕の器形の特徴から考えると5世紀中頃から後半に位置するものと思われる(T K216前後、中村編年 I 形式2段階~3段階頃)。富沢地区でいままで出土した須恵器の中では、近接する泉崎浦遺跡第4次調査(主浜:1988)で出土した6世紀初頭から前半頃とされている坏が最も古く、今回出土した遺物は、それよりも古い時期のものと言えよう。このように古い段階の須恵器は、周辺の裏町古墳・大野田古墳群で出土しているが、しかし、出土層位が安定したものではないので今回は資料の紹介にとどめ、関連については今後の資料の増加を待ちたい。
- (註1) 須恵器は、基本層 1 層〜20層から出土したものや、溝の堆積土中から出土したものが接合しており、本来の所属層位は不明である。
- (註2)報文中では5世紀代に遡る可能性も指摘されている。



第25図 出土遺物③

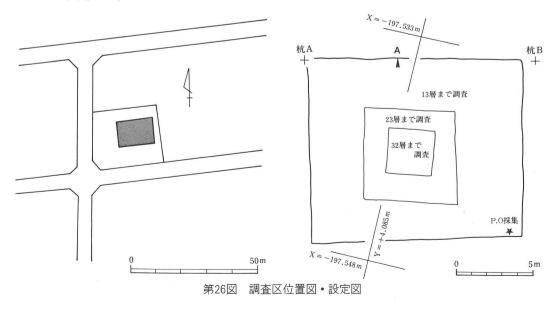
第2節 富沢遺跡第80次調査

1. 調查方法

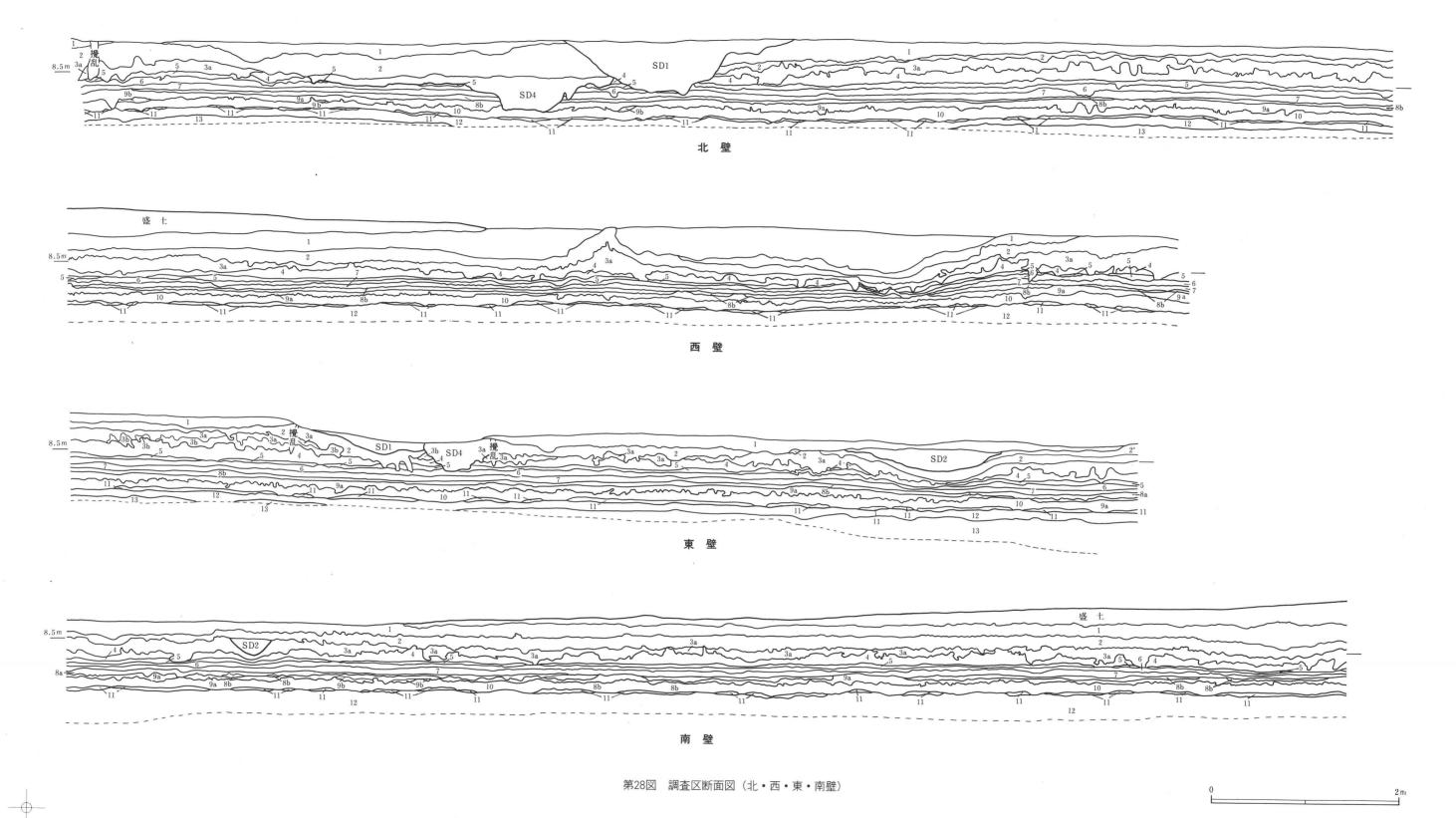
調査区の設定面積は約 14×12 m(168m²)である。調査は盛土及び直下の 1 層(旧水田耕作土)上面まで重機で排除し、以下は人力で行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。 9 層までは調査区全面の精査を行い10 層以下は試掘区を設けて調査を行った。遺構の測量は、任意に設定した杭 $A \cdot B$ の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している(杭A : X = -197,536.30m Y = +4,077.58m 杭B = -197,532.86m Y = +4,092.57m)。

2. 基本層序

今回の調査では盛土下に大別32層、細別36層が確認された。各層の土質は、粘土であり特に6層以下は泥炭質の粘土である。現代のものをのぞく水田土壌は9a層である。水田土壌の可能性のある層は、2層・3a層・3b層・8b層である。2層中に灰白色火山灰が検出されているが、本来は下層にあったものが水田耕作によって巻き上げられたものと考えられる。全体的な層の傾きは南東方向へ緩やかに下り傾斜が認められる。(約8cm/10m)なお、当調査区は第38次調査区、第54次調査区と隣接しており基本層序に対応関係が認められる。対応関係については後述する。



第2節 富沢遺跡第80次調査



3. 検出遺構と出土遺物

(1) 2層上面

2号溝跡-SD2-(第29図•写真15)

北から南方向に直線的に延びる溝跡である。上端幅は $25\sim70\,\mathrm{cm}$ 、下端幅 $15\sim30\,\mathrm{cm}$ 、深さは約 $20\,\mathrm{cm}$ であ。底面は平坦で南方向へ緩やかに傾斜している。 堆積土は1層である。遺物の出土はみられなかった。

3号溝跡-SD3-(第29図)

西から東方向へ延びる溝跡である。上層の水田耕作によって所々依存状況が悪く途切れた状態で検出されている。上端幅は25~40cm、下端幅10~20cm、深さは約10cmである。底面には凸凹がみられ傾斜方向は不明である。堆積土は1層である。遺物の出土はみられなかった。

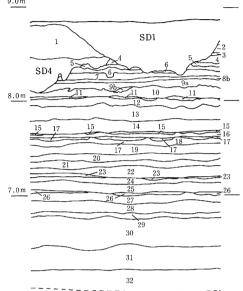
(2) 3層上面

4号溝跡-SD4-(第30図•写真15)

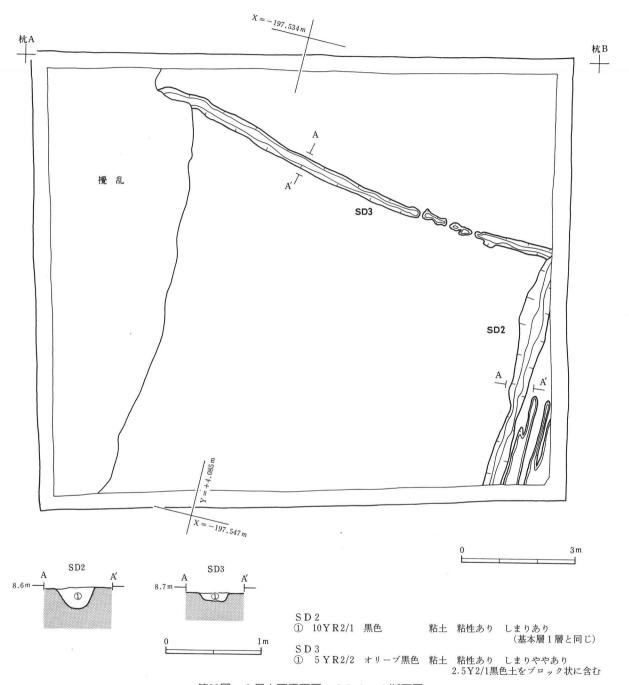
〈遺構状況〉西から東方向へ直線的に延びる溝跡で



γA

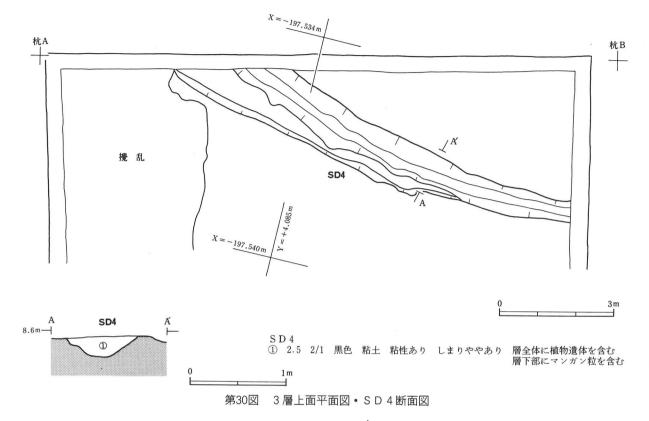


層序 色 調 土質 層厚 酸化鉄 混入物 水田土壌 1 黒褐色 2.5 Y3/2 粘土 15 糸根状に発達 未分解の植物遺体 日本田耕作 2 オリーブ黒 5 Y3/1 粘土 14 塩点状 灰白佐火山灰 ○ 3 a 黒褐色 10 Y R 2/2 粘土 15 一 未分解の植物遺体・4層をブロック状に含む ? 3 b 黒褐色 10 Y R 3/2 粘土 8 — 4層をプロック状に含む ? 部分的分布 たよが、黄橙色 10 Y R 6/4 粉土 4 株土 2 部分的分布	
1 黒褐色 2.5 Y 3/2 粘土 15 糸根状に発達 未分解の植物遺体 日本田耕作 2 オリーブ黒 5 Y 3/1 粘土 14 斑点状 灰白色火山灰 ○ 3 a 黒褐色 10 Y R 2/2 粘土 15 エラ解の植物遺体・4 層をブロック状に含む ? 3 b 黒褐色 10 Y R 3/2 粘土 8	<u> </u>
2 オリーブ黒 5 Y3/1 粘土 14 斑点状 灰白色火山灰 ○ 3 a 黒褐色 10 Y R2/2 粘土 15	
3 a 黒褐色 10Y R 2/2 粘土 15 未分解の植物遺体・4層をブロック状に含む ? 3 b 黒褐色 10Y R 3/2 粘土 8 4層をブロック状に含む ? 部分的分布	5
3 a 黒褐色 10Y R2/2 粘土 15 ロック状に含む ? 3 b 黒褐色 10Y R3/2 粘土 8 4 層をブロック状に含む ? 部分的分布	
pr /*) - 基鉄係 10V D G / 4 単に上	
たら) 芸修年 10V P 6/4 独主	NACASCA AND AND AND AND AND AND AND AND AND AN
4	
5 暗褐色 10Y R 3/4 粘土 5 糸根状 植物遺体 ————————————————————————————————————	
6 黒褐色 10Y R 2/3 泥炭質粘土 5 未分解の植物遺体	
7 黒 10YR1.7/1 泥炭質粘土 5 未分解の植物遺体	
8 a オリーブ黒 5 Y 3/1 粘土 5 ―― 植物遺体 ?	
8 b 黒 10Y R 2/1 泥炭質粘土 4 植物遺体 うすい互唱	
9 a オリーブ黒色 5 Y3/2 粘土 12 ── 植物遺体、9 b層ブロック状 ○ 分解度に差	
9 b 灰オリーブ 5 Y 4/2 粘土 4 植物遺体 うすい互居	1
10 黒 10YR1.7/1 泥炭質粘土 12 未分解の植物遺体	TOWNSON TOWNSON
11 にぶい黄褐色 10YR4/3 泥炭質粘土 3	
12 黒 10 Y R 1.7/1 泥炭質粘土 10 未分解の植物遺体	
13 黒 10YR2/1 泥炭質粘土 13 未分解の植物遺体	
14 黒 10YR1.7/1 泥炭質粘土 13	
15 黒褐色 10 Y R 3/2 粘土 3 未分解の植物遺体	
16 黒 10YR1.7/1 泥炭質粘土 6 —— —— ——	
17 黒褐色 2.5Y3/2 粘土 3 未分解の植物遺体	
18 黒 2.5Y2/1 泥炭質粘土 8 2.5Y3/2を	:部分的に帯状
19 黒褐色 2.5Y3/1 泥炭質粘土 10 —— 植物遺体 ——	
20 黒 5 Y2/1 泥炭質粘土 10	
21 黒 10YR1.7/1 泥炭質粘土 8	
22 オリーブ黒 5 Y 3/2 粘土 8	
23 オリーブ黒 5 Y 2/2 粘土 3	10000000000000000000000000000000000000
24 黒 10YR2/1 泥炭質粘土 6	
25 黒 10YR1.7/1 泥炭質粘土 10	-AAA (ANA)/1999
26 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘土 3 未分解の植物遺体	
	OYR4/3がうすく帯状
	のうすい互層・部分的分布・うすい互層
29 黒褐色 10YR3/2 泥炭質粘土 5 部分的に10	Y R 1.7/1を帯状
30 黒 10 Y R 1.7/1 泥炭質粘土 30 層下部は5	すい互層
31 黒 5 Y 2/1 泥炭質粘土 25	
32 黒褐色 2.5Y3/1 泥炭質粘土	



第29図 2層上面平面図 · S D 2 · 3 断面図

ある。上端幅は $0.8\sim1.6$ m、下端幅 $20\sim35$ cm、深さは20cmである。底面は平坦で西方向へ緩やかに傾斜している。なお、SD4の上層には1層段階の溝跡が確認されている。



〈出土遺物〉堆積土は1層である。遺物は陶磁器、種子等が出土しているが、図示できたのは 1点だけである。

陶器 (第32図・写真67-1)

碗の底部であり、漆が断面に付着している。産地は唐津が考えられ、長石釉が施されている。 時期は16世紀末から17世紀初頭の間の頃のものと思われる。

(3) 9層上面

9層水田跡 (第31図 • 写真17 · 18)

〈遺構状況〉9層上面で小区画に区画される水田跡を全面で検出した。水田跡は大区画を形成する大畦畔3条と、さらに大区画を細かく分割し、小区画を形成する小畦畔、水口等から構成されている。畦畔は直上の8a層下面で検出しているが、遺存状況に違いが認められ、一部良好でないところがある。遺物は大畦畔1中より樹木が出土しているが、他に遺物の出土はみられなかった。

〈耕作土〉耕作土は大畦畔 1 を境として分解の度合いに違いが認められ北側(大区画 1 • 2)では分解が進んでおり、南側(大区画 $3\sim5$)ではあまり分解が進まず層中に 9 b 層、10 層をブロック状に含んでいる。耕作土は主に直下の自然堆積層である 9 b 層、10 層を撹拌する事に

第31図 9層水田跡平面図

区画名	面 積 (㎡)	標 高 (m)	上面高低差(cm)	水口	備考
1	0.14	$8.290 \sim 8.295$	0.5	不明	一部検出
2	5.94	8.235~8.265	3.0	1	一部検出
3	6.05	8.225~8.280	5.5	2	全面検出
4	2.03	8.245~8.295	5.0	1 ?	一部検出
5	1.26	8.300~8.325	2.5	不明	一部検出
6	0.78	$8.255 \sim 8.270$	1.5	1	全面検出
7	0.47	8.255~8.265	1.0	1 ?	一部検出
8	6.46	8.200~8.275	7.5	2 ?	全面検出
9	0.85	8.275~8.265	1.0	1	全面検出
10	1.89	8.225~8.280	6.5	3	全面検出
(1)	1.45	8.205~8.220	1.5	2	全面検出
12	1.78	8.195~8.210	1.5	1 ?	一部検出
13	0.22	8.240~8.290	5.0	不明	一部検出
14)	17.7	8.255~8.285	3.0	3 ?	一部検出
15	1.91	8.250~8.280	2.5	3	全面検出
16	1.35	8.250~8.280	2.5	1 ?	一部検出
17)	0.44	8.250~8.255	0.5	不明	一部検出
18)	1.64	8.240~8.260	2.0	不明	一部検出
19	2.43	8.200~8.225	2.5	3 ?	一部検出
20	3.89	$8.210 \sim 8.240$	3.0	3	全面検出
21)	3.05	8.190~8.210	2.0	3	全面検出
22	1.83	8.185~8.200	1.5	2	全面検出
23	2.48	8.175~8.195	2.0	2 ?	一部検出
24	0.09	8.150~8.160	1.0	1 ?	一部検出
25	1.65	8.140~8.155	1.0	不明	一部検出

第4表 9層水田区画計測表

よって形成されたものと考えられる。耕作土の厚さは $2\sim14$ cmであるが、大畦畔 1 の北側部分では平均 9 cm、南側部分では平均 5 cmであり分解度の差と同様に耕作深度にも違いが認められる。耕作土の下面は起伏が著しい。なお、大畦畔 1 の直下には擬似畦畔 Bが認められ、1 が安定した継続的な畦畔であったため、この部分だけが耕作により撹乱を免れて形成されたものと理解される。

〈畦畔の配列〉大畦畔1は直線的に延びており、方向は $N-66^\circ-W$ で、調査区内での全体的な地形の傾斜とほぼ直行する。大畦畔2・3は大畦畔1と直行方向($N-21^\circ-23^\circ-E$)に延びている。大畦畔の交点は2箇所認められ、 $\Gamma+1$ 字状、 Γ 1 字状のものがある。区画毎の小畦畔は水口によって断片的であったり、やや弯曲したものがみられるが、ほぼいずれかの大畦畔の方向をとっており連続性を示している。大畦畔に直行方向より平行方向に延びる畦畔のほうがより連続性を示している。

〈畦畔の規模〉畦畔は耕作土と同じ9 a 層を盛り上げて作られている。下端幅は大畦畔では $160 \, \mathrm{cm}$ 前後であり、耕作土上面からの高さは $3 \sim 5 \, \mathrm{cm}$ である。小畦畔は画一性を欠くが、 $70 \, \mathrm{cm}$ 前後のものが多くみられる。耕作土上面からの高さは約 $2 \, \mathrm{cm}$ である。

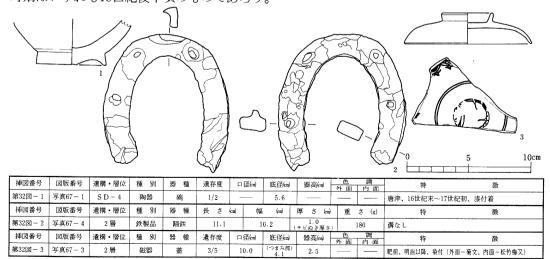
第2節 富沢遺跡第80次調査

〈水田1区画の形状と規模〉大畦畔によって区画される水田区画が5区画検出されている。(大区画1~5)大区画はいずれも区画全体が検出されていないので明確な形状、規模は不明である。しかし、大畦畔の検出状況からみると大区画1・4では短辺の全長がほぼ検出できており、北西から南東を短辺(約5 m)とする短冊形を基調とした区画の存在が想定できる。小区画は全部で25区画検出されているが、整形のものは少なく方形、三角形を基調とするものが多くみられる。(このうち全面が検出できたものは9区画であった。大1-1、大2-4、大3-1、大4-3、大5-0)1区画の面積には17㎡から1㎡を切るものまであり区画に規格性がみられない。

〈水口〉水口は大畦畔、小畦畔とも認められた。そのうち大畦畔 2 上で認められたものは大区画間のものと考えられ、その他のものは小畦畔間のものと考えられる。水口底面の標高は耕作土上面の高さとほぼ同じか、やや低い。設けられた水口は取り囲む畦畔の1箇所から3箇所認められるものがある。大区画2で大畦畔1と北側で接する畦畔との間には1方向へ水口が連続する傾向がみられるが、他の部分では明確な連続性は認められなかった。

(4) その他の出土遺物 (第32図・写真67)

基本層 2・3 層から陶磁器片、土師質土器、鉄製品、銅製品等が出土している。このうち図示できたのは2点のみである。2 は、蹄鉄である。接地面に釘打ち溝がないものである。3 は、肥前産の蓋である。外面は菊文、内面は見込みに松竹梅文が染め付けられている。時期は明治以降頃の所産であろう。図示はできなかったが、そのほかに産地・年代などが確定できた陶磁器は5点である。2 層からは、相馬産の灰釉・白濁釉碗が2点で、時期は18世紀後半頃のものであろう。3 層からは、肥前産の染め付けのとっくり、相馬産白濁釉皿、瀬戸・美濃灰釉皿で、時期はいずれも18世紀後半頃のものであろう。



第32図 出土遺物

4. 遺構の所属年代とまとめ

- 1. 今回検出された遺構は 9 層水田跡、 $SD2 \cdot 3 \cdot 4$ である。また、水田土壌の可能性のある層としては、 $2 \cdot 3$ a $\cdot 3$ b $\cdot 8$ b 層があげられ、 SD4 は 3 層段階の水路、 $SD2 \cdot 3$ は 2 層段階の水路の可能性が考えられる。 SD4 とほぼ流路を同じくして、 1 層段階の水路が確認されており、継続的に利用されていたものと考えられる。
- 2. 検出遺構と各層の所属年代であるが、今回の調査では時期を決定する資料に乏しく、層位の対応が可能である隣接の第38次調査(渡部:1989) ・第54次調査(中富:1990)の結果を踏まえれば、以下のような所属年代の想定が可能であるう。
 - 9層-弥生時代(桝形囲式期~十三塚式期)
 - 3層-近世
 - 2層-近世~現代以前
- 3. 検出された 9 層水田跡では、大畦畔 3 条と区画を細く区切る小畦畔とこれらによって区画される小区画の水田が25区画確認された(一部検出も含む。)。このような小区画の水田は、周囲の調査(富沢28・29・46・53次調査)でも多く検出されており、富沢地区(富沢遺跡北部 A地区)でのこの時期(桝形囲式期~十三塚式)の特徴的な水田形態といえよう。また、大畦畔 1 を境として耕作土の分解に違いが見られる。これは、耕作深度あるいは耕作回数の差異と考えることもでき、同様に耕作土の分解に違いの認められる水田跡は、でも検出されている。しかし、小区画水田が検出された地点全てがこのような状態ではないので、どのような原因が考えられるかについては不明であり今後の調査において検証されていくことであろう。

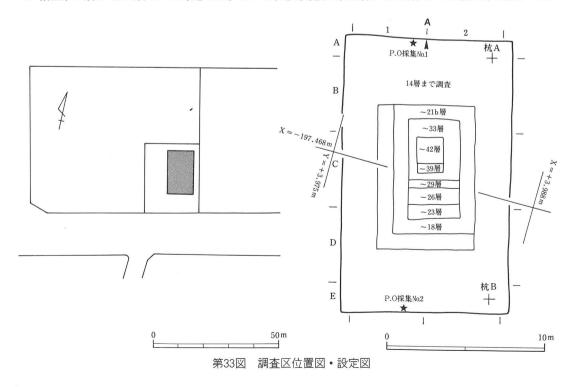
第3節 富沢遺跡第81次調査

1. 調査方法

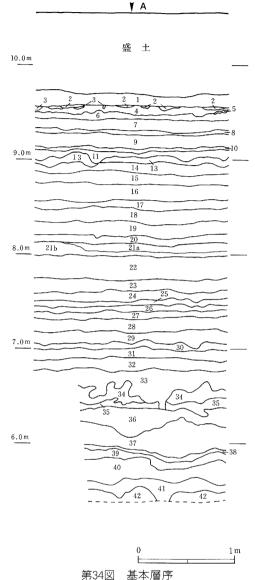
調査区の設定面積は約17×10m(177㎡)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。調査は14層上面までは、調査区全面の精査を実施し、14層以下は、約9×6mの試掘区を設けて掘り下げた(最下層面では約1.6×1.6m)。遺構の測量は、任意に設定した5×5mグリッド(南北軸A~E、東西軸1~2)を基準として実施した。なお、グリッド基準杭(杭A・B)の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A:X=-197459.676m、Y=+3983.081m 杭B:X=-197474.217m、Y=+3986.816m)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別42層、細別では43層が確認された。各層の土質は、5層までが粘土、6層から22層までは泥炭土あるいは泥炭質粘土、23層から31層までは粘土、32層から40



層までは砂層を介在する粘土、41層以下は砂質シル ト及び砂となる。34層以下の各層は、堅くしまって おり、特に35~39層までの各層では著しい。グライ 化は、32層以下から漸時准み、33層以下では顕著で ある。3・4・30層からは、火山灰が検出されてい る。この内3・4層中のものは灰白色火山灰である。 3層中の火山灰は、4層中に入っていたものが、後 の3層の撹乱により3層中に巻き上げられたもので ある。また、30層中のものは、第28次調査29層中検 出のものと同一のものと考えられる。39層からは、 腐植した小枝等の樹木片が少量出土した。この層は 第30次調査25・26層に対応する可能性がある。現代 のものを除く明確な水田土壌は3・4・5・11層の各 層であるが、2層も水田土壌の可能性がある。遺物 出土層は1・2・3・4・5・8・33層である。各層の傾 きとしては、1~14層までは南西・北東方向へのご く緩やかな下り傾斜と東・北西方向の緩やかな上り 傾斜を示す。15層以下では調査区が狭く全体的な傾 向性はつかめないが、ほぼ水平である。ただし、34 層以下では層の起伏が著しい。なお、当調香区の基 本層序の内、1~14層の各層は、富沢遺跡北部A地 区基本層序(佐藤:1992)と対応関係が認められる。



3. 検出遺構と出土遺物

3層・4層・5層・11層で水田跡が検出された。ただし、3・5層に関しては耕作土のみの 検出である。また、4層上面では土坑1基(SK1)、7層上面では溝跡1条(SD1)、14層 上面では樹木片の集中が1箇所検出された。

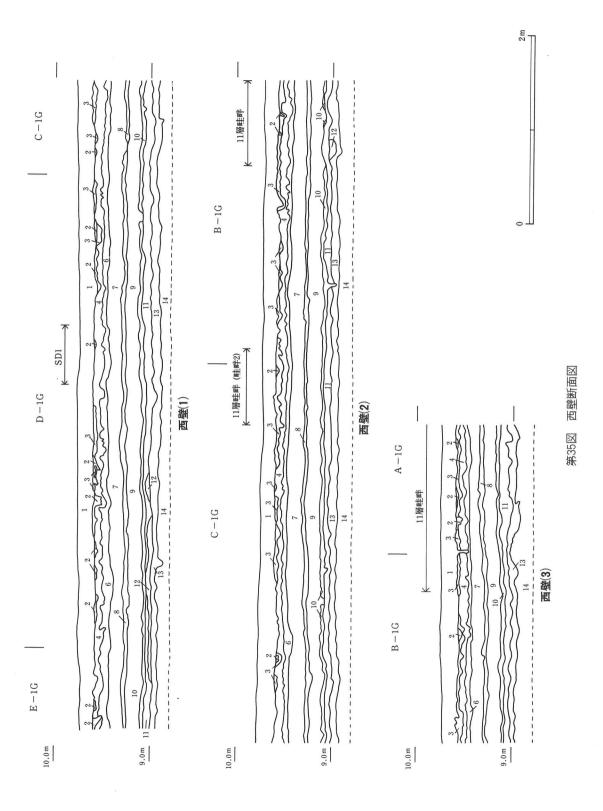
(1) 4層上面

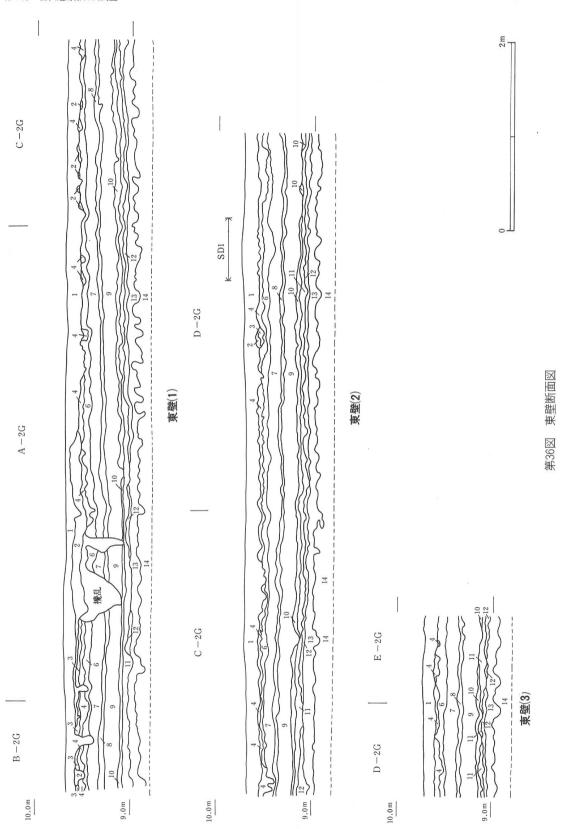
1号土坑-SK1-(第38·40•写真20)

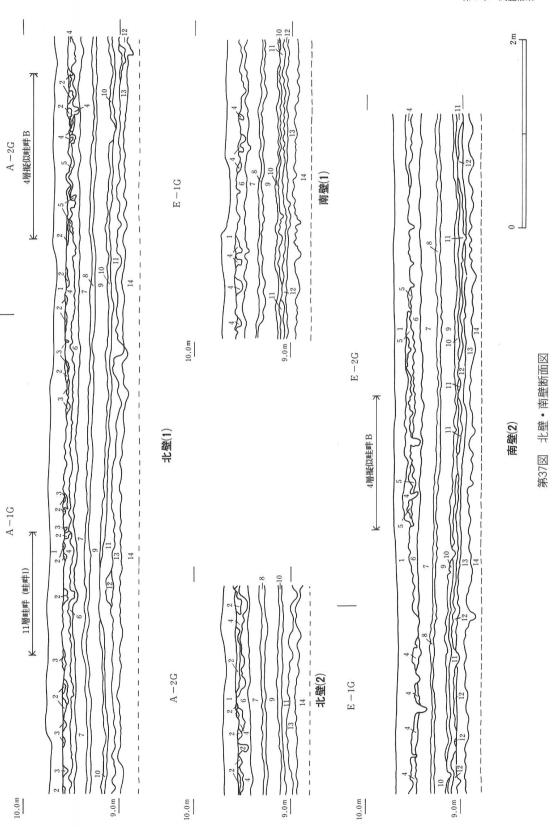
〈遺構状況〉調査区の南側、D-1・2グリッドに位置する。検出地点は、1層下、直接4層あるいは6層となり、土坑本来の掘り込み層位は不明である。上端・下端平面形とも楕円形を

第3節 富沢遺跡第81次調査

層序	色	調	土質	層厚(ca)	酸化鉄	混 入 物	水田土壌	備考
1	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	6~30	下面に集積	砂粒	0	
2	灰黄褐色	10 Y R 4/2	砂質シルト	1~15	量管状斑紋	砂粒	?	部分的な分布
3	黒	10 Y R 2/1	粘土	2~9	量管状斑紋	灰白色火山灰ブロック少量・下層ブロック	0	部分的な分布・下面起伏
4	暗褐色	10 Y R 3/3	粘土	2~16	暈管状斑紋	灰白色火山灰ブロック部分的に多量・下部に下層ブロック	0	下面起伏
5	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	1~7	量管状斑紋	植物遺体少量・下層ブロック	0	帯状の分布・下面起伏
	黒	10 Y R 2/1	泥炭土				 	13 AV - 23 AV T T MAKE EV
6	暗褐色	7.5YR3/4	泥炭土	2~16	量管状斑紋			五層
	にぶい黄褐色	10 Y R 5/4	泥炭質粘土	İ				TOTAL CALL
	灰黄褐色	10 Y R 4/2	泥炭質粘土					ALL STATES
7	黒暗色	10 Y R 2/1	泥炭土	1~20	量管状斑紋			互層
	にぶい黄褐色	10YR5/4	泥炭質粘土					
8	灰黄褐色	10 Y R 4/2	泥炭質粘土	2~10	量管状斑紋		<u> </u>	部分的に黒色・にぶい黄色の互層あり
9	褐色	7.5YR4/3	泥炭土					
1 "	黒	10 Y R 2/1	泥炭土	10~21	量管状斑紋			互層・上部褐色中にぶい黄褐色泥炭質粘土
	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭土					
10	にぶい黄褐色	10 Y R 5/4	泥炭質粘土	2~13	量管状斑紋			互層・最下の灰黄色のみになる場合あり
	灰黄褐色	10 Y R 4/2	泥炭質粘土					
11	黒褐色	10YR3/1	泥炭質粘土	2~18		植物遺体多量・下層ブロック多量	0	下面起伏
	黒	10 Y R 2/1	泥炭土					
12	黒褐色	10 Y R 3/2	泥炭土	1~13				互層・最下のにぶい黄褐色は一部に認められ
	にぶい黄褐色	10YR4/3	泥炭質粘土					るのみ
13	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭土	2~18				下面起伏
14	黒褐色	10 Y R 3/2	泥炭土	4~15				
15	黒	10 Y R 2/1	泥炭土	6~15				
T	黒褐色	10 Y R 3/2	泥炭					
16	にぶい黄褐色	10YR4/3	泥炭質粘土	15~24				互層・上端・下端はにぶい 黄褐色
17	黒	10 Y R 2/1	泥炭質粘土	4~14				
18	灰黄褐色	10 Y R 4/2	泥炭質粘土	10~20				部分的に黒色とにぶい黄褐色との互層・下端は泥炭
19	黒	10 Y R 1 . 7/1	泥炭質粘土	12~21		上半植物遺体多量		下半黒色強し
20	灰黄褐色	10 Y R 4/2	泥炭質粘土	5~11		1 1 1 10 10 20 11 2 25		部分的に黒色と互層
21 a	にぶい黄褐色	10 Y R 4/3	泥炭土	2~22		4		21 b が自然カクハンしたもの
21 b	暗褐色	10 Y R 3/4	泥炭土	2~16				部分的に黒色とにぶい黄褐色との互層
	黒	10 Y R 2/1	泥炭質粘土					即がいた無己とにあい。異情己とり王暦
22	黒	10YR1.7/1	粘土	18~28		下部の黒色粘土にも植物遺体		互層・上半はにぶい黄褐色粘土との互層
	にぶい黄褐色		粘土					
23	黒	10 Y R 1.7/1	粘土	9~17		植物遺体		互層
	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土					147
24	黒色	10 Y R 1.7/1	粘土	5~13		植物遺体		互層
25	にぶい黄褐色		粘土	2~13		植物遺体		褐灰色の粘土の横すじ多数
26	褐灰色	10 Y R 4/1	粘土	3~8		植物遺体		地外已の相上の傾うし少数
27	にぶい黄褐色		粘土	3~10		植物遺体		
28	褐灰色	10 Y R 4/1	粘土	8~19		植物遺体		
29	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	7~20		植物遺体		
30	褐灰色	10YR5/1	粘土	2~10		植物遺体・45mmの灰白色の火山灰ブロック多量		
31	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	7~13				
32	褐灰色	10 Y R 5/1	粘土	8~19		粗砂		φ2 cmの黒色粘土斑点多数・グライ化
33	明緑灰色	10 G Y 7/1	粘土	2~80		粗砂		9.2 cmの黒色粘土斑点多数・グライ化 ∮2 cmの黒色粘土斑点多数・グライ化
	緑灰色	10G Y 6/1	砂	2 00		744.67		y a Cm・ソ未已相工班点 タ数・クライル
34	緑灰色	5 G5/1	砂	3~24		粗砂		しまり有・グライ化・起伏顕著
35	緑灰色	10G6/1	粘土	2~19				1 水の砂。ガニスル。お仏居は
36	緑灰色	5 G5/1	砂層	5~31		粗砂		しまり強・グライ化・起伏顕著
37	暗緑灰色	5 G4/1	粘土	4~43		祖砂(緑色)多量		しまり強・グライ化・起伏顕著
38	緑灰色	7.5G Y6/1	粘土	2~36		田田 (外に) 夕里		しまり強・グライ化・起伏顕著
39	灰褐色	7.5Y R4/2	粘土	2~24		小枝等の樹木を少量		しまり強・グライ化・起伏顕著
40	緑灰色	10G Y 5/1	粘土	10~29		17以中ツ阿小とグル		腐植土層・しまり強・グライ化・起伏顕著
\vdash	緑灰色		柏工 砂質シルト			(m) 4 展		しまり強・グライ化・起伏顕著
\vdash		7.5G Y6/1		5~20		細砂多量		しまり有・グライ化・起伏顕著
42	緑灰色	7.5G Y5/1	砂	5~16		相砂		しまり有・グライ化・起伏顕著

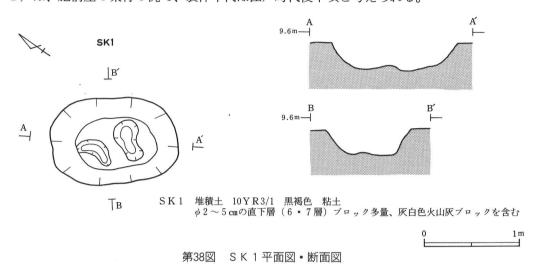






呈す。上端規模約130×90cm、下端規模約85×55cmで、深さは約30cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が認められる。堆積土は単層である。堆積土中には、検出層以下の基本層ブロックが多量に含まれており、短時間に人為的に埋め戻された様相を呈す。土坑の性格は不明である。

〈出土遺物〉堆積土の上部より磁器の破片資料が1点出土したのみである。この磁器(写真68 - 2)は、肥前産の染付の椀で、製作年代は江戸時代後半頃と考えられる。



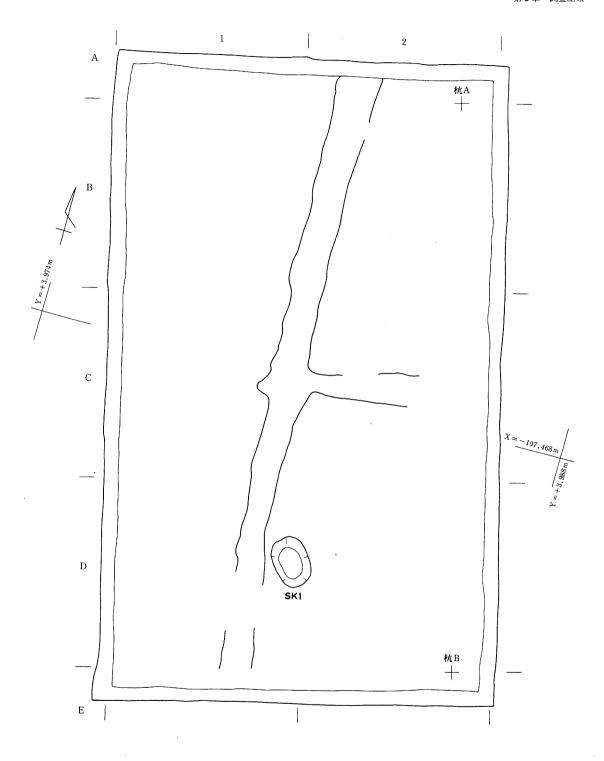
4層水田跡 (第37·39·40図•写真19·25·68)

〈遺構状況〉4層上面及び少し4層を下げた段階で、帯状に延びる5層の若干の高まりが検出された。これは5層水田跡に伴う畦畔の可能性もあるが、5層が帯状部分にしか存在しない点(第37図,写真25)より、4層水田跡に伴う擬似畦畔Bと考えられる。擬似畦畔Bは、ほぼ真北方向に直線的に延びるものとこれにほぼ直角に交わる2条が検出されている。両畦畔の交わり方は「T字」状で、方形を呈する3区画の水田の存在が推定される。擬似畦畔Bの幅は約70~100cmで水口の有無は不明である。耕作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは上層の撹乱でかなり削平されており、平均で8cm程である。耕作土中には、部分的に灰白色火山灰の小ブロックを多量に含む箇所が認められ、下部には下層ブロックを含む。なお、耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。

〈出土遺物〉土師器片 1 点と須恵器片 4 点が出土している。土師器片は甕の体部資料であるが、小破片のため図化不可能であった。また、内外面摩滅しており調整も不明である。 4 点の須恵器片及び 2 ・ 3 層出土の須恵器片は全て同一個体であった。 1 / 2 程復元できる坏(第39図)で、底部は回転糸切りの後無調整のものである。

第39図 4層水田跡出土遺物

挿図番号	図版番号	遺構・層位	種 別	器種	遺存度	口径 (cm)	底径 (cn)	器高 (cm)	特	徵
第39図	写真68-1	4層	須恵器	坏	約1/2	14.8	6.2	4.2	底部切り離し一回転糸切無調整	



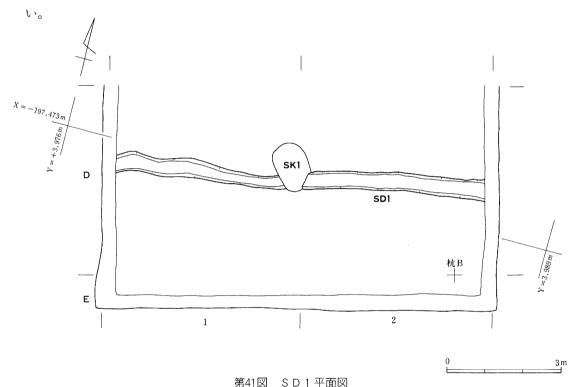


第40図 4層水田跡擬似畦畔B•SK1平面図

(2) 7層上面

1号溝跡-SD1-(第35·36·41図•写真21)

調査区の南側、 $D-1 \cdot 2$ グリッドに位置し、調査区を東西方向に横切る小規模な溝跡である。一部をSK1 に切られる。上端幅40cm前後、深さ5 cm前後で、断面形は「U字」状を呈する。堆積土は上層の6 層が入り込みこの溝跡の堆積土となっている。出土遺物は無い。溝跡の性格であるが、人為的な溝というよりは、その規模、堆積土状況から自然流路跡の可能性が高

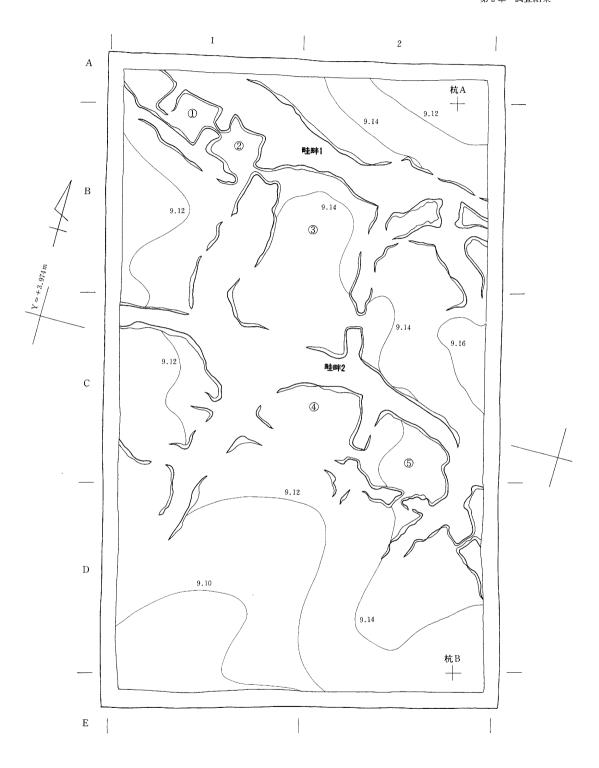


(3) 11層上面

11層水田跡 (第35 · 37 · 42図 • 写真22 · 23 · 26~28)

小区画の水田が10区画以上検出された。畦畔の検出面は 9 層下面から10層上面である。水田 跡に伴う出土遺物は無かった。

〈畦畔の規模〉畦畔は耕作土と同一土壌-11層-を盛り上げて作られている。畦畔には、畦畔 1 のように下端幅 $1 \sim 1.5$ mの広いものと、 $30 \sim 50$ cmの狭いものの両者が認められる。下端幅 の広いものの内、畦畔 1 は直下層に擬似畦畔 B が形成されていることより大畦畔と考えられる (第37図)。下端幅が狭いものは大畦畔に対しての小畦畔とみられる。畦畔 1 を除く下端幅の 広いものは、擬似畦畔 B の存在が明確でないことより、大畦畔なのか小畦畔が崩れて広がったものなのか判別できない。耕作土上面からの高さは大畦畔(畦畔 1)が 8 cm 前後、小畦畔が $2 \sim 4$ cm である。



0 3m

第42図 11層水田跡平面図

第3節 富沢遺跡第81次調査

〈畦畔の配列〉大畦畔である畦畔1の方向性(N-75°-W)に対し、他の畦畔はほぼ平行か直交方向を取る。畦畔1と同一方向のものは直線的で無いにしろ連続性が認められるが、直交方向のものは連続性に欠ける。畦畔の交わり方は「+」状・「T|字状の両者がみられる。

〈水田1区画の形状と規模〉明確に区画の形状と面積が判るものあるいは推定できるものは5区画である(区画①~⑤)。これらの区画の形状は、畦畔が直線的でないために不整形ではあるが、ほぼ方形を基調としている。区画面積は大・中・小の3つに分けられる。大は区画③がこれに相当し、10㎡前後のもの。中は区画④・⑤がこれに相当し、3㎡前後のもの。小は区画①・②がこれに相当し、1㎡前後のものである。不明確な区画の内、区画④・⑤の南側・西側・東側の区画は、畦畔の残存状況より中の区画面積とも考えられる。その場合、中の区画面積のものは、全て畦畔2の南側に位置したことになる。区画①の西側の区画は、小の区画面積と考えられ、大畦畔の南側に沿って小の区画面積のものが並らべている。区画③の東側にも大畦畔の南側に位置する小の規模の区画らしきものが2区画認められるが、この2区画に関しては、畦畔上の窪の可能性もあり、積極的に区画として認定できない。

〈耕作土と耕作域〉12層あるいは13層上部までを撹拌し、泥炭質粘土の耕作土としているが、全体的に母材となった層の撹拌状況は悪い。Dライン以南になるとその状況はさらに悪くなり、また、耕作土も薄く、12層も厚く残存しており、畦畔が途切れる以南は、非耕作域となっていた可能性もある。耕作土の厚さは下面の起伏が顕著で安定していないが、平均で8cm前後、最大で18cmである。下面には鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の傾斜〉全体の水田面の標高は9.10~9.16mで、北側方向・南側方向に緩やかな下り傾斜、北西側方向・東側方向に緩やかな上り傾斜となり、全体的な一方向への傾斜は認められない。各区画内の耕作土上面の比高差は、区画面積が大のものが約4 cm(区画⑤4.1cm)、区画面積が中のものが約2.5cm(区画⑥2.4cm、区画④2.7cm)、区画面積が小のものが約1.5cm(区画①1.3cm、区画②1.7cm)で、いずれも5 cm以下であった。

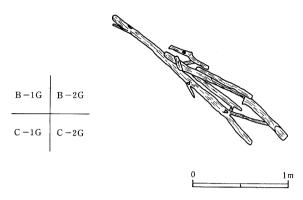
〈水口〉水口は大畦畔には認められなかったが、小畦畔として認識できるもの全てに認められた。水口底面のレベルは、耕作土上面よりやや高いものとほぼ同じものがある。水口が取り付く位置には傾向性は見られないが、区画②のように3辺の畦畔に水口を設けるものも認められた。

(4) 14層上面

樹木片集中箇所 (第43図・写真24)

B-2 グリッド南西コーナー付近で、樹木片がまとまって出土した。全て直径10cm以下の自然の樹木で、最長のものは約2 mを測る。人工的な切断面、加工面は持たない。また、火を受けた痕跡も樹木及び周辺の14層には認められなかった。出土地点の14層上面が窪地状になって

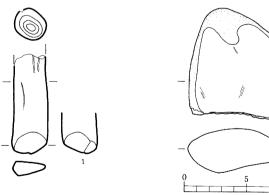
いたことより、流木がこの部分に集中したものと考えられる。



第43図 14層上面樹木片集中地点平面図

(5) その他の出土遺物 (第44図・写真68)

基本層 1・2・3・8・33層から土師器片・赤焼土器片・須恵器片・土師質土器片・陶器片・磁器片・礫石器・杭が合計10点出土した。この内、礫石器と杭を除くものは、細片で、図化不可能であった。土師器片は1層より、赤焼土器片は3層より各1点の出土である。須恵器片は、2・3層より各1点出土したが、これらは4層水田跡出土の坏と同一のものである。土師質土器片・陶器片・磁器片は全て1層出土で、この内、陶器・磁器は全て近世以降のものである。杭は8層下面で1点出土している(第44図1)。直径約3cmの丸木を素材とした細いものである。出土地点はD-2グリッドの北側で、南西方向に斜めに打たれており、先端は9層上部に達している。大半を欠失しており、正確な打ち込み層位は不明である。礫石器は33層上面より1点出土している(第44図2)。この礫石器は、1面のみに擦痕を持つやや偏平な磨石である。



第44図 出土遺物

10cm

挿図番号	図版番号			重 別	材	質 素材形状	長さ	直径	先端加工	表面加工	備	考
第44図-1	写真68-4	8層	下部	杭	-	一 丸太材	8.1cm	2.8cm	3 方向		樹皮一部残存	
挿図番号	図版番号	遺構・層位	長さ (m)	幅	(mm)	厚さ (m)	重さ (9)	石 質		備		考
第44図-2	写真68-3	33層上面	108	10	1	35	340	石英安山岩	唐面10	面、擦痕方向	可不明	

4. 遺構の所属年代とまとめ

- 1. 検出遺構としては、SK1、SD1、3層・4層・5層・11層の4期の水田跡が検出され た。また、水田跡の可能性がある層としては、基本層2層が上げられる。
- 2. 4層上面検出のSK1は、掘り込み層位が不明な土坑であるが、その出土遺物より3層以 降の可能性が強い。
- 3. 7層上面検出のSD1は、小規模な溝跡であるが、自然の水の流れによって形成された自 然流路跡と考えられる。
- 4. 4期の水田跡の内、3層・5層の各水田跡は耕作土のみの検出である。しかし、両層は富 沢遺跡北部A地区基本層序(佐藤:1992)の3a層・5層に対応し、この基本層序に包括され る第5・7・14次調査区等で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した。
- 5. 検出水田跡の所属年代であるが、出土遺物が皆無、あるいは数量的に乏しいことより、出 土遺物からの時代決定は困難であるが、4層中に灰白色火山灰が混じること、富沢遺跡北部A 地区基本層序との層の対応関係が可能であったことより、以下のような所属年代が想定される。
 - 3層水田跡-近世
 - 4 層水田跡-平安時代(灰白色火山灰降下以降)
 - 5 層水田跡-古墳時代以降、平安時代(灰白色火山灰降下以前)以前
 - 11層水田跡-弥牛時代(桝形囲式期)
- 6. 基本層 1 層から14層までは、富沢遺跡北部 A 地区基本層序との対応関係が認められる。そ の対応関係は以下のとおりである。
 - 1層(富沢遺跡北部A地区基本層序1層)2層(同2層)
- 3層(同3a層)
- 4層(同4a層)
 5層(同5層)
 6層(同7層)
- 7層(同8b層)

- 8層(同 9 b層) • 9層(同10 a 層) • 10層(同10 c e 層) • 11層(同11層)
- 12層(同12 a b 層) 13層(同13層) 14層(同14層)
- 7.基本層32層から42層までは、富沢遺跡第30次調査下層基本層序(太田:1991)と対応する 可能性がある。その対応関係は、以下のとおりである。
 - 33層(富沢遺跡第30次調査16層)34層(同17層)
- 35層(同18層)

- 36層(同19層)
- 37層(同19層) 38層(同19 20層) 39層(同25 26層)

- 40層(同27層)
- 41層(同28層) 42層(同28層)

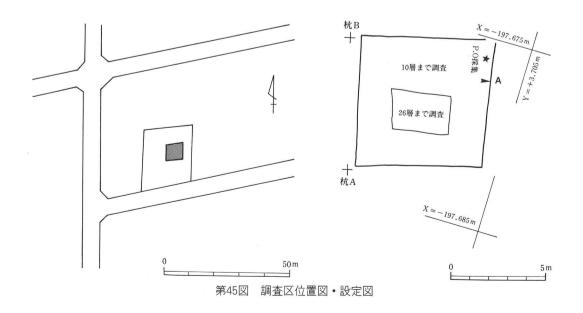
第4節 富沢遺跡第82次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $6.7 \times 7.1 \text{m}$ (43.31 m)である。調査は、盛土及び直下の1 層(旧水田耕作土)までを重機で排除し、以下は人力により行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。 9 層までは調査区全面の精査を実施し、10 層以下は約 $2 \times 3 \text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭 $A \cdot B$ を基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A: X=-197,677.05 m Y=+3,703.59 m 杭B: X=-197,683.81 m Y=+3,705.46 m)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別26層、細別28層が確認された。各層の土質は粘土が主体であるが 6 層~15層は泥炭質粘土となっている。16層から以下はグライ化が進み、砂、粘土が交互に堆積している。現代のものをのぞく水田土壌の可能性のあるのは、 $3 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 9$ 層である。 $2 \sim 4$ 層中から灰白色火山灰を検出しているが、下層からの巻き上げと考えられる。全体的な層の傾きは東側にごく緩やかに下がっている。なお、当調査区の約50m北側に第30次調査区があり基本層序に対応関係が認められる。対応関係については後述する。



3. 検出遺構と出土遺物

(1) 5層上面

1号溝跡-SD1-(第47図)

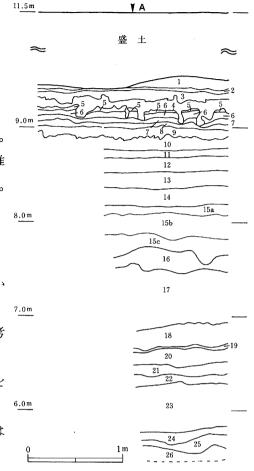
北西から南東方向へ直線的に延びる溝跡である。 上端幅約65cm、下端幅30~38cm、深さ約24cmである。 底面は平坦で南東へわずかに下がる程度である。堆 積土は1層で、層下部に植物遺体を若干含んでいる。 遺物は出土しなかった。

(2) その他の出土遺物 (第48図)

14層、15a層から磨石が1点づつ出土している。 (1、2)磨面は片面にのみ認められ非常に滑らかである。

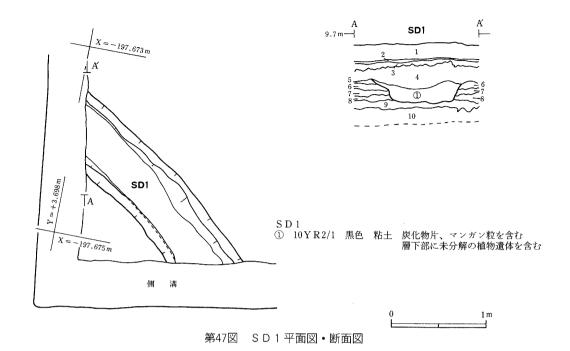
(3)は1層下部より出土しており脚か台の破片と考えられるが、類例がなく器形の特定が困難である。 時期は江戸以降と考えられる。今後の資料の増加を 待ちたい。

他には4層から須恵器片が出土しているが図示は 困難である。



層序	色	調	土 質	層厚(cu)	酸化鉄	混入物	水田土壌	備考
1	黒褐色	2.5Y3/1	シルト質粘土	16		炭化物片	0	
2	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	4		炭化物・灰白色火山灰		
3	黒	10YR2/1	粘土	8	糸根状	炭化物 • 灰白色火山灰	?	下面著しく凸凹
- 4	黒	2.5Y2/1	粘土	16	層上部糸根状	灰白色火山灰・層中に5層・6 層の土をブロック状に含む	?	下面著しく凸凹
5	黒	5 Y2/1	粘土	4		植物遺体	?	部分的分布
6	黒	10YR1.7/1	泥炭質粘土	6		未分解の植物遺体		
7	黒	2.5Y2/1	泥炭質粘土	6	量管状		?	AND
8	黒褐色	2.5Y3/1	泥炭質粘土	6		未分解の植物遺体 (多量)		
9	黒	5 Y2/1	泥炭質粘土	12		未分解の植物遺体 (多量)	?	下面に凸凹
10	黒	10YR1.7/1	泥炭質粘土	20		未分解の植物遺体 (多量)		***************************************
11	黒	5 Y2/1	泥炭質粘土	8				層下部に黒褐色粘土 (2.5 Y 3/2が部分的に分布)
12	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭質粘土	14				
13	黒	2.5Y2/1	泥炭質粘土	16				層下部には黒褐色2.5Y3/1
14	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭質粘土	18				ALAMAN MANAGEMENT
15 a	黒	5 Y2/1	泥炭質粘土	12				
15 b	黒褐色 灰色	2.5Y3/1 5 Y5/1	泥炭質粘土 粘土	20		未分解の植物遺体		
15 c	オリーブ灰色	5 G Y 5/1	粘土	15		未分解の植物遺体・炭化物		グライ化
16	緑灰色	10G Y 6/1	細砂細砂	22		未分解の植物遺体		グライ化
17	緑灰色	10G6/1	粘土	55		未分解の植物遺体・炭化物		層中程に 5 G 5/1をブロック状に含む・グライ化
18	青灰色	10BG6/1	砂質粘土	22		Wilderson Control		グライ化
19	緑灰色	5 G6/1	粘土	3		炭化物		層下部は緑灰砂 (10G5/1) グライ化
20	緑灰色	10G5/1	細砂	16		炭化物		層下部粘土と砂のうすい互層グライ化
21	緑灰色	10G6/1	粘土	11				グライ化
22	緑灰色	5 G6/1	細砂	9				粒子の径の違う砂の互層・グライ化
23	暗青灰色 緑灰色	10BG4/1 5G5/1	細砂 砂質粘土	50		Management of the party of the		砂、粘土のうすい互層・グライ化
24	緑灰色	10G5/1	粘土	8				グライ化
25	オリーブ灰色	5 G Y 5/1	粘土	8				グライ化
26	暗緑灰色	5 G4/1	砂	12				グライ化
	THE SERVICE LA	0 0 1,1				4000 #+	L	[2,2,116

第46図 基本層序



(3) 下層の調査

旧石器時代に相当する層の調査は、 1×1 mの調査区を設定し26層まで実施した。富沢遺跡で旧石器時代の植物遺体などを出土する層(腐食粘土層)の確認につとめたが、当調査地点では検出されなかった。

4. 所属年代とまとめ

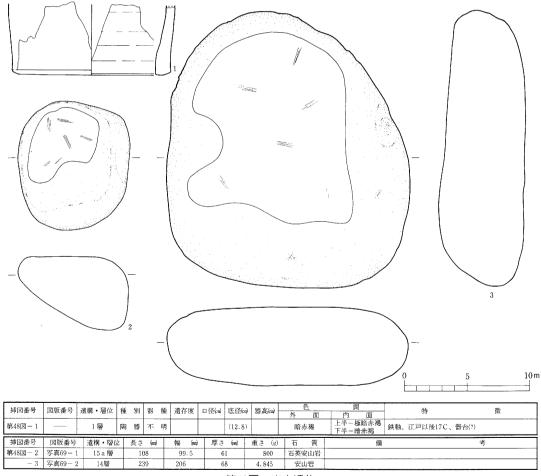
- 1. 検出遺構は 5 層上面で溝跡が 1 条検出されたのみであるが、その性格については不明である。 $3 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 9$ 層の各層は、その層相観察より水田土壌の可能性が高い。
- 2. 各層の所属年代であるが、隣接する第30次調査区との対応より以下の所属年代が想定されるが、出土遺物が少なく、また、遺構の検出も少ないので確定的なものではなく幅のあるものであると考えられる。

82次調査区	30次調査区	所属年代
3層	4 • 5層	中世~
4層	6 • 7層	平安時代(灰白色火山灰降下以降)
5層	8 a 層	古墳時代
6層	8 d層	弥生時代~古墳時代
7層	9層	

第4節 富沢遺跡第82次調査

8層	10層	弥生時代
9層	11層	
10層	12層	
14・15層	13・14・15層	縄文時代
16層	17層	
17層	19層	

3. 第30次調査との関連から、16層以下は旧石器時代に含まれる層の可能性が考えられるが、第30次調査で確認された旧石器時代の樹木を含む腐食粘土層が当調査地点では認められず、水性堆積を示す層が厚く堆積していることが確認された。このことにより第30次調査の南西側では、当時の人々が生活できる環境ではなく水性堆積作用を受ける環境にあった可能性が考えられる。さらに周辺の地域の調査が進むことによってより詳しい環境復元が可能となろう。



第48図 出土遺物

(註1) 腐食粘土層については富沢遺跡第57次調査(佐藤他:1991) を参照

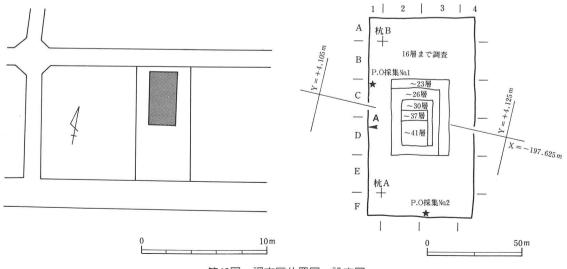
第5節 富沢遺跡第83次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約21×11m(231㎡)である。調査は、盛土及び直下の1層(旧水田耕作土)下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。調査は16層上面までは、調査区全面の精査を実施し、16層以下は、約8×6mの試掘区を設けて掘り下げた(最下層面では約2.8×2.6m)。遺構の測量は、任意に設定した4×4mグリッド(南北軸A~F、東西軸1~4)を基準として実施した。なお、グリッド基準杭(杭A・B)の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A:X=-197633.599m、Y=+4113.633m 杭B:X=-197617.996m、Y=+4110.113m)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別38層、細別では40層が確認された。各層の土質は、7層までが粘土、8層から25層までは主として泥炭土あるいは泥炭質粘土、26層から35層までは粘土、36以下は粘土層を若干介在するが砂となる。35層以下の各層は、堅くしまっており、特に37層以下では著しい。グライ化は、31層以下から漸時進み、32層以下では顕著である。3・4・5・29層からは、火山灰が検出されている。この内3・4・5層中のものは灰白色火山灰である。3・4層中の火山灰は、5層中に入っていたものが、後の3・4層の撹乱により3・4層中に巻



第49図 調査区位置図・設定図

き上げられたものである。また、29層中のものは、第28次調査29層中検出のものと同一のものと考えられる。現代のものを除く明確な水田土壌は3・5・6・12 a・13層の各層であるが、2・4・7層の各層も水田土壌の可能性がある。遺物出土層は1・2・3・4・5・6・8・12層である。各層の傾きとしては、1~17層までは南方へのややきつい下り傾斜(勾配約1%)を傾斜を示す。18層以下では、調査区が狭く全体的な傾向性はつかめないが、19層以下では傾斜方向が変化し、東方への緩やかな下り傾斜となる。ただし、31層以下では、層が不安定となり、傾斜方向の傾向性は認められない。なお、当調査区の基本層序の内、1~17層の各層は、富沢遺跡北部A地区基本層序(佐藤:1991)と対応関係が認められる。

3. 検出遺構と出土遺物

3層・5層・6層・12 a 層・13層で水田跡が検出された。ただし、5・6層に関しては耕作土のみの検出である。また、5水田跡上面では自然流路跡が、34層上面では河川跡が1流路(SR1)が検出された。

(1) 3層上面

3層水田跡

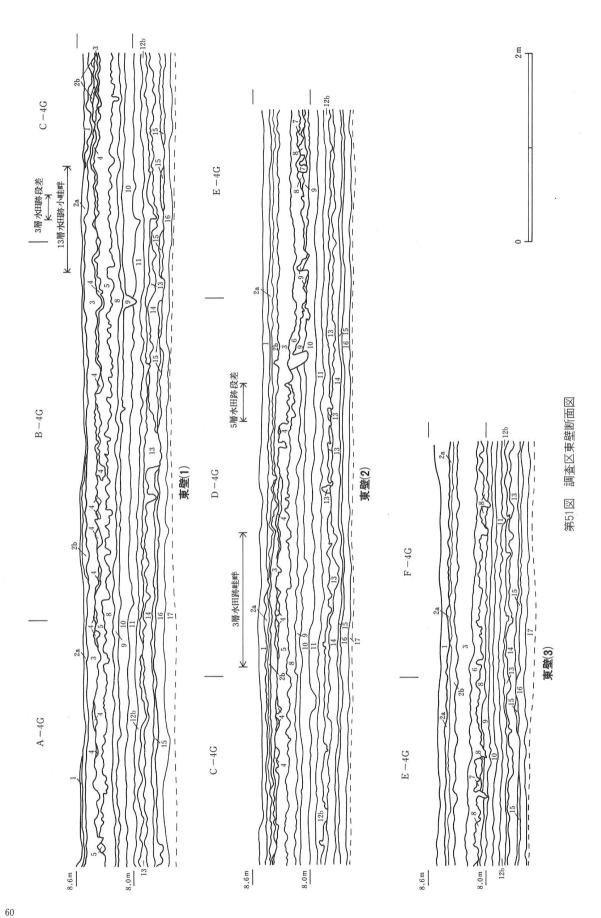
(第54~56図・写真35·36·47~49·70·71) ほぼ真北方向をとる畦畔とほぼこれに直行方向に

ほほ真北方向をとる畦畔とほぼこれに直行方向に 交わる畦畔と段差による、5区画の水田跡が検出さ れた。畦畔の検出面は2層中である。直上層の撹乱 により、本来の水田面は保持していない。このため 南北畦畔・東西畦畔とも遺存状態が悪く、断片的な 検出である。

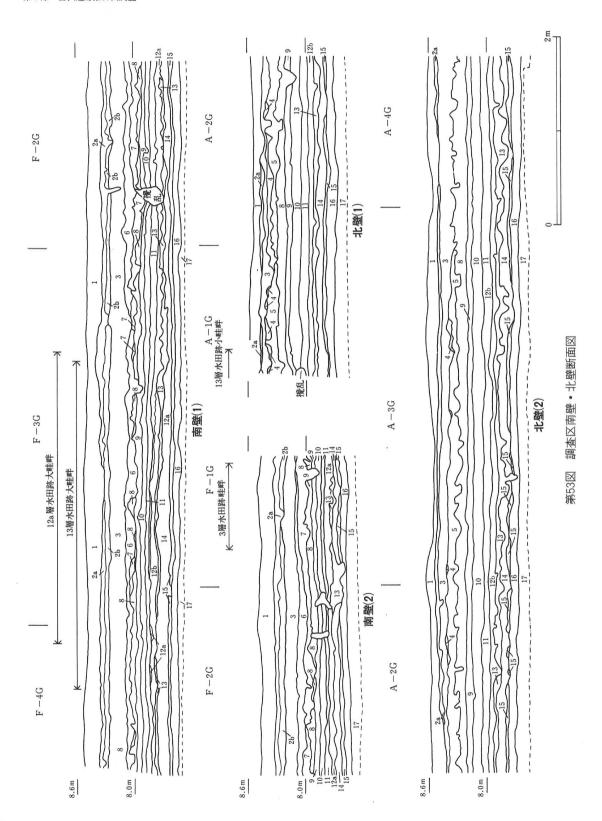
y A 10.0m 盛 土 8.0m = 17 18 7.0 m 23 25 26 27 5..0 m SRI堆① SRI堆④ 37 38b ※①・④はSRI堆積土 第50図 基本層序

〈畦畔と区画〉畦畔は、耕作土と同一土壌-3層-を盛り上げて作られている。南北畦畔、東

層序	色	調	土質	層厚(cn)	酸化鉄	混入物	水田土壌	備考
1	オリーブ黒色	5 G Y 2/1	粘土	2~22	量管状斑紋	10 / 12)	0	少しグライ化
2 a	オリーブ黒色	5 Y 3/2	シルト質粘土	2~12	量管状斑紋多量	粗砂少量	?	少しグライ化
2 b	黒	2.5G Y2/1	シルト	$2 \sim 9$	量管状斑紋	粗砂	?	
3	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	2~26	量管状斑紋	マンガン結核・下部に下層ブロック・灰白色 火山灰粒少量	0	
4	黒	10 Y R 2/1	粘土	$2\sim 8$	量管状斑紋	マンガン結核・下部に下層ブロック・灰白色 火山灰粒少量	?	
5	褐灰色	10 Y 4/1	粘土	2~16	量管状斑紋	マンガン結核・下部に下層ブロック・灰白色 火山灰ブロック	0	
6	黒	10YR2/1	粘土	2~17	量管状斑紋	マンガン結核・下部に下層ブロック	0	
7	褐灰色	10 Y 4/1	粘土	2~14	量管状斑紋	マンガン結核・下部に下層ブロック	?	
8	黒 にぶい黄橙色 黒褐色	10 Y R 1.7/1 10 Y R 6/3 10 Y R 3/1	泥炭土 粘土	2 ~20	量管状斑紋	MINISTER COMPANY AND ADMINISTRATION OF THE PARTY OF THE P		互層
	灰黄褐色	10 Y R 5/2	泥炭質粘土 粘土		- 700		-	
9	黒 灰黄褐色	10 Y R 2/1 10 Y R 4/2	泥炭土 粘土	2~11	量管状斑紋			互層
	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭土					
10	暗赤褐色	5 Y R 3/2	泥炭土	2~13				五層
'	にぶい黄褐色	10 Y R 5/3	粘土	n -10		···· -		duna duna
	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭土					
11	褐灰色 にぶい黄橙色	10 Y R 4/1 10 Y R 6/3	泥炭質粘土 粘土	2~13			_	五扇
1 ' 1	にかい典位已 黒	10 Y R 0/3	和土 泥炭土	2 13				互層
12 a	暗灰黄色	2.5Y4/2	泥炭質粘土	2~14		12 b 層のブロック多量	0	大畦畔上は暗灰黄色のよごれた色調
	灰黄褐色	10 Y R 6/2	粘土			7 7 200		へんこう ユニャログスストランス しょいて 口間
12 ь	灰黄褐色	10 Y R 4/2	粘土	2~11		植物遺体		互層
	にぶい黄褐色	10 Y R 5/3	泥炭質粘土					
13	黒褐色	10 Y R 2/2	泥炭質粘土	2~15		植物遺体多量 (畦畔部分顕著)	0	
ا . ا	黒褐色	10 Y R 2/2	泥炭土					
14	黒 井塚井	10 Y R 1.7/1	泥炭土	2~15		***************************************		互層
15	にぶい黄橙色 灰黄褐色	10 Y R 6/3 10 Y R 5/2	粘土	0 - 0		10h Mar 12h 64-		20 0 May 0 - fr
15 16	<u> </u>	10 Y R 5/2 10 Y R 1.7/1	粘土 泥炭土	$2 \sim 9$ 2 ~ 15		植物遺体		部分的な分布
	黒褐色	10 Y R 2/3	泥炭土					
17	黒褐色	10 Y R 2/3	泥炭土	i1~20		植物遺体多量		互層
10	黒	10 Y R 2/1	泥炭土	0 15				T [2]
18	にぶい黄橙色	10 Y R 6/3	粘土	6 ~15				互層
19	にぶい黄褐色	10 Y R 5/3	粘土	9~18				互層
17	黒	10 Y R 1 . 7/1	泥炭土	2 ~10				5.78
20	黒 ####################################	10 Y R 1.7/1	泥炭土	2~9			l	互層・互層が不明確になる部分あり
21	にぶい黄橙色 黒	10 Y R 6/3	粘土 .					
41	黒褐色	10 Y R 2/1 10 Y R 3/2	泥炭土 泥炭土	$2 \sim 7$				
22	黒褐色	10 T R 3/2 10 Y R 2/2	泥炭土	17~24		上部に植物遺体多量		互層
	にぶい黄橙色	10 Y R 6/3	粘土					
	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土					
23	灰色	7.5Y6/1	粘土	42~49		植物遺体		互層
	黒	10 Y R 1 . 7/1	粘土					
	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土					
24	黒	10 Y R 1.7/1	粘土	$5 \sim 9$		植物遺体		互層
\vdash	黒褐色 ^田	10 Y R 3/1	粘土					
25	黒 にぶい黄橙色	10 Y R 2/1 10 Y R 6/3	泥炭土 粘土	16~22		植物谱休务器		万國
20	にかい更位品 黒	10 Y R 6/3	和工 泥炭土	10-22		植物遺体多量		互層
	灰黄褐色	10 Y R 5/2	粘土				<u> </u>	
26	褐灰色	10 Y R 4/1	粘土	23~28		植物遺体少量		互層
	黒	10 Y R 2/1	粘土					
27	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	12~20		植物遺体少量		互層
<u> </u>	黒	7.5Y2/1	粘土	10 -00		III IVAS IT Z III.		2/8
28	灰色	10Y5/1	粘土	$2\sim 5$		植物遺体		互層
	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭土					
29	黒褐色	2.5Y2/1 10YR3/1	粘土 粘土	3~6		植物遺体少量・層の中間に45cmの浅黄色火 山灰ブロック		
30	黒	10 Y R 1.7/1	村工 粘土	25~66		植物遺体少量		互層
	灰色	10 Y 5/1	粘土					
31	灰色	10 Y 4/1	粘土	4~22		φ 2 ~ 3 cmの黒色粘土斑		グライ化
32	緑灰色	7.5G Y5/1	粘土	3~22		φ2~3 cmの黒色粘土斑		グライ化顕著
33	緑灰色	7.5G Y5/1	シルト質砂	12~55		φ5 mmの炭化物・φ2~3 cmの黒色粘土斑		グライ化顕著
34 35	緑灰色 暗オリーブ灰色	7.5G Y5/1	粘土	2 ~21				河川切り込み層・グライ化顕著
35		2.5G Y4/1	粘土	2~21		∮5 mmの炭化物粒・植物遺体少量		しまり有・グライ化顕著
36	オリーブ灰色	5 G Y 5/1	砂	2~30		植物遺体少量		粗砂・間に粘土層介在・しまり有・ グライ化顕著
37	緑灰色	5 G6/1	粘土	4~55		植物遺体少量		しまり強・グライ化顕著
38 a	緑灰色	5 G5/1	砂	$4\sim\!60$				しまり強・下にいくに従い砂の成分 が粗くなる
38 ъ	緑灰色	5 G6/1	粘土	2~26		植物遺体少量		か私くなる しまり強・38 a 層中に介在
		, -		_ = =				[0 0 7 24 00 0 /H T T = /1 FL



第52図 調査区西壁断面図



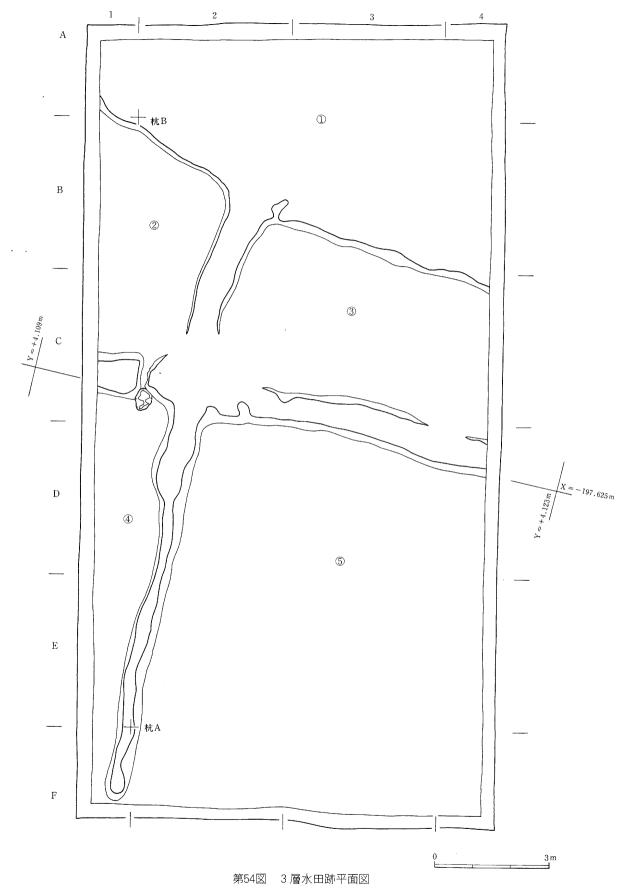
西畦畔とも下端幅が $1 \, \text{m}$ 前後であるが、南北畦畔は、 $D-2 \, \text{//y}$ ッド南半以南は $60 \, \text{cm}$ 前後と狭くなる。畦畔の耕作土上面からの高さは、遺存状態の良い場所で約 $5 \, \text{cm}$ である。両畦畔の交わり方は「+」状で、南北畦畔の北側は、東西方向の段差に取り付いている。また、南北畦畔の南側は、 $F-1 \, \text{//y}$ ッドで完結しているが、調査区南壁には畦畔の続きが認められており(第53図)、この部分に水口が取り付けられていた可能性がある。段差は、ほぼ直線的に延びる比高差が $2\sim 5 \, \text{cm}$ 程の低いものである。本来は、段上に畦畔が取り付いていたものと考えられる。また、段上では、南北畦畔が更に北方へ延びていた可能性等もあり、区画①は、本来の区画面積を示しているかどうかは不明である。 $1 \, \text{区画全体が検出されたものはないが}$ 、各区画の形状は、方形を基調としている。区画1辺の長さが判るものは、区画②・③でそれぞれ4.7~5.5 m・3.6~4.1 mである。

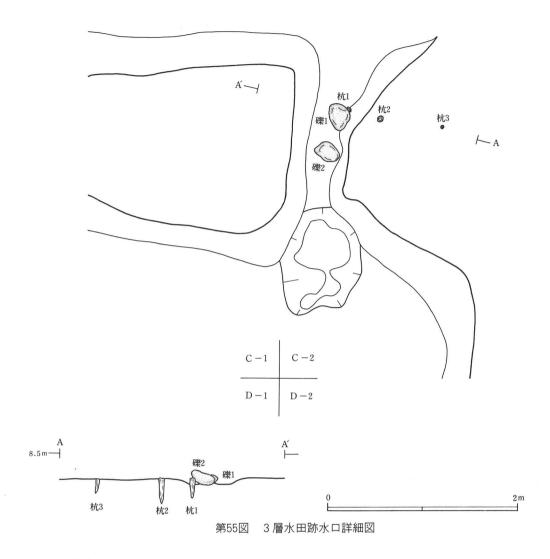
〈耕作土〉耕作土の土質は粘土である。下面の起伏は顕著で、下部に下層ブロックを含む。耕作土の厚さは東西畦畔を境として南側は厚く平均で20cm、北側は薄く10cm以下の部分が多く、耕作土が認められない箇所もある。この差は、水田面の傾斜と上層の撹乱深度の差に起因する。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の標高と傾斜〉水田面の標高は8.20~8.50mの間である。水田面は、南下がりのややきつい傾斜となっており、当然の結果として、南側の区画ほど水田面が低くなっている。

〈水口〉明確な水口は、区画②と区画④の間の東西畦畔で検出されている。南北畦畔との交点付近に位置しており、底面には10cm大の偏平な円礫が2点(礫1・2)南北方向に並んで置かれ、礫2の東脇に杭が1本(杭1)そして東側の畦畔上に杭2本(杭2・3)が直線状に打たれている。杭の間隔は杭1と杭2が約15cm、杭2と杭3が約35cmである。また、水口南側前面(区画④内)には、深さ5cm程の小さな窪が検出された(第55図)。礫は1面(礫2)或は両面(礫1)に磨痕を持つもので(第56図1・2)、杭は直径2cm前後の丸木を素材とした細いもので、大半を欠失している(第56図3・5)。これら礫及び杭の配列は、この水口における水利施設の存在を想定させるものと言える。水口の底面は、区画②と区画④の水田面の高低差に合わせ区画④方向に下がっている。また、底面の高さは、いずれの水田面よりやや低かったと推定される。なお、水口南側前面の窪は、区画②より流れ落ちてきた水の影響によってできたものと考えられる。

〈出土遺物〉水口で出土した礫・杭を除く出土遺物は、土師器・赤焼土器・須恵器・陶器等で27点出土している。全て図化不能な小破片資料である。陶器は鉄釉のものが1点出土しているが、器種、産地、製作年代は不明である。

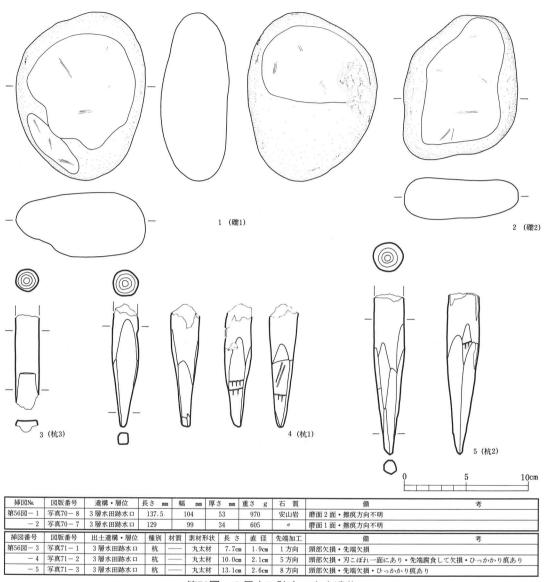




(2) 5層上面

5層水田跡 (第51·52·57·58図·写真37·50·70)

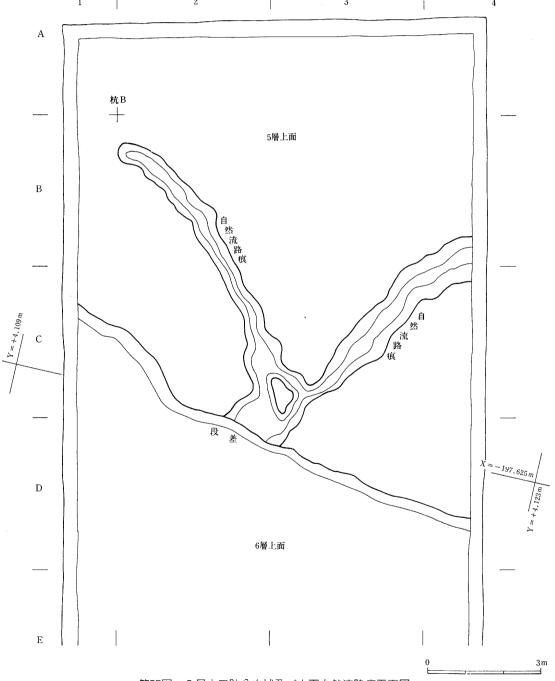
〈遺構状況〉5層水田跡は、耕作土のみの検出である。耕作土も調査区全面に広がっておらず、 北半のみの分布で、南半は3層下が直接6層上面となる。6層上面との境界はほぼ直線的で、10 cm程の段差となっている(第57図:段上が5層水田跡)。境界ラインは、3層水田跡東西畦畔 の南側約1mに位置しており、段差の形成及び段差南側の耕作土消失原因は、3層水田跡によ るものと考えられる。従って、本来は、段差南側にも耕作土が広がっていたものと想定される。 事実、段差南側の3層中には、5層ブロックが多量に含まれ、さらに、後述する5層水田跡上 面の自然流路痕が、段差で途切れるといったことは、これらを傍証するものと考えられる。耕 作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは上層の撹乱でかなり削平されており、



第56図 3層水田跡水口出土遺物

平均で10cm程である。耕作土中には、部分的に灰白色火山灰の小ブロックを多量に含む箇所が認められ、また、下部では下層ブロックを含む。なお、耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は、 $8.3\sim8.4$ mの間で、水田面の傾斜は、南方向への緩やかな下り傾斜をとる。なお、5層水田跡上面で、流水によるものと考えられる複数の自然流路跡が検出されている。上端幅 $50\sim100$ cm、深さ $5\sim10$ cmの上端幅、底面とも不安定な、蛇行する小規模な2流路で、南側で合流する。検出層位は、5層上面であるが、実際の切り込み層位が、4層上面であるか5層上面であるかは不明である。

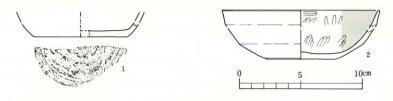
〈出土遺物〉土師器が10点、須恵器が2点、剥片が2点出土した。土師器は全て破片資料で、 1点の調整不明のものを除けば、全てロクロ使用である。ロクロ使用のものの内4点と4層出 土の破片資料2点が接合した。坏の口縁部から底部までの資料で(第58図2)、底部は回転糸 切り、その後の調整の有無については、摩滅のため不明である。内面は、ヘラミガキの後黒色



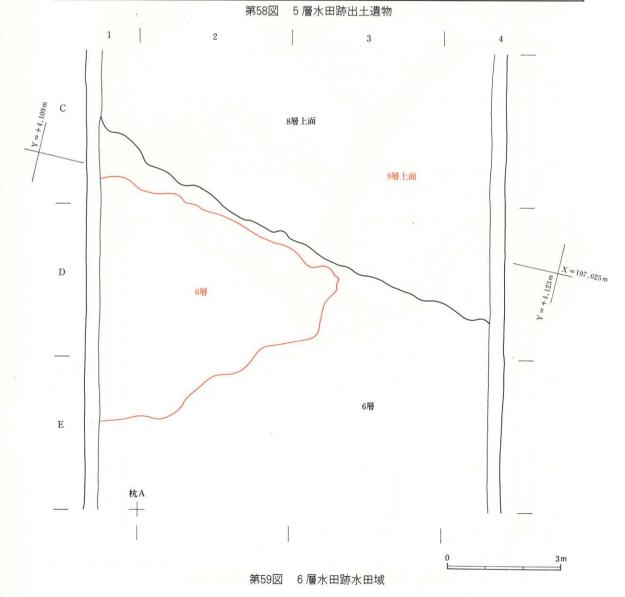
第57図 5層水田跡分布域及び上面自然流路痕平面図

第5節 富沢遺跡第83次調査

処理が施されている。須恵器はいずれも坏の破片資料で、この内1点が図化可能であった。体部下端から底部にかけての資料で(第58図1)、底部は回転へラ切りの後無調整である。



挿図番号	図版番号	遺構・層位	86 QII	98 66	潘左座	D (X/m)	底(水(~)	即宣仙	色	1周	44	295,
M- by III - N	POWER III - 2	NET HAT . VIII INC.	1M .09	per the	旭市区	to DE gray	35.1王 (m)	to tellerin	外面	内面	44	DEX
第58図-1	写真70-1	5層水田跡	須恵器	坏	底部1/2	-	(7.6)	_	灰白	灰白	外面=ロクロ 内面=ロクロ	
- 2	写真70-4	5層水田跡	土師器	坏	2/5	_	(5.4)	-	灰白	黒	外面-摩滅している、ロクロ 底部-回 内面-ヘラミガキ・黒色処理	転糸切り、ほとんど摩波している



(3) 6層上面

6 層水田跡 (第59·60図 • 写真38·39·50·70)

〈遺構状況〉 6層水田跡も耕作土のみの検出である。耕作土は、5層水田跡と反対に5層水田跡段差部分より北側には分布せず、調査区南半にのみに広がる。調査区北半は5層直下が8層となっており、耕作域が調査区北半にも及んでいたかは不明であるが、北半の5層中に6層ブロックが認められないことを考慮すれば、非耕作域であった可能性もある。6層水田跡は、耕作土を徐々に掘り下げて行くと、9層が現れる部分と耕作土が残る部分に別れる(第59図赤ライン)。9層と耕作土残存部分の境界ラインは、8層上面と南側の耕作土との境界ラインとほぼ直交方向をとっている。この9層上面の耕作土残存部分は、区画間における耕作深度の差を反映しているものと考えられ、6層水田跡には、2区画の水田が存在したことが想定される。耕作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは上層の撹乱でかなり削平されており、平均で12㎝程である。耕作土の下部には下層ブロックを含み、下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は、8.05~8.25mの間で、水田面の傾斜は、南方向へのややきつい下り傾斜をとる。

〈出土遺物〉土師器が3点、土製品が1点出土した。土師器は全て図化不能な細片で、調整等も不明である。土製品は細い棒状のもので(第60図)、両端を欠損している。土器類の突起の可能性もある。



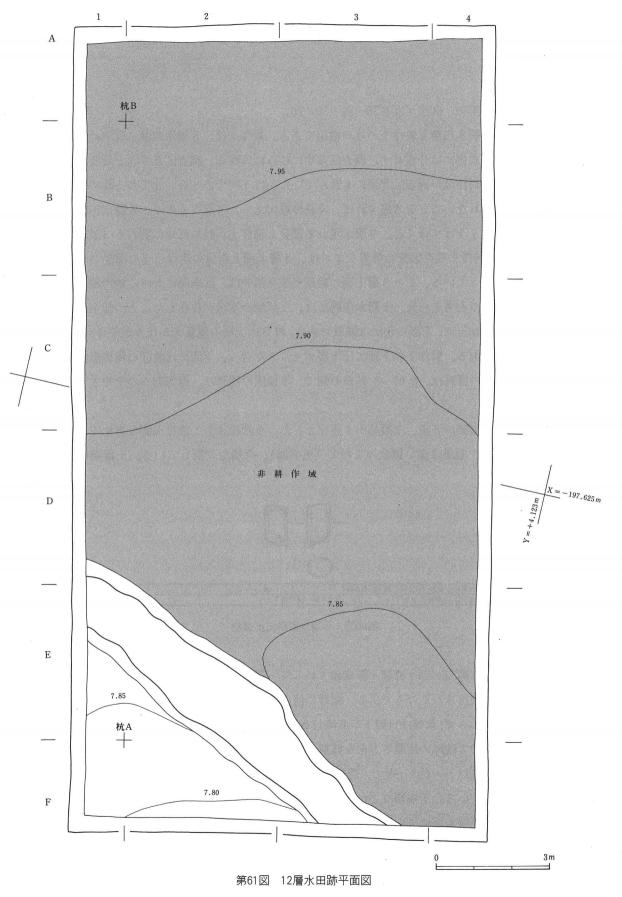
- [挿図番号	図版番号	遺構・層位	種別	長さ(m)	幅 (cn)	厚さ(ca)	備	考
-[第60図	写真70-3	6 層水田跡	土製品	2.3	1.2	0.9	両端欠損・土器突起?	

第60図 6層水田跡出土遺物

(4) 12層上面

12 a 層水田跡 (第52·53·61図 • 写真40·41·51·52)

大畦畔が 1 条検出されたのみである。畦畔の検出面は11層上面である。耕作域は、畦畔の北側には広がっておらず、北側は11層下が直接11 b 層となる非耕作域である。また、この大畦畔は、下層の13層水田跡大畦畔の位置・方向を踏襲したものである。なお、出土遺物は皆無であった。〈畦畔〉畦畔方向は $N-68^\circ-W$ で、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壌-12 a 層- を盛り上げ作られている。下端幅は 2 m前後で、耕作土上面からの高さは、良好な部分で15cmである。畦畔の直下層上面には、擬似畦畔 B が形成されている。なお、畦畔上には水口は検出されなかった。



〈耕作土〉耕作土の土質は泥炭質粘土で、粘土と泥炭質粘土の互層である12 b 層及び13層水田跡耕作土を撹拌し、耕作土-12 a 層-としている。耕作土の分解の度合いは、層中に母材のブロックを多量に含み、余り進んでいない。耕作土の厚さは、下面の起伏が顕著で安定していないが、最大で14cmを測る。耕作土の下面には鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の標高と傾斜〉非耕作域を含めた水田面の標高は、7.75~8.00mの間である。水田面の傾斜は、南東方向へのややきつい下り傾斜をとる。

(5) 13層上面

13層水田跡(第62·63図•写真42~46·51~54·71)

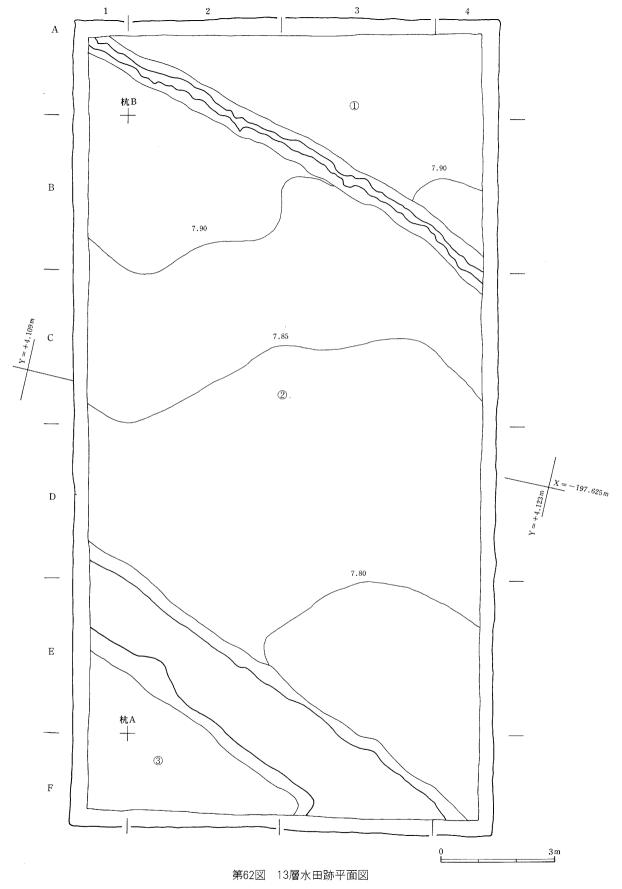
大畦畔 2 条と小畦畔 1 条からなる 3 区画(区画① \sim ③)の水田跡が検出された。検出面は、大畦畔が 12 a 層中、小畦畔が 12 b 下面である。なお、いずれの畦畔上にもには水口は検出されなかった。

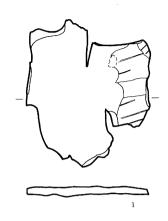
〈畦畔〉大畦畔の方向は、上層12a層水田跡大畦畔と同様の東西方向($N-68^\circ-W$)のものと、これに直交すると考えられる南北方向のものがある。小畦畔の方向は、大畦畔の東西方向のものとほぼ同一方向をとる。東西方向の大畦畔・小畦畔ともほぼ直線的に延びる。大畦畔と小畦畔とも耕作土と同一土壌-13層ーを盛り上げ作られている。大畦畔・小畦畔の下端幅は2.5m前後・70㎝前後で、耕作土上面からの高さは、10㎝前後・ $1\sim 4$ ლである。大畦畔の直下層上面には、擬似畦畔Bが形成されているが、小畦畔には認められない。2条の大畦畔は「T字」状にF-3グリッドで交わっている。この北側の耕作土上面は他に比べ盛り上がっており、南北畦畔が東西畦畔の北側にも延びていた可能性もある。

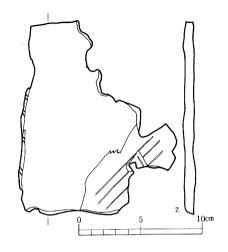
〈耕作土〉耕作土の土質は泥炭質粘土で、粘土と泥炭土の互層である14層を撹拌し、耕作土-13。 層-としている。耕作土の分解の度合いは、層中に母材のブロックを多量に含み、余り進んでいない。耕作土の厚さは、下面の起伏が顕著で安定していないが、最大で15cmを測る。なお、区画③では、12a層水田跡の耕作によって、耕作土が僅かに残存するのみである。耕作土の下面には鉄分の集積層は認められない。

〈水田面の標高と傾斜〉削平されていない区画①・②の水田面の標高は、7.75~7.95mの間である。水田面の傾斜は、南東方向へのややきつい下り傾斜をとる。区画②の耕作土上面の比高差は最大で19cmあり、この比高差では稲の成育は困難で(藤原他:1989)、当区画内に複数の小畦畔が存在したものと考えられる。従って、今回検出された区画は、最終区画段階のものではないと推定される。

〈出土遺物〉東西方向の大畦畔上部より樹皮製品の可能性のある樹皮が出土している。第63図 1・2は、同一のものであるが、接合面が認められない。ともに厚さ2~5 mmの樹皮で破損している。1は樹皮外面、2は樹皮内面の一部に加工痕が認められる。さらに、2は作り出され







挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種別	材質	素材形状	最大長	最大幅	最大厚さ	備考
第63図-1	写真71-4	13層水田跡畦畔上			樹皮	12.1cm	10.1cm	0.7cm	外面の一部に加工痕
- 2	写真71-5	13層水田跡畦畔上			樹皮	15.9ст	12.8cm	0.9cm	側面あり・内面の一部に加工痕

第63図 13層水田跡出土遺物

た側面が一部残っている。

(6) 34層上面

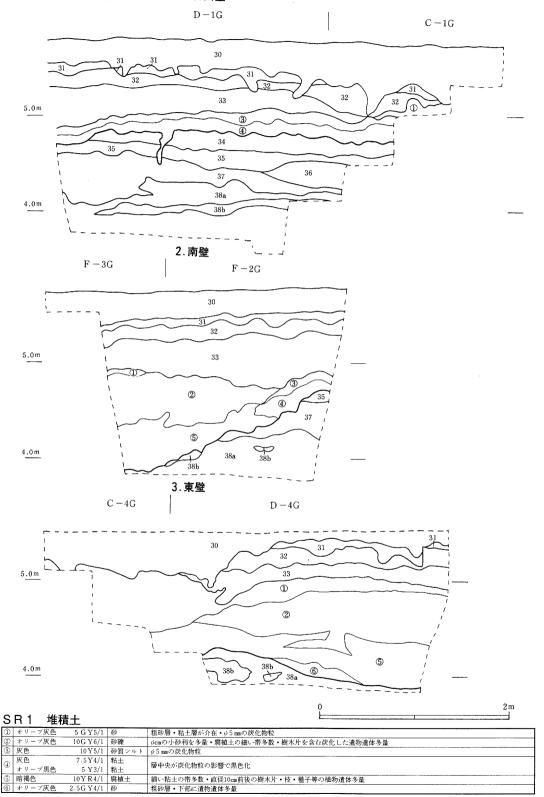
1号河川跡-SR1-(第64図·写真55~57)

34層上面では河川跡が一流路検出された。調査区狭く、平面的な調査が実施できず、断面観察を主とする調査となった。下層調査区西壁セクション(第64図1)の堆積土①層北端部から約1m北側の地点で、河川跡の肩部分が検出されている。流路方向は北西-南東方向と思われる。深さは約1.5mで、上端幅は不明である。堆積土は6層からなり、堆積土②・④・⑤層からは多量の植物遺体が出土している。特に堆積土④層は、植物遺体が詰まった腐植土層で、直径10cmを越える樹木片、枝、種子、昆虫等が多量に出土した。

(7) その他の出土遺物 (第65図・写真70・71)

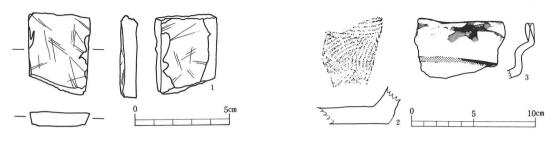
基本層1・2・4・8・層から土師器片・赤焼土器片・須恵器片・土師質土器片・陶器片・磁器片・瓦片・剥片・石製品・銅製品等が出土した。これらの多数は、細片で図化不可能なものである。1層からは35点出土したが、大半は陶器・磁器である。須恵器2点を除けば全て近世以降のものである。2層からは12点出土した。この内8点までが陶器で、その中には鎌倉時代後半頃の在地産の甕、16世紀末頃の唐津産の鉢(第65図3)、江戸時代初期の可能性のある擂鉢(第65図2)、江戸時代末以降の相馬産の椀等がある。銅製品は2点出土しており、この内1点は古銭である。腐食のため識別はできないが、近代以降のものと思われる。4層からは土師器が4点のみ出土した。この内2点は、5層水田跡出土の坏と同一のものである。8層か

1. 西壁



第64図 下層調査区西・南・東壁断面図

らは、剥片と石製品が各1点出土した。石製品(第65図1)は、砥石の一部と考えられる。なお、砥石は8層内攪乱より出土しており、上層からの混入の可能性もある。



挿図番号	図版番号	遺構・層位	種	别	名	称	長さ	mm	幅	mm	厚さ	mm	重さ	g	石	質	備	考
第65図-1	写真70-6	8層落ち込み	石製	铝	砥石	ī ?	38.	5	32		6.5		7.4		細粒湖	聚灰岩	両面に擦痕、上層からの混み	の可能性あり
																	11	

挿図番号	図版番号	遺構・層位	種	别	器種	遺存度	特	徵
第65図-2	写真70-2	2層	陶	器	すり鉢	小破片	外面:鉄釉、産地不明、江戸時代初期?	
- 3	写真70-5	2層	陶	器	鉢	約1/4	外面:鉄絵、長石釉、唐津産、16c末	

第65図 出土遺物

4. 遺構の所属年代とまとめ

- 1. 検出遺構としては、3層・5層・6層・12a層・13層の5期の水田跡とSR1がある。また、水田跡の可能性がある層としては、基本層2・4・7層が上げられる。
- 2. 5期の水田跡の内、5層・6層の各水田跡は耕作土のみの検出である。しかし、両層は富 沢遺跡北部A地区基本層序(佐藤:1992)の4a層・5層に対応し、この基本層序に包括され る第53次調査区等で畦畔が検出されていることより水田跡と認定した。
- 3.12a層水田跡と13層水田跡との関係であるが、12a層水田跡の大畦畔は、13層水田跡の東西大畦畔の位置・方向を踏襲し作られている。しかしながら、南北大畦畔については踏襲せず、耕作域も南側のみで、区画方法・耕作域に変化が認められる。
- 4.13層水田跡では、大畦畔2条と小畦畔1条からなる3区画の水田跡が検出された。これら 区画は、その水田面の比高差より最終区画段階のものではないと推定される。
- 5. 南に隣接する第52調査区では、標高4.2~4.5mの間に位置する基本層30・31層より植物遺体が出土している。当調査区34層検出のSR1の堆積土は標高3.9~5.0mに位置しており、多量の植物遺体を出土している。(中富:1990)。標高及び植物遺体の存在より、第52次調査区基本層30・31層はSR1の堆積土の可能性がある。SR1の所属年代であるが、上層の29層に降下年代が5,500年前と推定されている火山灰(山田・庄子:1988)が含まれることより、これより古い年代が与えられる。
- 6. 検出水田跡の所属年代であるが、出土遺物が皆無、あるいは数量的に乏しいことより、出

第5節 富沢遺跡第83次調査

土遺物からの時代決定は困難であるが、5層中に灰白色火山灰が混じること、富沢遺跡北部A 地区基本層序との層の対応関係が可能であったことより、以下のような所属年代が想定される。

- 3層水田跡-近世
- 5 層水田跡-平安時代(灰白色火山灰降下以降)
- 6 層水田跡-古墳時代以降、平安時代(灰白色火山灰降下以前)以前
- •12 a 層水田跡-弥生時代(桝形囲式期以降、十三塚式期以前)
- 13層水田跡-弥生時代(桝形囲式期)
- 7. 基本層 1 層から17層までは、富沢遺跡北部 A 地区基本層序との対応関係が認められる。その対応関係は以下のとおりである。

• 1層(富沢遺跡北部A地区基本層序 1層) • 2a•b層(同 2層) • 3層(同 3 a層)

4層(同3b層)
 5層(同4a層)
 6層(同5層)
 7層(同8a層)

• 8層 (同 8 b層) • 9層 (同 9 b層) • 10層 (同 10 a 層) • 11層 (同 10 c 層)

• 12 a 層 (同10 d 層) • 12 b 層 (同10 e 層) • 13層 (同11層) • 14層 (同12 a 層)

• 15層(同12 b 層) • 16層(同13層) • 17層(同14層)

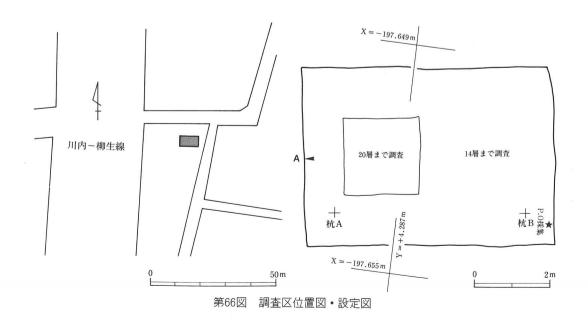
第6節 富沢遺跡第84次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $6.6 \times 4.6 \text{m}$ (30.36 m)である。調査は、盛土及び直下の1 層中(旧水田耕作土)までを重機で排除し、以下は人力で行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。13 層までは調査区全面の精査を実施し、14 層以下は $2 \times 2 \text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭 $\mathbf{A} \cdot \mathbf{B}$ を基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭 $\mathbf{A} : \mathbf{X} = -197,652.37 \text{m}$ $\mathbf{Y} = +4,285.36 \text{m}$ 杭 $\mathbf{B} : \mathbf{X} = -197,652.92 \text{m}$ $\mathbf{Y} = +4,290.33 \text{m}$)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に18層が確認された。各層の土質は基本的に粘土が主体であるが粘性が非常に強い。17層からは泥炭質の粘土である。現代のものを除く水田土壌の可能性のあるのは $4 \cdot 6 \cdot 7 \cdot 8 \cdot 10 \cdot 13$ 層である。 $6 \cdot 7 \cdot 8$ 層で灰白色火山灰を検出している。 $6 \cdot 7$ 層では層中にブロック状に含んでおり下層からの巻き上げと考えられる。8 層では層の上部に粒子状に含んでいる。全体的な層の傾きはほぼ水平である。



3. 検出遺構と出土遺物

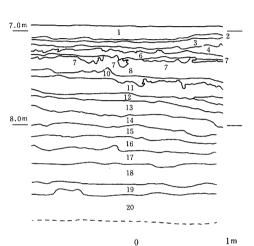
遺構は検出されなかった。遺物は1・3・4・6層中から陶磁器片、土師器等が計20点出土している。いずれも細片であり図示できるものはない。写真72は美濃産の緑釉椀で、時期は17世紀頃のものであろう。

4. 遺構の所属年代とまとめ

遺構・遺物ともに時期を決定できるものはなく、 また、周辺調査区との層位の対応も困難であり、明 確な年代は不明である。ただし、6~8層で灰白色 火山灰を検出していることから以下のような所属年 代の推定が可能である。

7層 平安時代(灰白色火山灰降下以降)~

8層 平安時代(灰白色火山灰降下以前)~



¥ A

±:

第67図 基本層序

層序	色	調	土 質	層厚	酸化鉄	混 入 物	水田土壌	備考
1	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	14	糸根状	マンガン粒・炭化物片	. 0	現代の水田耕作土
2	暗褐色	10 Y R 3/4	粘土	3		マンガン粒		
3	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	10	点状	マンガン粒・炭化物	?	
4	黒褐色	2.5Y3/2	粘土	10	糸根状	5層をブロック状	?	下面著しく凸凹
5	黄褐色	2.5Y5/3	粘土	6				
Э	黒褐色	2.5Y3/1	粘土	0				
6	灰色	5 Y4/1	粘土	8	点状	灰白色火山灰	?	下面凸凹
7	オリーブ黒	5 Y3/1	粘土	- 8		灰白色火山灰(ブロック状)	?	部分的分布
8	にぶい黄褐色	10 Y R 5/4	粘土	20	糸根状	灰白色火山灰(層上部に粉状)・マンガン粒	?	
9	黒褐色	10 Y R 3/1	粘土	10	管状	マンガン粒		
10	黒	10 Y R 2/1	粘土	10	管状	マンガン粒・11層をブロック状	?	下面凸凹
11	黄褐色	10YR5/6	粘土	18	暈管状	マンガン粒多量		——·
12	灰色	7.5Y4/1	粘土	10				·
12	暗オリーブ灰	2.5Y4/1	粘土	10				
13	灰色	5 Y4/1	粘土	16		未分解の植物遺体		
14	オリーブ灰色	5 G Y 5/1	粘土	10	管状	未分解の植物遺体・炭化物片		
14	黒	7.5Y2/1	粘土	10	B 1/\	木ガ 肝やり値が退停・灰 にかり		
15	暗オリーブ灰色	5 G Y 4/1	粘土	12		未分解の植物遺体(茎状)		所々にらすい黒色粘土の帯
16	黒	2.5G Y2/1	粘土	12		未分解の植物遺体・炭化物片		
17	暗オリーブ灰	2.5GY4/1	粘土	15		未分解の植物遺体		
18	灰オリーブ	7.5Y4/2′	粘土	22				黒色泥炭質粘土と互層
19	オリーブ黒	5 Y 3/1	シルト質粘	土 10		植物遺体		Name (Control of Control of Contr
20	黒	10 Y R 1.7/1	泥炭質粘土					

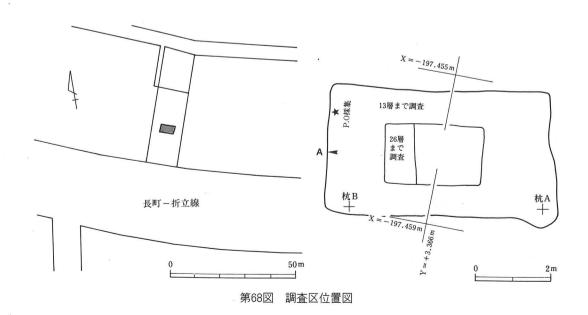
第7節 富沢遺跡第85次調査

1. 調査方法

調査区の設定面積は当初は 6×7 mであったが、南側に後世の撹乱を受けていることが判明したので約 6×3.5 m (21 ㎡) で行った。調査は、盛土及び直下の1 層中(旧水田耕作土)までを重機で排除し、以下は人力で行った。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。13 層までは調査区全面の調査を実施し、14 層以下は 1.5×0.8 mの試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭 $A \cdot B$ を基準にして実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している(杭A : X = -197,455.95 m Y = +3,368.88 m 杭B : X = -197,455.08 m Y = +3,363.96 m)。

2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に26層が確認された。各層の土質は基本的にシルト質粘土が主体であるが、 $5 \cdot 6 \cdot 11 \cdot 15 \cdot 19$ 層は粘土、7 層 $\cdot 10$ 層は細砂になっている。17 層以下はグライ化が顕著である。25 層は腐食粘土層で枝、葉等を含んでいる。現代のものを除く水田土壌の可能性のあるのは、 $3 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 6 \cdot 9$ 層である。4 層は下面の凸凹が著しく、層中に灰白色火山灰を含んでいるが下層からの巻き上げと考えられる。全体的な層の傾きはほぼ水平である。



79

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 3層上面

1号·2号土坑跡-SK1·2-

15.0 m

¥ A

±.

(第70図)

14.0 m

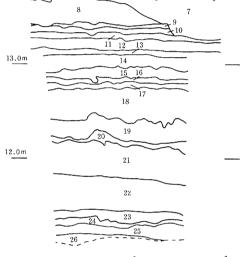
3層上面で検出した。いずれも不整楕円の平面形を呈しており、断面形はすり鉢状である。堆積土は 1層で、遺物は出土しなかった。

(2) その他の出土遺物

2・3・7・8層中から陶器片、磁器片、土師器片、須恵器片等が計10点出土しているが、図示できるものはない。磁器・陶器は2・3層中から7点出土しており、いずれも近世以降である。

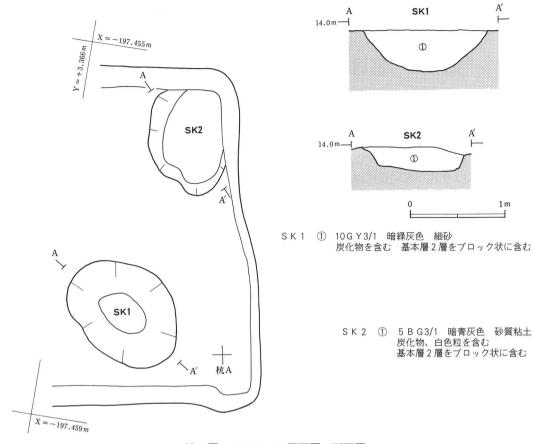
(3) 下層の調査

旧石器時代に相当する層の調査は、1.5×0.8mの 調査区を設けて14層から26層まで実施した。しかし、12.0m 縄文時代の遺物の出土や特徴的な層の確認もできな かったので、どの層から旧石器時代に相当するかは 判断しがたいが、24層から腐食した植物遺体、25層 から枝・葉を検出した。



第69図 基本層序

層序	色	調	土 質	層厚	酸化鉄	混 入 物	水田土壌	備考
1	オリーブ黒	7.5Y3/1	砂質粘土	15		礫		
2	オリーブ黒	5Y2/2	砂質シルト	12		炭化物片・白色粒・もみがら片	0	旧水田耕作
3	灰色	7.5 Y 4/1	砂質シルト	30	糸根状	炭化物片•白色粒		上部帯状の酸化鉄
4	黒	2.5Y2/1	砂質シルト	14	点状	炭化物片・5層をブロック状マンガン粒・白 色粒・灰白色火山灰(粒状)	?	下面に凸凹
5	黒褐色	10 Y R 2/2	粘土	6		THE PROPERTY OF THE PROPERTY O	?	部分的分布
6	褐灰色	10 Y R 4/1	粘土	4		凝灰岩粒・マンガン粒	?	
7	にぶい黄褐色	10 Y R 5/3	細砂	15	量管状·管状	炭化物 (所々)・粘土		所々レンズ状に粘土が堆積
8	オリーブ黒	5 Y 2/2	砂質粘土	20		白色粒		所々らすい帯状の黒色粘土
9	黒	5 Y 2/1	シルト質粘土	8		植物遺体 • 炭化物片		一部らすい縞状
10	オリーブ黒	10 Y 5/2	細砂	10		植物遺体・凝灰岩粒・φ 5~10mmの粘土塊を ブロック状に含む		
11	オリーブ黒	7.5Y4/2	粘土	9		植物遺体・マンガン粒	?	下面わずかに凸凹・細砂を縞状に含む
12	黒	10 Y R 1.7/1	シルト質粘土	9		植物遺体・安山岩の粒		
13	黒褐色	2.5Y3/1	シルト質粘土	3		植物遺体・安山岩の粒		
14	黄灰色	2.5Y4/1	砂質シルト	14		植物遺体・凝灰岩粒(ø大)・もろい緑色の砂質粒		
15	灰色	5Y4/1	粘土	12		腐食植物遺体(多量)・凝灰岩粒・白色粒(多量)		
16	黒褐色	2.5Y3/1	シルト質粘土	4		植物遺体・炭化物片・マンガン粒・もろい緑 色の砂質粒		
17	オリーブ黒	5 Y 3/1	砂質シルト	5		植物遺体(少量)・凝灰岩粒・白色粒・マンガン粒		
18	オリーブ灰	5G Y5/1	砂質シルト	30				下部砂質レンズ状 (ø大) グライ化
19	緑灰色	10 G 5/1	粘土	20		植物遺体		層の下部に45~10mmの明線灰粘土(10 G7/1)をブロック状に含む・グライ化
20	緑灰色	10G Y 5/1	シルト質粘土	6		植物遺体・マンガン粒		グライ化
21	明緑灰色	10G7/1	シルト質粘土	35		植物遺体		グライ化
22	緑灰色	5G5/1	シルト	35		植物遺体・マンガン粒・炭化物片		非常に硬いシルト質粘土と砂質シルト の互層・グライ化
23	緑灰色	10G5/1	砂質シルト	10		植物遺体		黒ンルト質粘土のうすい互層・グライ化
24	青灰色	5 B G 5/1	シルト質粘土	8		腐食した木痕、植物遺体		所々に砂層が分布・グライ化
25	灰オリーブ	7.5Y4/2	粘土	12		樹木・枝・葉		グライ化
26	灰オリーブ	7.5Y5/2	ジルト質粘土			植物遺体		グライ化



第70図 SK1 • 2平面図 • 断面図

4. 所属年代とまとめ

- 1. 検出遺構はSK1・2のみで、性格は不明である。他には層相観察より3・4・5・6・9層は水田土壌の可能性が考えられる。
- 2. 各層の所属年代であるが、出土遺物が少ないことや、周辺の調査区との対応も困難であるので、かなり時間的に幅のある想定しかできないが、以下のとおりである。
 - 2 3層

近世以降

4層

平安時代(灰白色火山灰降下以降)~近世

3. 旧石器時代に相当すると考えられる層のうち、24・25層で植物遺体(枝・葉)が出土している。

第3章 分析

第1節 富沢遺跡 (第78次調査) の花粉分析

守 田 益 宗

1. 分析試料について

富沢遺跡の第78次調査区は旧石器時代の遺物の出土した第30次調査区の北西に位置している。本調査区では、下層部より縄文時代の河川跡が見いだされ、その河川堆積物中からは樹木遺体も見つかっている。本報告は、当時の河川周辺の植生について、花粉分析の立場から検討を加えたものである。

花粉分析用試料は、18層、SD11層、21層よりそれぞれ1試料を採取した。試料の採取 地点とその層位は第22図のとおりである。花粉・胞子の同定および出現率の算出は、これ までの報告と同様にして行なった(守田、1988など)。

2. 結果および考察

検出された花粉・胞子は表 4 に示したように、高木花粉16種類、低木花粉11種類、草本花粉12種類、シダ胞子 3 種類である。

21層とSD11の花粉出現率は、Quercusが最優勢でFagus、Carpinus、Ulmus-Zelkovaがこれに次いで多い。こうした花粉組成は、いわゆる中間温帯と呼ばれる地域の落葉広葉樹林の特徴を示すものである。縄文時代と現在では気候条件が同じとは言えないが、また、植物の分布が全く異なるほど気候条件が違っていたわけでもないので、検出された高木花粉のうち出現率の比較的高いFagus、Quercus、Carpinus-, Ulmus-Zelkova、Aesculusは、現植生と比較してそれぞれ以下の植物から由来したものと判断される。すなわち、Fagusはブナ、イヌブナ、Quercusの大部分はコナラ、ミズナラ、Ulmus-Zelkovaはケヤキとハルニレからのものである。Aesculusはトチノキであり、この樹種は川や谷沿いなど傾斜のゆるい湿気のある肥沃地を好む傾向がある。Carpinusはイワシデを除く全てのシデ類が考えられるが、河道近くであることを考えるとサワシバの花粉を多く含んでいる可能性がある。したがって、当時の植生は、現在の中間温帯域丘陵地下部の小河川や小さな谷沿い付近のようにやや湿性な立地に見られる落葉広葉樹林が存在したと考えることができる。なお、SD11ではThesiumとHaloragisが1粒ではあるが検出されている。これらは日当たりの良い生育密度の低い草地または半裸地に生育する植物であり、前者は半寄生植物で花粉生産量・散布力が極めて小さいと考えられるものである。したがって、当時、遺跡付近

にそのような土地があったことをうかがわせる。

18層ではCarpinusが最優勢であるが、これの花粉塊がかなり認められたことから局所的に生育していたシデの影響と見ることができる。Carpinusを除けば他の樹種の花粉は21・SD11層と同様な組成であることから、ほぼ同様な植生が18層堆積当時も存在していたとみて良いであろう。

引用文献

守田益宗(1988):富沢遺跡(第28次調査)の花粉分析.「富沢遺跡第28次発掘調査報告書」 仙台市教育委員会、97~113.

学 名	和 名	1.8	層	SI	D11	2	1層
, ,	416 71	個数	出現率	個 数	出現率	個 数	出現率
Pinus	マツ属	4	1.3%	7	2.4%	1	0.3%
Abies	モミ属	1	0.3%	· '	2.4/0	1	0.3/0
Cryptomeria	スギ属	2	0.3%	2	0.7%	1	0.3%
Cupressaceae-Taxaceae	ヒノキ科・イチイ科	2	0.7%	1	0.7%	2	0.6%
Pterocarya	サワグルミ属	4	1.3%	2	0.3%	7	1.9%
Juglans	クルミ属	9	2.9%	3			2.5%
Betula	シラカンバ属	5	1.6%	3	1.0%	9 5	1.4%
Carpinus	クマシデ属	113	36.9%	47	16 204	20	5.5%
Fagus	ブナ属	21	6.9%	47 15	16.3%	14	3.9%
Quercus	コナラ亜属		0.9%		5.2%		
		89	29.1%	143	49.7%	215	59.2%
Cyclobalanopsis Castanea	アカガシ亜属	2	0.7%	1	0.3%		1 10/
	クリ属	7	2.3%	7	2.4%	4	1.1%
Ulmus-Zelkova	ニレ属・ケヤキ属	19	6.2%	10	3.5%	28	7.7%
Celtis-Aphananthe	エノキ属・ムクノキ属			2	0.7%	2	0.6%
Acer	カエデ属	8	2.6%	5	1.7%	14	3.9%
Aesculus	トチノキ属	20	6.5%	43	14.9%	41	11.3%
Myrica	ヤマモモ属	-		1	1.5%		
Colylus	ハシバミ属		8.7%	1	7.4%	2	3.2%
Alnus	ハンハミ属	8 10	10.9%	5	10.3%		
Alnaster	ヤシャブシ亜属			7		8	12.9% 6.5%
Theaceae		1	1.1%	1	1.5%	4	
	ツバキ科	16	17.4%			14	22.6%
Fagara	サンショウ属	1	1.1%	1	1.5%	1	1.6%
Rhus	ウルシ属			3	4.4%		
Ilex	モチノキ属		1.1%				
Cornus	ミズキ属	1	1.1%			2	3.2%
Araliaceae	ウコギ科	5	5.4%	3	4.4%		
Fraxinus	トネリコ属	4	4.3%	1	1.5%	10	16.1%
Gramineae	イネ科	12	13.0%	13	19.1%	3	4.8%
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	1.1%	1	1.5%		4.0/8
Liliaceae	コリ科	1	1.1%	1	1.5/0		
Moraceae	クワ科	4	4.3%	3	4.4%		
Thesium	カナビキソウ属	-4	4.3%	1			
Rosaceae	バラ科	1	1 10/	3	1.5%	1	1 00/
Haloragis	アリノトウグサ属	1	1.1%	1	4.4% 1.5%	1	1.6%
Umbelliferae	セリ科	1	1 10/		1.5%	1	1 00/
Labiatae	シソ科	. 1	1.1%		1 -0/	1	1.6%
				1	1.5%		
Plantago	オオバコ属		0.00	1	1.5%		17 704
Artemisia	ヨモギ属	3	3.3%	6	8.8%	11	17.7%
other Compositae	他のキク科	-		2	2.9%		
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	19	20.7%	13	19.1%	5	8.1%
3-lete type FS	三条溝型シダ胞子	19	1.1%	13	13.1/0	J	0.1/0
Osmundaceae	ゼンマイ科	1	1.1%	1	1.5%		
Osmunuaceae	C - 1 AT	1	1.1%	1 .	1.5%		
Trees	高木花粉	306	69.9%	288	71.5%	363	78.7%
Shrubs	低木花粉	47	10.7%	22	5.5%	41	8.9%
Herbs	草本花粉	24	5.5%	32	7.9%	16	3.5%
Ferns	シダ胞子	21	4.8%	14	3.5%	5	1.1%
Unknown	不明	40	9.1%	47	11.7%	36	7.8%
CHRIIOWII	עקיי ויי	40	9.1/0	47	11.1/0	30	1.0/0

第5表 花粉•胞子出現表

第2節 富沢遺跡第78次調查放射性炭素年代測定

古環境研究所

富沢遺跡(第78次調査)から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数 (B.P.) である。

年代値の算出には14Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA)に相当する年代である。また、試料の σ 線計数率と自然計数率の差が σ 2 は、 σ 3 なに相当する年代を下限の年代値 (B.P.) として表示してある。また、試料の σ 8線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARDCARBON)についての計数率との差が σ 2 は、Modernと表示し、 σ 14 C%を付記してある。

富沢遺跡(第78次調査)出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料No. 出土地点	種類	年代値	コードNo.
縄文時代の河川堆積土中	樹木	4540±100 (B.C.2590)	Gak-16238

第3節 富沢遺跡第78次・80次~85次調査プラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

富沢遺跡第78次、80次、81次、82次、83次、84次、85次調査では、発掘調査において水田層 および水田層と見られる土層が各々で検出されていた。この調査は、プラント・オパール分析 を用いて、各調査について稲作跡の検証と探査を行ったものである。

2. 試料

試料は、遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。なお、採取にあたっては容量50㎡の採土管が用いられた。図1に、土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原,1976)」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾 (105℃・24時間), 仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量,ガラスビーズ添加(直径約40μm,約0.02g)※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20µm以下)除去,乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散,プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重,単位: 10^{-5} g)をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、0.48である(杉山・藤原,1987)。

4. 分析結果

プラントオパール分析の結果を表1および図2、図3に示す。なお、稲作跡の探査が主目的 であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族、キビ族の主要な5分 類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、仙台市内の遺跡では、これまでの調査の結果、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準となる値を3,000個/gとした。なお、当該層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考え難くなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。この判断基準にもとづいて、稲作の可能性を3段階に区分して表2に示した。

(1) 第78次調査

本地点では、5層、6層、7層、8 a 層、13層、14層、15-1層、16層、18層から採取された試料について分析を行った。その結果、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、5層、14層、15-1層ではプラント・オパール密度が3,500~6,500個/gと高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

(2) 第80次調査

本地点では、 $3 \, a$ 層、 $3 \, b$ 層、 $4 \, B$ 、 $8 \, b$ 層、 $9 \, a - 1$ 層、 $9 \, a - 2$ 層、 $9 \, a - 3$ 層、 $9 \, b$ -1 層、 $9 \, b - 2$ 層、10 層から採取された試料について分析を行った。その結果、 $3 \, a$ 層、 $3 \, b$ 層、 $8 \, b$ 層、 $9 \, a - 1$ 層、 $9 \, a - 2$ 層、 $9 \, a - 3$ 層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、 $9 \, a - 1$ 層では密度が3,000 個/g 、 $9 \, a - 2$ 層では密度が8,000 個/g とそれぞれ高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(3) 第81次調査

No.1 地点では、7層、8層、9層、10層、11層、12層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、7層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、9層、10層、11層では密度が $3,200\sim4,500$ 個/gと高い値であり、ピークが認められた。したがって、これらの

層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

No. 2 地点では、7層、8層、9層、10層、11層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、7層、9層、10層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、9層では密度は2,900個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(4) 第82次調査

本地点では、1層、2層、3層、4層、5層、6層、7層、8層、9層、10層から採取された試料について分析を行った。その結果、6層と8層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、1層~3層で検出されたプラント・オパールは比較的最近の水田耕作によるものと考えられる。4層と9層では密度が5,000個/g以上と高い値であり、それぞれ明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(5) 第83次調査

No.1 地点では、8層、9層、10層、11層、12 b層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、8層、9層、13層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。

No.2 地点では、6層、7層、8層、9層、10層、11層、12 a層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、10層と11層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、6層と7層では密度が4,400個/g、5,000個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(6) 第84次調査

本地点では、3層、4層、5層、6層、7層、8層、9層、10層、11層、13層から採取された試料について分析を行った。その結果、5層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、3層では密度が12,400個/gと非常に高い値であることから、同層で稲作が行われていた可能性が極めて高いと考えられる。4層、6層、7層、8層、10層では、密度が3,000~7,600個/gと高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(7) 第85次調査

本地点では、2層、3層、4層、5層、6層、8層、9層、10層、11層から採取された試料

について分析を行った。その結果、 $2 \, \mathbb{R} \sim 6 \, \mathbb{R} \, \mathbb{E} \, 9 \, \mathbb{R}$ においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、 $2 \, \mathbb{R} \, \mathbb{E}

6. まとめ

富沢遺跡の第78次、80次、81次、82次、83次、84次、85次調査についてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の検証および探査を試みた。その結果、水田遺構が検出された第80次調査の9 a-1 層、第81次調査の11層、第83次調査の13層では、イネのプラント・オパールが多量に検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、水田の可能性が考えられていた層では、第80次調査の9 a-2 層と第85次調査の11層を除くすべての層で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、水田の可能性は考えられていなかったものの、78次調査の14層、81次調査の9層と10層、84次調査の3層と8層、85次調査の9層で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。なお、第80次調査の9a-3 層、第83次調査の8層および第84次調査の11層については、密度が600~800個/gと低い値である。プラント・オパール密度が低い原因としては、①稲作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③上層もしくは近辺の水田からの混入によるものであること、などが考えられるが、ここでの原因は不明である。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志(1987) 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析.赤山一古環境編一. 川口市遺跡調査会報告, 10:281-298.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9:15-29.
- 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡 (夜臼式) 水田 および群馬・日高遺跡 (弥生時代) 水田におけるイネ (O. sativa L.) 生産総量の推定 . 考古学と自然科学, 12:29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オパール 分析による水田址の探査ー、考古学と自然科学,17:73-85.

78次調査

試料名	深さ cm	層厚	仮比重	イ ネ 個/g	(籾総量) t /10 a	ョ シ 属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キ ビ 族 個/g
5	17	12	1.13	6,300	8.78	3,900	15, 900	2,300	0
6	29	5	1.07	1.700	0.93	7,100	26,600	1,700	0
7	34	4	1.23	2,400	1.19	1,600	10,700	800	0
8	38	6	1.26	2,200	1.67	2,200	23,700	0	0
13	44	6	1.33	1,700	1.36	1,700	18,400	0	0
14	50	5	1.19	6,500	3.97	5,800	22,500	3,600	700
15-1	55	10	1.12	2,900	3.30	10,600	19,300	900	0
15-2	65	10	1.06	3,500	3.81	4,400	28,500	800	0
16	75	7	1.07	1,600	1.23	10,900	16,000	800	0
18	82	35	1.01	800	2.88	2,400	19,800	800	0

80次調査

試料名	深さ cm	層厚	仮比重	イ ネ 個/g	(籾総量) t /10 a	ョ シ 属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キ ビ 族 個/g
3 a	18	5	0.50	2,400	0.62	6,600	800	0	0
3 b	23	7	0.62	1,400	0.58	4,200	8,500	700	0
4	30	26	0.56	0	0.00	3,600	9,900	0	0
8 b	56	4	0.21	800	0.04	4,300	2,600	0	0
9 a −1	60	7	0.55	3,000	1.15	2,300	4,600	0	0
9 a −2	67	3	0.50	8,000	1.21	7, 100	6,200	800	0
9 a -3	67	5	0.58	600	0.15	2,000	6,800	0	0
9 b −1	69	3	0.45	0	0.00	2, 200	3,700	0	0
9 b 2	72	3	0.61	0	0.00	2,300	5,400	0	0
10	7 5	10	0.49	0	0.00	14,900	3, 100	700	0

81次調査Na. 1

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ ネ 個/g	(籾総量) t /10 a	ョ シ 属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キ ビ 族 個/g
7	29	15	0.42	0	0.00	3,600	6,500	0	0
8	44	4	0.41	700	0.08	4,500	6,800	0	0
9	48	14	0.13	3,500	0.58	4,200	4,200	0	1,400
10	62	4	0.34	4,500	0.62	6,800	1,500	700	0
11	66	2	0.30	3, 200	0.19	11,300	3,200	0	0
12	68	4	0.23	700	0.04	11,400	3,500	0	0
13	72	13	0.20	1,400	0.27	37, 200	2,900	0	0

81次調査№ 2

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ ネ 個/g	(籾総量) t ∕10 a	ョ シ 属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キ ビ 族 個/g
7	32	13	0.29	800	0.27	11,200	2,500	0	0
8	45	4	0.40	0	0.00	800	2,400	0	0
9	49	15	0.18	2,900	0.77	11,600	5,000	700	0
10	64	5	0.36	1,600	0.26	8,300	5,800	0	0
11	69	6	0.28	0	0.00	8,200	800	0	0
13	75	7	0.22	0	0.00	7,400	2,000	0	0

第6表 プラント・オパール分析結果(1)

82次調査

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ョシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
2000	СШ	cm		個/g	t / 10 a	個/g	個/g	個/g	個/g
1	0	6	0.72	30,700	13.66	1,900	21,800	900	0
2	6	4	0.73	8,400	2.51	3, 300	16,900	1,600	0
3	10	9	0.88	4, 200	3.34	1,000	20,300	1,000	0
4	19	23	0.69	6, 200	9.95	1,500	20,200	0	0
5	42	5	0.52	1,400	0.36	5, 100	8, 100	0	0
6	47	5	0.34	0	0.00	11,200	4,500	2,200	1,500
7	52	6	0.60	1,500	0.56	2,300	9,500	0	0
8	58	7	0.61	0	0.00	7,600	3, 200	0	0
9	65	12	0.45	5,000	2.72	16,600	4,100	0	0
10	77	18	0.58	1,600	1.67	800	12,200	0	0

83次調査№ 1

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ョシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
	СШ	СШ		個/g	t / 10 a	個/g	個/g	個/g	個/g
8	29	9	0.90	700	0.56	7,900	700	0	0
9	38	7	0.79	1,500	0.79	3,000	11,300	0	0
10	45	7	0.37	0	0.00	20,800	1,700	1,700	0
11	52	7	0.66	0	0.00	0	6,700	0	0
12 b	59	6	0.72	0	0.00	3,300	12,600	0	0
13	65	5	0.40	2,200	0.41	8,300	8,300	1,500	0

83次調査Na. 2

試料名	深さ	層厚	仮比重	イ ネ 個/g	(籾総量) t ∕10 a	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
2	сш	СШ						個/ g	個/ g
6	39	3	0.90	5,000	1.36	3,600	7,900	700	0
7	42	7	0.87	4,400	2.74	1,400	8, 100	0	0
8	49	4	1.83	800	0.58	2,600	5, 200	0	0
9	53	7	0.89	1,600	1.01	800	16,000	0	0
10	60	7	0.73	0	0.00	7,900	12, 300	800	0
11	67	6	0.77	0	0.00	1,500	5, 200	0	0
12 a	73	4	0.68	2,100	0.58	700	5,700	0	0
13	77	4	0.36	2,900	0.41	2,900	8,100	0	0

84次調査

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ョシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
	cm	СШ		個/g	t / 10 a	個/g	個/g	個/g	個/g
3	14	6	1.00	12,400	7.66	0	15,000	0	0
4	20	5	0.85	6,800	2.94	2,500	17, 200	0	0
5	25	4	0.80	0	0.00	1,700	6,200	0	0
6	29	7	0.85	3,800	2.31	3,800	11,500	700	0
7	36	5	0.90	3,700	1.70	3,700	10,400	0	0
8	41	10	0.92	3,000	2.78	700	12, 300	0	0
9	51	12	0.94	2,800	3.21	0	9, 900	0	0
10	63	11	0.91	7,600	7.82	3,300	13,500	0	0
11	74	20	0.96	800	1.44	0	13,400	0	0
13	94	10	0.87	2,500	2.16	4,200	10, 200	0	0

85次調査

試料名	深さ	層厚	仮比重	イネ	(籾総量)	ョシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
	сш	СШ		個/ g	t /10 a	個/g	個/g	個/g	個/g
2	13	6	1.20	6,100	4.51	2,600	13,900	0	0
3-1	19	8	1.23	3,400	3.38	0	18.200	800	0
3-2	27	7	1.18	1,600	1.30	0	17,900	800	0
4	34	11	1.29	4,500	6.57	1,500	15,300	0	0
5	45	7	1.20	2,400	2.02	4,000	14,400	800	0
6	52	15	1.21	5,000	9.27	700	20, 100	0	0
8	67	15	1.11	0	0.00	0	17,400	800	0
9	82	8	1.19	5,200	5.03	0	16,600	800	0
10	90	4	0.89	0	0.00	800	29,000	0	0
11	94	10	0.87	0	0.00	7, 200	16, 100	1,600	0

第7表 プラント・オパール分析結果(2)

〈記号説明〉

○印…3,000個/g以上(稲作の可能性大)

△印…3,000個/ g 未満 (稲作の可能性有)

×印…検出されず

78次調杏

70次则且		
層名	可能性	備考
5	0	水田?
6	\triangle	
7	\triangle	
8	Δ	水田?
13	\triangle	
14	\bigcirc	
15 - 1	\triangle	水田?
15 - 2	\circ	
16	\triangle	水田?
18	\wedge	

80次調査

UV人們且		
層名	可能性	備考
3 a	Δ	水田?
3 b	\triangle	水田?
4	×	
8 b	\triangle	
9 a - 1	\circ	水田
9 a - 2	\circ	水田?
9 a - 3	\triangle	水田?
$9 \ b - 1$	×	水田?
$9 \ b - 2$	×	
10	×	

01 /p 調本 No 1

81次調查Nu I						
層	名	可能性	備考			
7		×				
8		\triangle				
9		\circ				
10		\circ				
11		\circ	水田			
12		\triangle				
13		\triangle				

81次調査№ 2

層名	可能性	備考
7	Δ	
8	×	
9	\triangle	
10	\triangle	
11	×	水田
13	×	

82次調査

層名	可能性	備考
1	0	旧水田
2	\circ	
3	0	* 水田?
4	\circ	水田?
5	\triangle	
6	×	
7	\triangle	水田?
8	×	
9	\circ	水田?
10	\triangle	

93次調本Nn 1

03次調宜№1							
層名	可能性	備考					
8	Δ						
9	\triangle						
10	×						
11	×						
12 b	×						
13	\triangle	水田					

83次調查Na. 2

可能性	備考
0	水田
\circ	水田?
Δ	
\triangle	
×	
×	
\triangle	水田
\triangle	
	О О Д Х ×

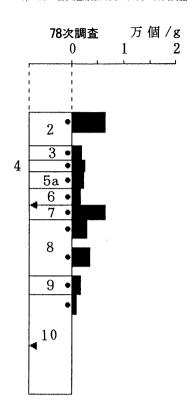
84次調査

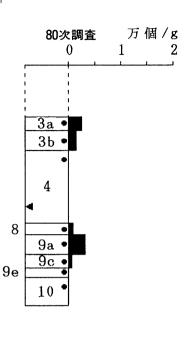
層 名	可能性	備考
3	0	
4	\circ	水田?
5	×	
6	\circ	水田?
7	\circ	水田?
8	\circ	
9	\triangle	
10	\circ	水田?
11	\triangle	
13	\wedge	水田?

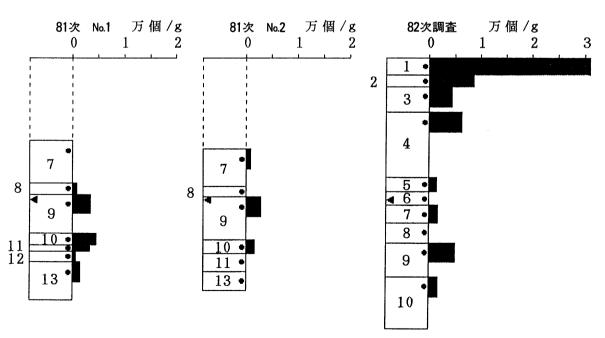
85次調本

04次调宜			00次测值		
層 名	可能性	備考	層名	可能性	備考
3	0		2	0	水田?
4	\circ	水田?	3 - 1	\circ	水田?
5	×		3 - 2	\triangle	
6	\circ	水田?	4	\circ	水田?
7	\circ	水田?	5	\triangle	水田?
8	\circ		6	\circ	水田?
9	\triangle		8	×	
10	\circ	水田?	9	\circ	
11	\triangle		10	×	
13	\triangle	水田?	11	×	水田?

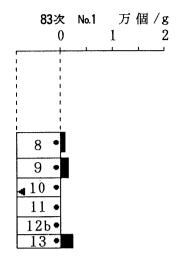
第8表 各層におけるイネのプラント・オパール密度と稲作の可能性

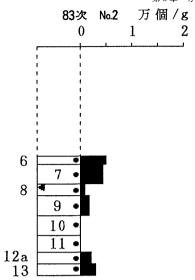


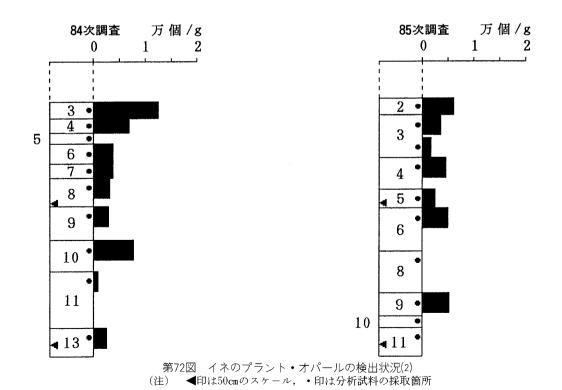




第71図 イネのプラント・オパールの検出状況(1) (注) **◀**印は50cmのスケール, ・印は分析試料の採取箇所







第4章 まとめ

今年度は、富沢遺跡で7箇所で調査が行われている(78次調査は継年の調査である。)。それ ぞれの調査成果については第3章までに述べてきているが、ここではこれらの調査成果とこれ までの調査との関連性などについて述べることとする。

1. 旧石器時代

・旧石器時代に相当する層の調査は、第82次・85次調査で行われている。しかし、樹木や葉などの自然遺物が検出されているだけで(第85次調査)、遺構や人工遺物が検出されたわけではない。また、これらの層の年代は周辺の調査との対応関係からの想定であるので、後期旧石器時代に相当する層の可能性があるとだけ指摘しておきたい。

2. 縄文時代

- ・第78次調査で縄文時代の河川跡(SR1)が1条検出されている。出土した樹木から放射性 炭素による年代測定が行われ、4540±100(B.P.)との年代が示されており、縄文時代後期頃 の河川であると考えられる。
- ・第82次調査では、14層、15a層から磨石が出土している。これらは泥炭質粘土層からの出土で、隣接する第30次調査13・14・15層との対応が想定されている。

3. 弥生時代

・第80次調査、第81次調査、第83次調査で水田跡が検出されている。これらは、富沢遺跡北部 A地区(佐藤:1992)に位置し調査件数の多い地区であり、各水田跡からは時代を決定遺物は 出土していないが、これまでの調査成果からそれぞれの所属年代は次のように考えることができる。特に、第80次調査で検出された小区画水田は、この時期の特徴的な水田形態のひとつといえよう。

桝形囲式期

第81次調查11層水田跡 • 第83次調查13層水田跡

桝形囲式期~十三塚式期

第80次調查 9 層水田跡 • 第83次調查12 a 層水田跡

4. 古墳時代

・第78次調査では、明確な遺構は検出されなかったがTK216前後の須恵器甕が出土している。 富沢遺跡では最も古い時期の須恵器であり、周辺の裏町古墳、大野田古墳群との関連が考えら れている。

- ・第81次・83次調査では、古墳時代から平安時代(灰白色火山灰降下以前)と幅があるが水田跡が検出されている。
- ・第82次調査では、遺物の出土はみられなかったが第30次調査との関連から古墳時代と考えられる溝が検出されている。

5. 平安時代

・第81次・83次調査で平安時代(灰白色火山灰降下以降)の水田跡が検出されている。

6. 中•近世

- ・第78次調査では、5層上面で溝跡7条・土坑2基・河川跡1条が検出されている。これらの 内溝跡は並行するものが多く水田に伴う水路の可能性が指摘されている。時期は遺物が少ない ので幅を持ったものである。
- ・第81次調査では、近世頃と考えられる水田跡が検出されている。しかし、これは耕作土のみの検出であるが、富沢遺跡北部A地区基本層序との対応から水田跡と認定されている。
- ・第83次調査では近世に想定される水田跡が検出されている。

遺構・層位 土	語	赤熊土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素 性 井 哭	歷	器	极器	瓦	土	品	器	日終品	金属製品	杭	垂	+	その街
2層	-				H K						-						T	
4層	1																	
5層			9				1											
	3		8				-	-	1									
7層	က							Management and American										
置 6	13		25															
10層	-		-															
12層	77		12							1			-					
16層															-			1
18層	-																	
19層	17																	
20層	14		2															
21層	2																	
22層													1					2
24層	-																	
SD1	_												1					
SD2	-																	
S D 3	-		2				5	2	2									4
S D 4																		-
SD7	2																	
SD8	55		œ															
S D10	3																	
S D11	1																	
S D18													-					
S D22	-				AND the cities of the cities o													
S D23	-																	
S D 28			1															
SK3			1															
S K 7	2																	
S K12	_						-											
SR2	10		4				7					2						
1層	5		11				9	33				2	5	2				
110	218		100			ľ							TAN DESCRIPTION OF THE PARTY OF	TOTAL PROPERTY AND AND ADDRESS OF THE PERSON NAMED IN COLUMN TWO IS NOT THE PERSON NAMED IN THE PERSON				

富沢遺跡第	第80次調査	出土遺	物集計表														
遺構・層位	干部器	赤焼土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の素 焼土器	图 器	發音	器	Ā	土製品	日 器	h 蒙	品 金属製品	杭	種 子	. 4	有
2層						2		1	1				1				
3層	3		1			က		5					4			I	
8層																4	
S D 4	1					-		1							2		
10	,					,			,						•	1	

富沢遺跡第81次調査出土遺物集計表

石製品

報

報級

恵器陶

無

層位•遺構

1 層 4 層 14層 15 a 層 計

富沢遺跡第82次調査出土遺物集計表

杭					1			1
器	,					1		1
盤 数	1						1	2
器と関	2							2
土師質土器	1							1
須恵器		1	1	4				9
赤焼土器			1					Г
土 師 器 (調整不明)	1			1				2
層位・遺構	1層	2層	3層水田跡	4層水田跡	8 國	33層	S K 1	100
	・遺構 (調整不明) 赤焼土器 須 恵 器 上節質土器 陶 器 磁 器 石 器	・遺構 土 師 器 赤焼土器 須 恵 器 土節質 器 石 器 石 器 層 1 2 1	・遺構 土 師 器 赤焼土器 須 恵 器 土 師 器 本焼土器 須 恵 器 石 器 層 1 2 1	遺構 土 師 器 赤焼土器 須 惠 品質土器 油質土器 油質土器 油質工器 土 節 器 石 器 層 1 1 2 1 二 屋 1 1 1 二 KHBM 1 1 1 1	遺構 土 節 器 赤焼土器 須 恵 器 土節 器 本焼土器 須 恵 器 器 番 石 器 層 1 1 2 1 . R 日本 1 1 . . K 日本 1 1 . . K 日本 1 4 . .	遺構 土 節 器 赤焼土器 須 恵 報 土筋質土器 胸 器 磁 器 石 器 層 1 1 2 1 層 1 1 1 KHDM 1 1 4 RB 4 4	連構 土 節 器 赤焼土器 須 息 土 節 器 土 節 器 土 節 器 土 節 器 工 日	連構 土 師 器 赤焼土器 須 恵田 土節買品 土節買品 土節買品 土節 2 1 器 KH助 1 1 1 1 1 KH助 1 4 4 1 1 B 3 4 1 1 1 B 4 1 1 1 1 C 1 4 1 1 1

富沢遺跡第83次調査出土遺物集計表

4	J.			3						3
中	K								1	-
	その他		-							1
	古銭		-							-
- T	H K							-		-
HH HH	fith			2		2		1		Ľ
<u> </u>	Ħ	1					1			6
þ	Z.	3								c
		9								ď
5	2000年	19	œ	-						86
WE INC. HA.	A. 冥声的 部	1								-
	一	33								c
100		2		7		2				-
1	水光 上部			-						-
l k	世紀 中 五 年 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日			-						6
師 器	調整不明			7		1	က			19
年 事	пуп		1	10	က	6				93
年, 4	眉心。週伸	1層	2 國	3層水田跡	4層	5層水田跡	6層水田跡	8層	12層水田跡	1111

富沢遺跡第85次調査出土遺物集計表

嶽			1				-
器						1	-
五							
器	3	-		1			ĸ
滾							
器	_	3	1				2
歷							
點							
刪			-		-		6
蕉							
矊							
믎					-		-
#							
層位•遺構	四	2 國	3層	7 國	8層	S K 1	100

獭		œ			œ
器器	4	1			Ľ
器」	4				4
上節器(?)		1			
器ӈ干		2	I	<i>L</i>	01
層位•遺構	1層	3層	4層	6層	1

富沢遺跡第84次調査出土遺物集計表

一引用文献一

荒井 格 1984 「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集 仙台市教育委員会

大阪府教育委員会 『陶邑』Ⅰ~Ⅲ

太田昭夫他 1991 『富沢遺跡第30次発掘調査報告書-第1分冊縄文時代~近世-』仙台市文化財調査報告書第149集 仙台市教育委員会

金森安孝 1984 「富沢水田遺跡」『年報5』仙台市文化財調査報告書第66集 仙台市教育委員会

金森安孝 1984 「富沢水田遺跡・下ノ内浦地区」『仙台平野の遺跡群皿』仙台市文化財報告書第65集 仙台市教育委員会

金森安孝他 1987 『富沢遺跡-東北地方建設局長町宿舎建設工事に伴う発掘調査報告書ー』 仙台市文化財調査報告書第104集 仙台市教育委員会

工藤哲司他 1984 『富沢水田遺跡-病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書-』仙台市文化財報告書第67集 仙台市教育委員会

工藤哲司·太田昭夫 1988 『富沢遺跡-24次調査 富沢中学校地区発掘調査報告書-』仙台市文化財報告書第113集 仙台市教育委員会

経済企画庁 1967 『地形・表層地質・土じょう 仙台』

斎野裕彦•荒井 格 1983 「鳥居原遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財報告書第56集 仙台市教育委員会

斎野裕彦 1984 「富沢水田遺跡・鳥居原地区」『仙台平野の遺跡群Ⅲ』仙台市文化財報告書第65集 仙台市教育委員会

斎野裕彦 1985 「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 Ⅳ』仙台市文化財報告書第82集 仙台市教育委員会

斎野裕彦他 1987 『富沢-富沢遺跡第15次発掘調査報告書-』仙台市文化財報告書第98集 仙台市教育委員会

佐藤甲二 1987 『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第114集 仙台市教育委員会

佐藤甲二 1989 『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集 仙台市教育委員会

佐藤甲二 1990 『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』仙台市文化財調査報告書第135集 仙台市教育委員会

佐藤甲二 1991 「第4章第2節1. 富沢遺跡北部A地区」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』 仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会

佐藤 隆 1983 「泉崎浦遺跡」『年報 4』 仙台市文化財報告書第57集 仙台市教育委員会

佐藤 洋 1988 『富沢遺跡-第34次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第118集 仙台市教育委員会

佐藤 洋 1991 『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書第152集

主浜光朗 1988 『富沢遺跡-第33次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第117集 仙台市教育委員会

主浜光朗 1988 『泉崎浦遺跡-発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第119集 仙台市教育委員会

白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要\[』宮城県多賀城調査研究所

仙台農耕文化勉強会 1990 「水田跡の基本的理解ー仙台市における水田跡の検出と認定ー」

『第3回東日本の水田跡を考える会-資料集-』東日本の水田跡を考える会

田中則和 1985 「富沢水田遺跡」『仙台平野の遺跡群Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第75集 仙台市教育委員会

中富 洋 1990「第2章第3節 富沢遺跡第52次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)』

仙台市文化財調査報告書第135集 仙台市教育委員会 『須恵器』 柏書房

平間亮輔 1989 『富沢遺跡第35次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集

中村 浩

藤原宏志・佐々木 章・俣野敏子 1989 「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』 第21号 日本文化財科学会

松本清一 1987 「富沢遺跡」『仙台平野の遺跡群 W』 仙台市文化財調査報告書第97集 仙台市教育委員会

雄山閣 1992 『土師器と須恵器』 古墳時代の研究 6

雄山閣 1993 『須恵器の編年とその年代』 季刊考古学第42号

吉岡·篠原 1989 『富沢遺跡·泉崎浦遺跡-仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書 I』仙台市文化財報告書第126集

発掘調査参加者

相 原 友 子 青 Ш 子 赤井沢 サダ子 赤井沢 千代子 ВII 部 洋 子 諒 小 野 辰 夫 砂 金 男 泉 美恵子 橋 栄 子 板 橋 静 Ί. 正 板 敏 江 子 伊 井 レイ子 植 野 板 橋 スエノ 橋 孝 藤 房 江. 板 植 野 美登子 大 槻 明 美 友 鶴 雄 大 由紀子 T. 藤 ゑなよ 大 Ш 佐々木 洋 介 黒 沢 幸子 小 林 テ ル 桜 井 芳 子 西 条 裕 子 なつ子 佐 竹 佐 竹 さく子 佐 藤 ちよし 佐 野 弘 島 崎 カツヨ 菅 井 君 子 菅 谷 裕 子 菅 原 弘 庄 子 かつえ 鉛 木 かつ子 高 橋 勝 恵 高 橋 美 香 富 田 是 永 沢 幸枝 永 \mathbb{H} 英明 綾 子 沼 英 子 蓮 沼 秀 子 畠 中 真知子 永 野 泰 沿 沼 \mathbb{H} 蓮 早 Ш 裕 子 樋 より子 野 きみ子 松 野 順 子 松 本 和美 H 子 嶋 子 やす子 水 野 信 宮 都 みほ子 沢 Ш 田 森 Ш 田 渡 辺 渡 辺幸 子 渡 洋 子 渡 部 麗 子 棤 Ш 美智子 イチ子 辺

写 真 図 版

	·			

富沢遺跡第78次調査 写真 1 I 区北壁断面



写真 2 **Ⅲ**区東壁断面



写真 3 Ⅲ区南壁断面



写真 4 I 区 S D 8 土師器出土状況



写真 5 I区 SD11・13 完掘状況(東から)



写真 6 II 区 S D 3 木製品出土状況

写真 7 **I**区 SD4・18 完掘状況(北から)



写真 8 I 区 S R 1 樹木出土状況



写真 9 S R 1 断面 (南から)





写真10 Ⅲ区 SD26 検出状況(西から)



写真11 Ⅲ区 SD26、SK12 完掘状況 (南から)



写真12 Ⅲ区 S D 28 検出状況(西から)

富沢遺跡第80次調査 写真13 西壁断面

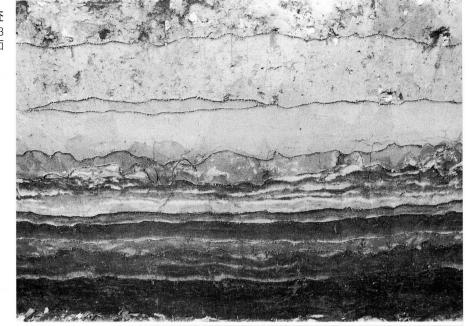


写真14 東壁断面(2段目)



写真15 SD2・4 完掘状況(南から)



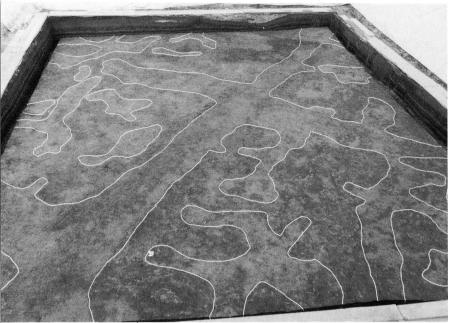


写真16 9層水田跡検出状況 (東から)



写真17 9 層水田跡検出状況 (西から)



写真18 9層水田跡擬似畦畔 B 検出状況(西から)

富沢遺跡第81次調査 写真19 4層水田跡擬似畦畔 B 検出状況(南から)

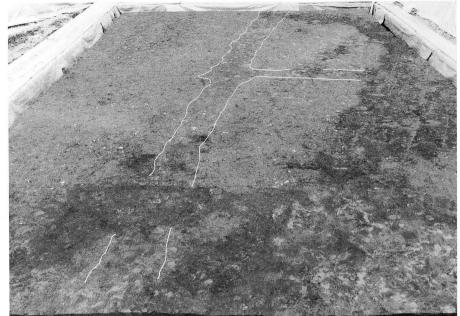


写真20 S K 1 完掘状況 (南西から)



写真21 S D 1 完掘状況 (西から)



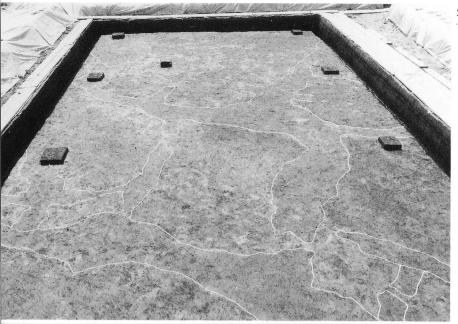


写真22 11層水田跡検出状況 (北から)



写真23 11層水田跡完掘状況 (北から)



写真24 14層上面樹木片集中状況 (南西から)

写真25 4層水田跡 擬似畦畔B断面 (北壁A-2グリッド)

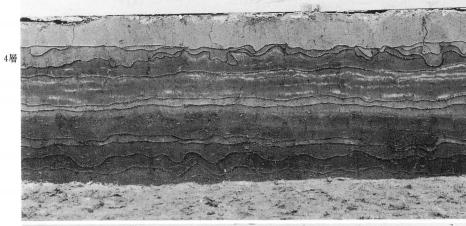
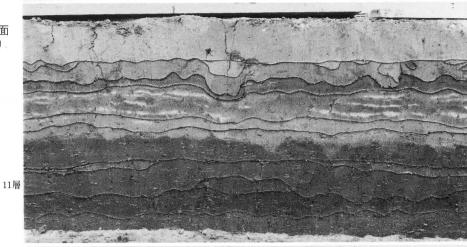


写真26 11層水田跡畦畔(畦畔 1)断面 (北壁A-1グリッド)

(西壁B • C - 1 グリッド)

写真27



11層水田跡畦畔(畦畔2)断面

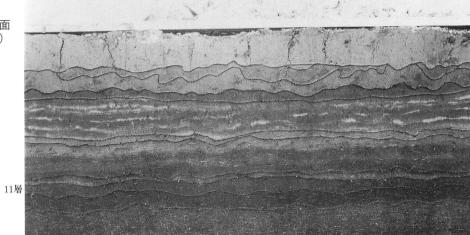


写真28 11層水田跡畦畔断面 (西壁A-1グリッド)

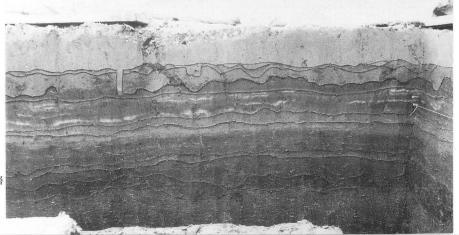


写真29 下層調査区断面(東壁)



写真30 下層調査区断面(北壁)



写真31 下層調査区断面(西壁)

富沢遺跡第82次調査 写真32 東壁断面

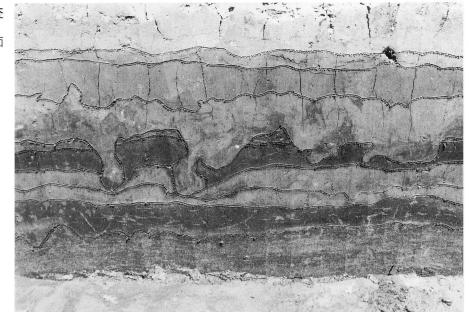


写真33 S D 1 完掘状況 (西から)

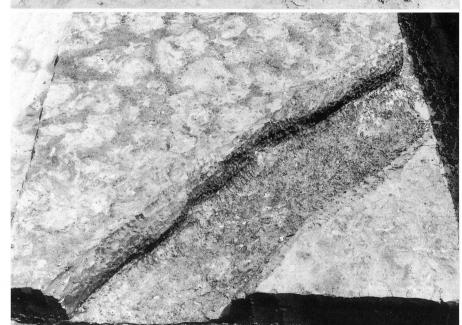
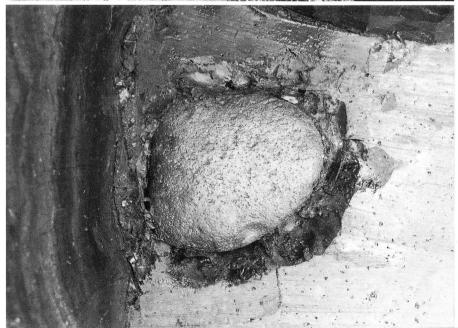


写真34 15層遺物出土状況





富沢遺跡第83次調査 写真35 3層水田跡完掘状況 (南から)



写真36 3 層水田跡水口状況 (北から)



写真37 5 層分布域及び上面 自然流路(西から)

写真38 6層分布域(8層上面) (南から)

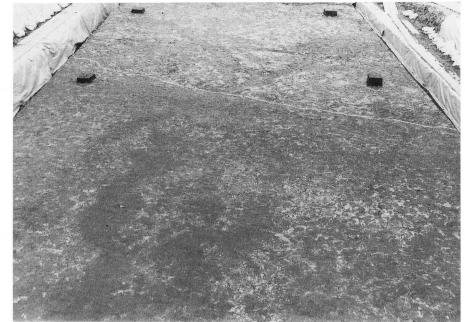


写真39 6層分布域(9層上面) (南から)



写真40 12 a 層水田跡検出状況 (南から)





写真41 12 a 層水田跡完掘状況 (南から)



写真42 13層水田跡大畦畔 検出状況(南から)



写真43 13層水田跡小畦畔 検出状況(北から)

写真44 13層水田跡完掘状況 (南から)



写真45 13層水田跡完掘状況 (北から)



写真46 13層水田跡完掘状況 (北西から)





写真47 3層水田跡段差断面 (東壁 C-4グリッド)

3層

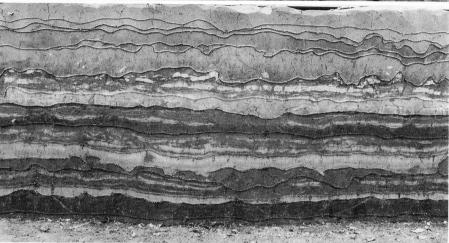


写真48 3層水田跡畦畔断面 (東壁 D-4グリッド) 3層



写真49 3層水田跡畦畔断面 (西壁 C-1 グリッド)

3層

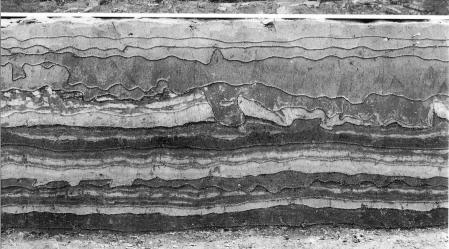


写真50 5 • 6 層分布域断面 (東壁 D-4グリッド) 3層

6層

写真51 12 a・13層水田跡 大畦畔断面 (南壁 F-3・4グリッド)

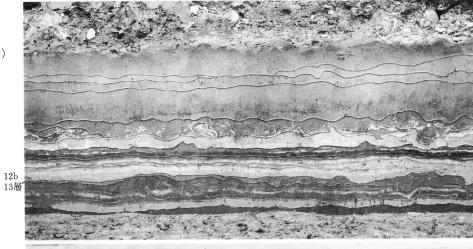


写真52 12 a • 13層水田跡 大畦畔断面 (西壁 D・E-1グリッド)

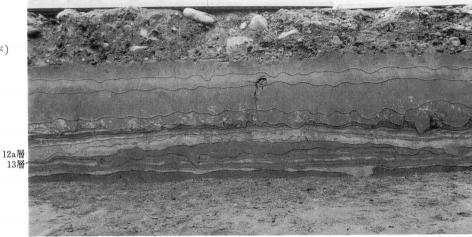
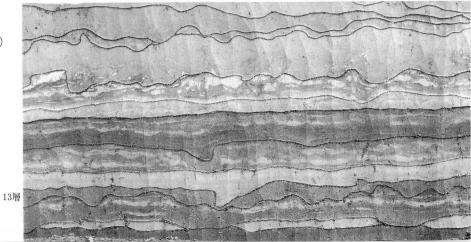
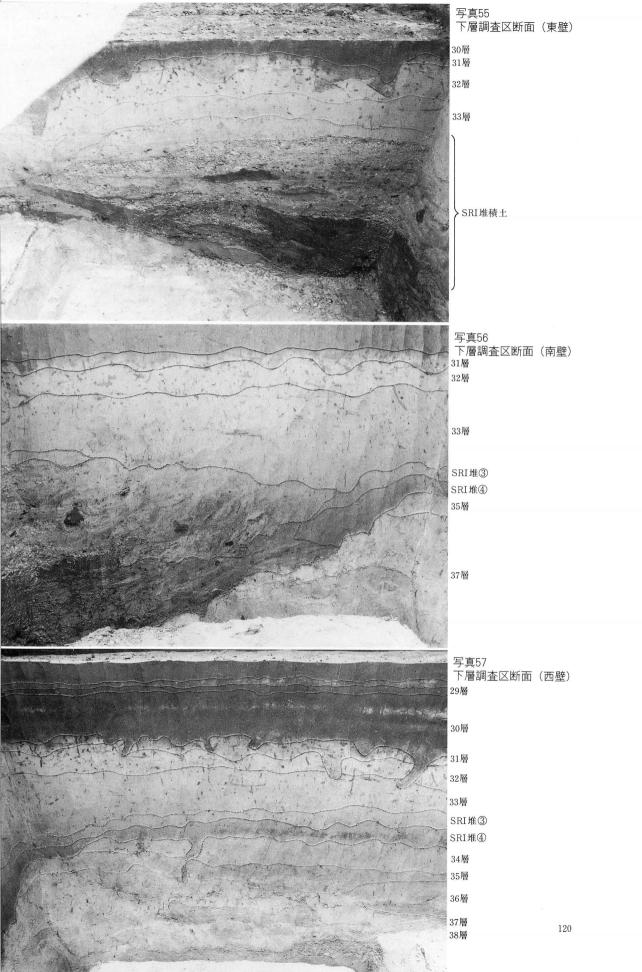


写真53 13層水田跡小畦畔断面 (北西コーナー)



写真54 13層水田跡小畦畔断面 (東壁 B・C-4グリッド)





富沢遺跡第84次調査 写真58 北壁断面

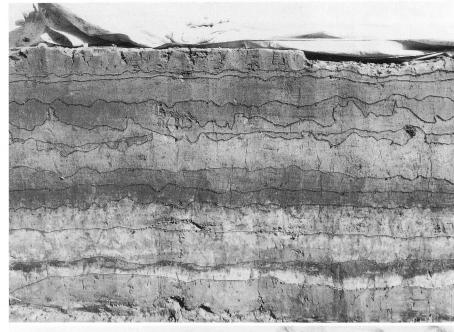
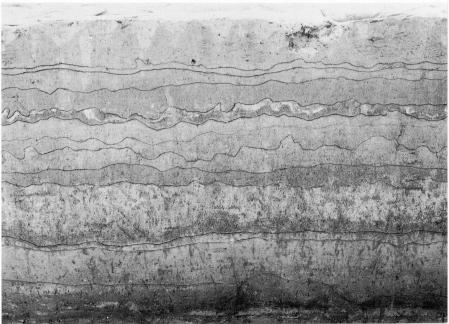


写真59 西壁断面



写真60 南壁断面



富沢遺跡第85次調査 写真61 北壁断面



写真62 東壁断面

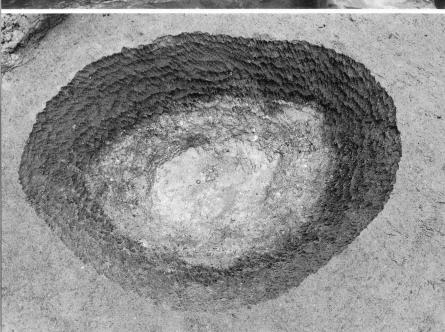


写真63 S K 1 完掘状況 (北から)



写真64 富沢遺跡第78次調査 出土遺物(1)

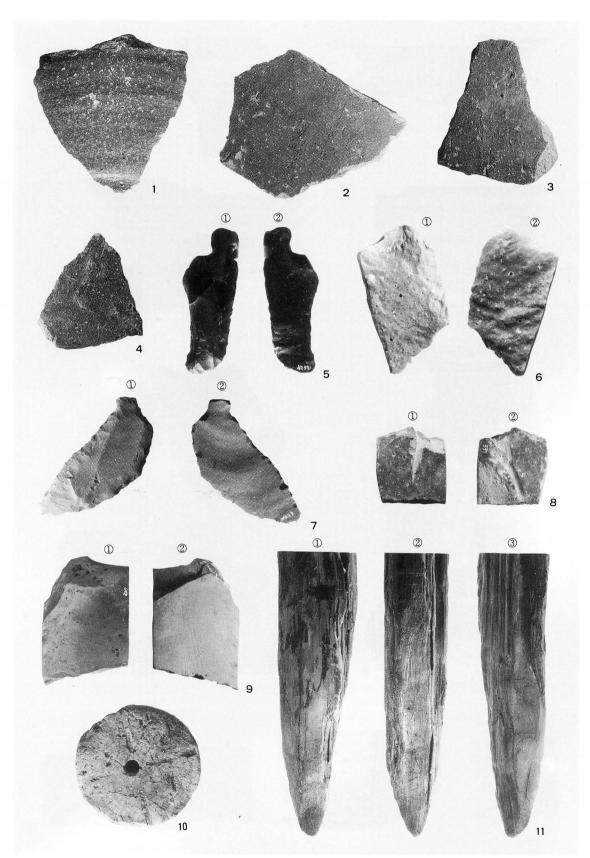


写真65 富沢遺跡第78次調査 出土遺物(2)

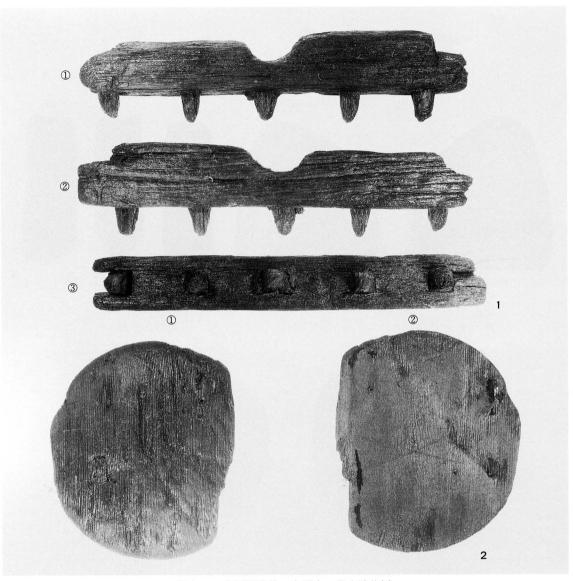


写真66 富沢遺跡第78次調査 出土遺物(3)

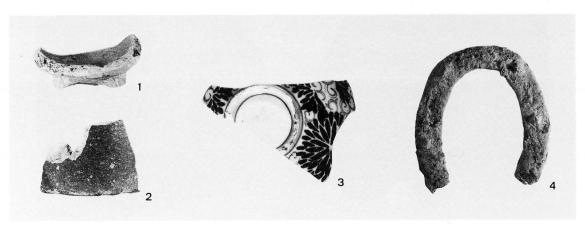


写真67 富沢遺跡第80次調査 出土遺物

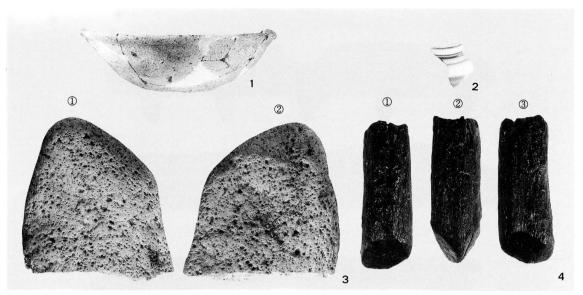


写真68 富沢遺跡第81次調査 出土遺物

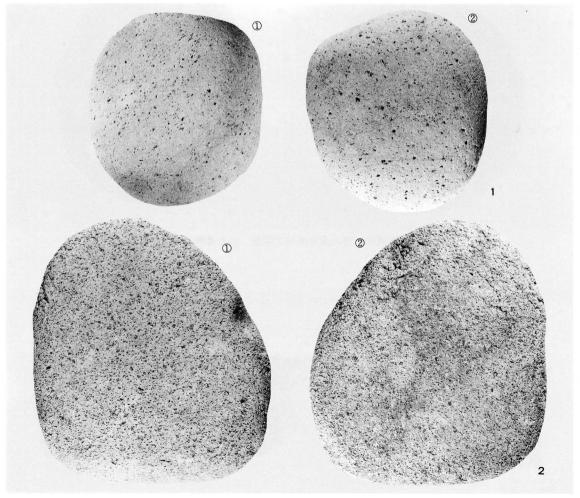


写真69 富沢遺物第82次調査 出土遺物

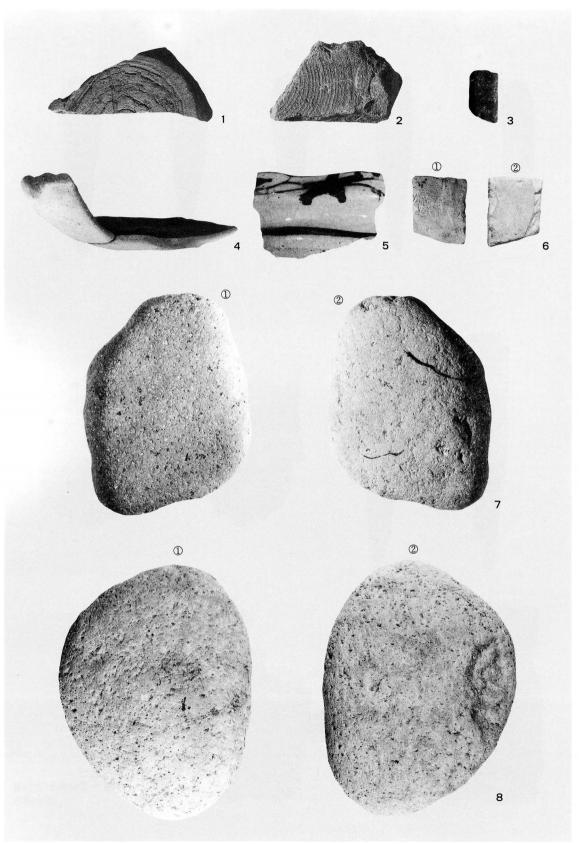


写真70 富沢遺跡第83次調査 出土遺物(1)

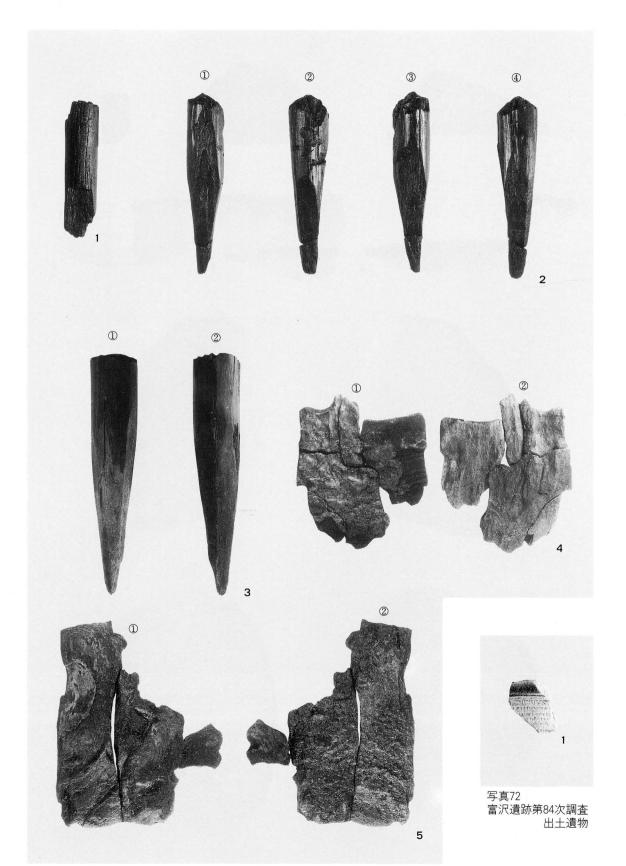
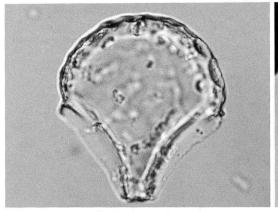


写真71 富沢遺跡第83次調査 出土遺物(2)



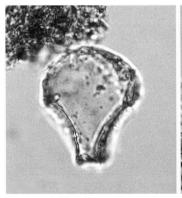
1. 富沢78次 14層 イネ



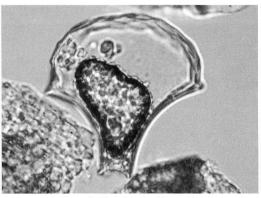
2. 富沢80次9a-2層 イネ



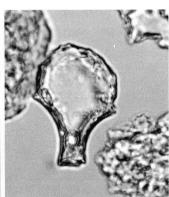
3. 富沢81次11層 イネ



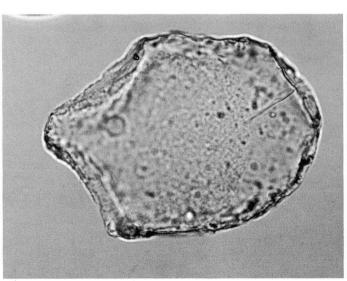
4. 富沢82次 9層 イネ



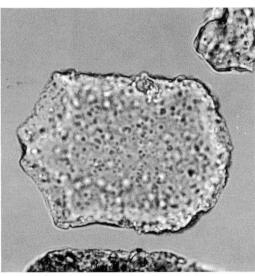
5. 富沢84次 10層 イネ



6. 富沢85次 9層 イネ

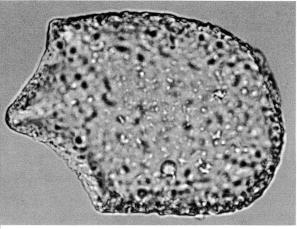


7. 富沢80次9a-2層 ヨシ属

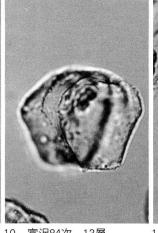


8. 富沢82次 9層 ヨシ属

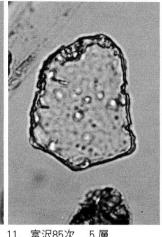
※ 倍率はすべて400倍



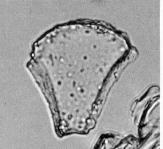
9. 富沢85次 2層 ヨシ属



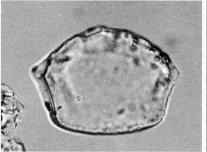
10. 富沢84次 13層 タケ亜科(ネザサ節など)



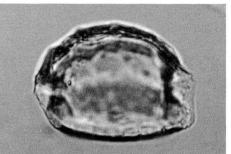
11. 富沢85次 5 層 タケ亜科 (クマザサ属)



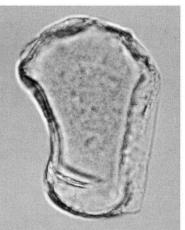
2. 富沢85次 6層 タケ亜科



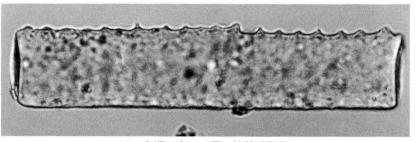
13. 富沢81次10層 ジュズダマ属



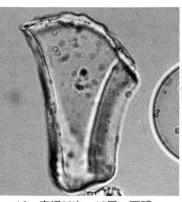
14. 富沢85次5層 ジュズダマ属



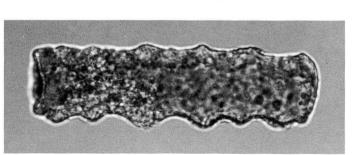
15. 富沢78次14層 不明



17. 富沢85次 11層 棒状珪酸体



16. 富沢83次 13層 不明



18. 富沢85次 11層 棒状珪酸体

※ 倍率はすべて400倍

文化財課職員録

課	長	白鳥良一		
	管	理 係		
係	長	菅原澄雄		
主	事	佐藤正幸		
//	,	高橋三也		
//	,	庄子 厚		
"		佐藤寿江		

	調査	第一係
係	長	加藤正範
主	任	結城慎一
教	諭	佐藤好一
主	任	村上道子
,	"	篠原信彦
,	"	木村浩二
,	"	佐藤 洋
主	事	吉岡恭平
,	'	金森安孝
教	諭	小川淳一
主	事	工藤哲司
/	/	主浜光朗
1	,	長島栄一
1	,	工藤信一郎
教	諭	神成浩志
1	,	竹田幸司
1	,	稲葉俊一
主	事	佐藤 淳
教	諭	川名秀一

 係
 長
 田中則和

 教
 論
 太田昭夫

 主
 事
 佐藤甲二

 ″
 渡部弘美

 ″
 斎野裕彦

 ″
 荒井
 格

 ″
 中富

調査第二係

教 論 五十嵐康洋プ で原裕樹

平間亮輔

"

主 事 渡部 紀教 諭 熊谷裕行

仙台市文化財調查報告書第171集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(5)

一富沢遺跡第78次•80~85次発掘調査報告書一

平成5年3月

発行 仙台市教育委員会 仙台市青業区国分町3-7-1 仙台市教育委員会文化財課

